ヒーロー　BloodyJustice

オズワルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ヒーロー　ＢｌｏｏｄｙＪｕｓｔｉｃｅ

【Ｎコード】
Ｎ１１８１Ｖ

【作者名】
オズワルト

【あらすじ】
私立秋川高校に通う高校一年生、久坂英志はヒーローに憧れていた。
誰かの為に闘えて。
誰かの為に命を賭けて。
誰かの為に平和を守る。
高校生にもなって、子供じみていることはわかっていた。
それでも久坂英志は、ヒーローに憧れていた。

ある日、彼は本物のヒーローと怪人の闘いを目撃する。
憧れていた存在に、彼は心を躍らせる。
だがそれは、厳しい非日常の始まりでもあった。

非日常の中、久坂英志は選択を迫られる。
彼の掴み取る正義はなんなのか。
彼の選ぶヒーローとはなんなのか。

ヒーローの改訂版です。
完全一人称と前半の短縮、いらない描写の削除、ついでに設定の矛盾および追加の複線張りが主です。
説明無く編集する事がよくあると思います。

僕は血まみれのそれを抱える。

一体、今は何時なんだろう。わからない。とりあえず、夜中だと言う事だけは確かだった。

薄暗い場所を僕は歩く。今さっきまで生きていた、そいつに向かって。

足元には大量の血が流れていた。そいつから流れ出てているものだ。

――ああ。

僕は亡骸を抱えた。血まみれで軽い。

上半身だけで、頭部が吹き飛ばされているそれを、僕は抱き寄せる。

僕の制服に血が染み込む。手に真っ赤なそれが滴り落ちる。

ついさっきまで生きていたこいつを、僕が殺した。そうしなければならなかった。だから、僕が、自分の意志で、殺したんだ。

――これが、正義だっていうのか……？

僕が抱える、頭部の無いこいつは、そう言った。白衣を着たあの男は、そうだと言っていた。

涙が零れ落ちた。真っ赤な血に混じって、すぐにわからなくなる。

――ふざけんなよ。こんなの、正義であってたまるか。

それでも、僕は人を殺さなければならない。

そうしなければ、何も守れないから。

僕は人を守る為に、人を殺す。

迷っちゃいけない。

覚悟を決めなくちゃいけない。

だから僕は選択したんだ。

だから覚悟を持ったんだ。

人殺しと言う名の、正義とは思えない正義を、突き進むしかない。

――ちくしょう。ちくしょう。ちくしょう！

僕は亡骸を精一杯に抱きしめて、そして、泣いた。涙が溢れてきていた。押さえ込む事ができなかった。

「うあああああああああああああああああああああ！！」

僕の声が、薄暗いその場所に響いた。

そして僕は、ヒーローに出会う　1

私立秋川高校は進学校だ。

共学で下には中学校もあり、ある程度の成績さえとっていれば、エスカレーター式に上がれる付属の大学もある。ただ、大学の偏差値は高いわけではないので、普通の生徒は高校を卒業したら他の大学へと行く事が多い。

学校の謳い文句は「国公立に５０％合格」。どこの学習塾なんだ、と突っ込みたくなる。

運動部はだいたい、中の下から下の中ほどの強さ。生徒の殆どが大学受験を視野に入れているため、あまり熱心に部活に取り組んでいるわけではない。極稀にベスト１６だとかベスト８のいわゆる強豪ランクまで行く事があるらしいが、僕が付属の中学に入学してからは一度も無かった。

そのほか部活、つまり文化部や同好会などはそれ以上に力が入れられていなくて、実際に活動しているのか、怪しい部も多い。それは申請さえすればどんな部活や同好会でも認められてしまうせいもあるのだが、部員が廃部ギリギリの部や同好会というのも珍しくは無かった。

校長の「せめて部活くらいは自由に」という配慮らしいが、それがどこまで影響があるかはわからない。ただ、毎年のように部や同好会が量産されているせいで、４月から5月にかけての新入部員獲得が後を耐えない。

挙句の果てには、それから身を守るために、昨年「帰宅同好会」なるものが設立されたくらいだ。活動内容は単純明快。「よりよく帰宅を実行する」というというもので、何もやりたくない、と言う生徒は皆、「帰宅同好会」へと入っていった。

そのせいで、部員数がギリギリの部や同好会は殆どが廃部に追い込まれようとしていた。

そして、僕達の同好会も。
「じゃあ、そういうことだから」
そう言って、田上君は軽く礼をした。
「そういうことだからって」
僕は唖然としていた。僕の手には、たった今田上君から渡された、退部届がある。隣には遠藤が椅子に座っていた。背の部分を前にして、その上に両腕を乗っけている。
ここはプレハブ四階建ての部室棟、その四階の一室だ。部屋の中にいるのは同じクラスで腐れ縁の遠藤、そして違うクラスだけれど同学年の、田上君。そして、僕。
「なんで、急にまた」
何か喋らなきゃ、と思って口を開いた。今、田上君がこの部室を出て行ってしまったら、もう二度とここには戻ってきてくれないだろう。そんな気がした。
「この同好会、周りから変な目で見られるだろう？俺達、もう高校生なんだぜ」
田上君は、少し申し訳なさそうに言った。
気さくで、優しい、いい人だ。そんな田上君が退部したいと言い出すなんて、僕は夢にも思わなかった。
「さすがに恥ずかしいよ。『ヒーロー同好会』なんて」
今度も申し訳なさそうに、けれどはっきりと田上君は言った。
ヒーロー同好会。
それは僕が一人で中学の時に立ち上げた同好会だ。とにかく僕は小さい頃からヒーローが好きで、中学生になったら同好会を作ろうと決めていた。
そこに同じ小学校だった遠藤、あと同じクラスの数人で、同好会を結成した。最初は七人くらいはいたと思う。
けれど少しづつ退部していって、結局、中学の終わりは、僕と遠藤だけが残った。同好会がなくなりそうになり、田上君に形だけ、入ってもらっていたのだ。

その後二ヶ月、新入部員は獲得できなかったかけれど、僕はそれでも良かった。この部が卒業まで存続していれば。

「まあ、確かに恥ずかしいよな。高校生にまでなってヒーローってよ」

遠藤が口を開いた。こいつには危機感は全く無い。僕はパニックで考えがまとまらないっていうのに。

「結局、英志が好きでやってるようなもんだしな。田上がそう思うのもわからなくは無い。お前は幽霊同好会員なわけだし」

「遠藤、余計なこと言わないでよ」

「なにいってんだよ。田上もそう考えてるぜ」

「そんなこと」

田上君の表情は、まさにその通り、と書いてあった。

「最初の頃は別にいいかなって思ってたけど、あんなことを言われるようになってから、段々嫌になってきて」

「言われるようになったって、何を？」

「『ヒーロー同好会』のオタク野郎ってさ。特に、高校から入学してきた奴から」

中学生から高校に上がってきた生徒は『ヒーロー同好会』を誰が作ったのか、そして何で田上君が同好会に入ったのかを知っている。外から入学してきた生徒は、誰が作ったのか、何で田上君が同好会に入ったかを知らないからそういう風に言うのだろう。

僕は『ヒーロー同好会』作った張本人だ。僕が『ヒーロー同好会』について何か言われる事で悩んだ事は無かった。けれど、助っ人として、形だけの入部である田上君としては悩みだったのかもしれない。

「恥ずかしいんだよ。別にヒーロー物の番組とかが嫌いってわけじゃないんだよ。ただ、知らない奴にまでそう言われるのが嫌なんだ。なんか俺も向こうに話し掛け辛いし」

つまり、ヒーロー同好会の肩書きが受け入れられなくなった、ということみたいだ。

「でもさ、ほら、人の噂も八十五日って言うし」
「英志、間違ってるぞ」
そんな指摘をする暇があったら、どうにかして田上君を引きとめようとして欲しい。
「大体よ、同好会に入るか入らないかなんて個人の自由だぜ？しかも俺たちはお願いしてる立場なんだから、文句言えないだろ」
そうは言ったって、田上君がいなくなったら同好会が無くなってしまう。僕は何か良い言葉はないかと思考を巡らせるが、ロクな考えが浮かばない。
「大丈夫だよ。きっと、面白がって言ってるだけだからすぐ飽きるって」
なんとかひねり出した言葉は、あまりにも説得力に欠けていた。
「飽きるとか飽きないとか、そういうのを待っているのも嫌なんだ」
田上君は心底嫌そうな顔で否定した。
無意味かもしれない事でもいいから何かを言わないと、田上君はすぐにでも部室を出て行きそうだ。
「そういう人って切り無いじゃん。きっと止めても言ってくるって。だからさ、ここは負けないで」
自分で言ってて、説得できるわけがないと思った。田上君は本当に嫌そうな顔をしているのだ。気さくでいい人の、田上君が。
「負けるとか負けないとかじゃないんだ。とにかく、そういう事だから」
田上君は僕の言葉を無理矢理切って、部室から出て行った。

そして僕は、ヒーローに出会う　2

そういうわけで、ヒーロー同好会は僕と遠藤、たったの二人になってしまった。

田上君の退部届け騒動の後、僕たちは何か活動するわけでもなく、互いの家へと向かった。僕はそういう気分じゃなかったし、遠藤は元々、同好会の活動に乗り気じゃない。

僕と遠藤は一緒に家路を歩いていた。

遠藤の家は学校から近い。僕もそうだ。徒歩で通学できるくらいには、近い。途中まで、というか殆ど同じ道を通って帰る。路地の手前か奥か程度の違いで、お互いの家の距離は百メートルもない。

おまけに家のデザインも同じ、一軒屋だ。丁度同じ時期に僕の家族も遠藤の家族もこの町に引っ越して来て、その時に完成したのがその家だった。

僕らの住む街は、都心とベットタウンの中間にある。この街にマンションはあまりない。立ち並ぶのは殆ど一軒家だ。買い物する場所と言えば長い商店街と、デパートくらい。ゲームセンターやＣＤショップなんてのは、デパートの中にしかない。大きな本屋が一つあるくらいで、なんというか店に関しては、特徴になりそうなものがない。焼き鳥屋とかトンカツ屋とか、魚屋とか八百屋とか、そんな地味な店だったら充実しているんだけど。

その代わりと言ってはなんだけど、特徴的なものとして、高級住宅街がある。高層マンションがいくつも建てられていて、しかも一部屋が物凄く広い。僕らには到底届かなさそうな、とんでもない値段で売り買いされている。そのくせ周辺にある店は大した事ないんだから、謎だ。交通の便も底までいいわけじゃない。都心にはすぐいけるけど、それだけだ。最寄り駅には一つの路線しか通ってない。

僕と遠藤は小学生の頃から、同じ学校に通っていた。腐れ縁、という奴だ。だから、遠藤はヒーロー同好会に入部している。腐れ縁のよしみ、というやつで。まあ、頭数合わせだ。

遠藤は僕のようにヒーローが好きなわけではない。僕はちゃんとヒーローに興味のある部員が欲しい。一緒に番組の話をしたり、漫画について色々語り合える部員が欲しい。

けれど、そんなことを言っている場合じゃなかった。

「三人いないと同好会は潰れちまうぜ」

相変わらず遠藤は人事のように喋っている。というか、こいつの場合は完全に人事なのだろう。遠藤が同好会に入っている理由は「暇」と「他の部活はしたくない」と「腐れ縁」だ。

「わかってるよ。そんな事は。こうならない為に、田上君に入部してもらってたんじゃないか」

三人以上でなければ、同好会は活動が出来ない。活動が出来ない、ということは、部室を追い出され、帰宅部になるという事だ。新入部員云々の前に、同好会自体が消えてしまったら話しにならない。

「気のいい田上が退部したがるくらいだから、我等がヒーロー同好会に対する世間の目は、相当厳しいみたいだな」

「それがよくわからないんだよね。どうして馬鹿にされるんだろう。カッコいいじゃん。ヒーローって。なんであの良さが皆わからないのかな」

「それはともかくだ……ヒーロー同好会なんて言っちゃあいるが、その実態は特撮同好会だからな。明確な活動指針があるわけでもないし。大体さ、部員募集の謳い文句が“ヒーローに憧れてる人募集”だってんだから、そりゃ噂にもなるわな」

“ヒーローに憧れている人募集”というのは僕が部員勧誘の時に使った言葉だ。学校の掲示板にあるポスターにもそう書いてある。

「でも他になんて書けばいいか分らなかったし。それが同好会を作った理由だったから」

ヒーロー同好会を作った理由は単純明快だ。僕はヒーローに憧れ

ている。それについて一緒に語れる仲間と場所が欲しかった。そんなところだ。普通の同好会と同じ。したいから、そうしただけだ。

「もうちょっと上手く書けばよかったんだよ。“特撮好き募集”って書いとけば、そこまで変な目で見られる事も無かったんじゃねぇの。黒魔術同好会なんてのもあるからな。あそこは“占いやってます”、だぜ。なんだよ憧れてるって。変身でもしたいのかよと思われるだろ？」

「変身できるならしてみたいよ」

ヒーローになれるんだったら、なってみたい。憧れというのはそういうものだろう。

「お前のヒーローに対する情熱はおいといて、俺達の世間評価はそれとは別だ。そいつを上げようったって、今更どうしようもない。ヒーローなんて、実際にはいないしな」

冷めた口調で遠藤は言う。そう言われたら、僕に言い返す言葉はない。気が滅入る。

僕が落ち込んだのを察したのか、それとも自分の家の前まで着いたからなのか、僕の肩を叩き、遠藤は口を開いた。

「ともかくさ、まだ同好会が潰れるまでには三日間の余裕があるんだ。それまでにどうにかすればいいんだよ。そんな深く悩む必要はねぇって」

と言って、遠藤は自分の家のドアを開けた。

――評価が最低だとか、ヒーローが実際にいないとか、そんな風に言われて、どうにかできる気がしないよ。

さらに落ち込んだ僕の気も知らず、遠藤は明るい口調で「じゃあな」と言って自分の家へと入っていった。

そして僕は、ヒーローに出会う　3

遠藤の家から八十歩くらい進むと自宅の前へと着いた。いつも思う事だが、遠藤と僕の家は恐ろしく近い。

「ただいま」

僕は鍵を上げ、家の中へと入った。

返事はない。父さんはまだ仕事のようだ。僕の家に母さんはいない。

母さんは僕が一歳の頃に交通事故に巻き込まれて死んだ、と父さんから聞いた。けれど僕にはその記憶がない。

この街に引っ越してきた、というのは覚えている。たしか、幼稚園の頃は父さんが何処か色んな所に転勤を繰り返していたんだっけ。小さな頃、僕を育ててくれたのは、父さんの友達だったらしい。その辺は曖昧な記憶だけれど、幼稚園の仲が良かった友達と離れるとき、号泣したのはハッキリと思い出せた。

あの頃は性別での仲間意識は殆ど無くて、男の子でも女の子でも関係なく仲が良かった気がする。確か一番仲が良かったのは女の子だったはずだ。

もう、名前は忘れてしまったけれど、その子も特撮ヒーローが好きだった。

ただ、母さんの事を殆ど覚えていないというのがなんとなく、悔しい。写真をたまに見ることがあるが、そこに写っている母さんとイメージの中の母さんは一致しない。

ドラマにあるような再婚の話は父さんから一度も聞いた事は無い。今でも父さんは母さんの事が好きなんだろう。

父さんは町の工場に勤めていて、確か今は現場監督を任されている、と聞いた。具体的な仕事の内容は聞いていない。どうして工場に勤めているのに転勤をしてたのか、謎だ。

けど、どんな仕事でも、父さんが一人で働いて一人で僕を養って

くれてる事に変わりは無いから、特に興味は無かった。
僕は階段を上がって自分の部屋のドアを開けた。
自分のベットに倒れこむ。全身の力を抜いて、布団に身体を埋めた。時計は四時三十分を示していた。時計から視線を外すと、フィギュアが目に入る。
それは僕が小さい頃にテレビでやっていたヒーローのフィギュアだった。昔、こっちに引っ越してきたばかりの時、まだ誰も友達らしい友達がいなかった頃、父さんに買ってもらったものだ。
――ヒーローなんてこの世にいない、か。
わかってる。そんなことは。
世の中の常識だ。鳥は飛ぶ、というのと同じくらい当たり前の事だ。
今まで生きていて、正義の味方になんて会った事が無かった。
どんなに優しい人だって、いつでも弱い人のピンチに駆けつけられるかというと、そうでもない。というか、無理なんだ。結局の所、良い人、悪い人なんていうのは人によって印象が違う。
誰からも良い人だと思われてる人だって、正義の味方とは違う。犯罪者を防ぐ為に、何かをするわけでもない。そういうのは警察の仕事だからだ。
だから正義の味方も、きっと、いない。
けれど、だから、憧れる。
だからこそ、どこかに正義の味方がいると僕は信じている。
――ガキだよな……
自分でもわかっている。そんなことは。
高校生に似つかわしくないのだ。こんな考えも、こんな憧れも。
そんな事を重いながら、僕の思考はまどろみの中に溶けていく。

そして僕は、ヒーローに出会う　4

かすかな振動を腰あたりに感じて、目が覚めた。時計は、五時を指そうとしている。日はまだ落ちていない。窓の外では夕焼け空が広がっていた。

制服のズボンから携帯電話を取り出した。液晶には遠藤光一という文字が浮かんでいた。

僕は電話に出るか出ないかで迷った。

遠藤から電話がくる事は稀だ。そして、電話をかけてきた時の用事はロクでもないことばかりだ。これまでのように、「ＡＶ観にこいよ」だとか、「俺の秘蔵エロ画像みせてやるよ」だとか、そんなどうでもよくてロクでもない内容だったら、付き合う気にはなれない。

けれどそのまま放って置くというのも気分がいいものじゃない。もしかしたら、大事な用があるのかもしれない。

そうやって自分に言い聞かせるようにして、僕は通話のボタンを押した。

「よう、英志。元気か？俺は元気だ。ところでお前は家にいるよな？」

「そうだけど。僕、寝てたとこだったんだ。どうでも言い用事なら、寝てたい」

「そんな怒るなよ。お前が寝てたなんて知らなかった。悪かった」

珍しく遠藤が素直に謝ってきた。普段なら、そのまま自分の言いたいことを言っていく奴なのに。そして、素直に謝ってきた時は、大体まともな事を言う。

「お前に渡したい物があるんだよ」
「変な物じゃないよね」
一応、聞いておく。
「安心しろよ。俺はこれまでのお前との付き合いの中で、お前が極度のヒーローマニアだと理解をしたからな。今まで俺は、そのマニアと大切な大切なコレクションを共有しようとしたが、無理だった」
「僕がマニアだとかマニアじゃないとかは置いといて、無理だってわかってくれたら嬉しいよ。」
「普通は興味示すんだけどなぁ……お前が考えているようなことはもう諦めてるよ。もはやこれは悟りの境地と言ってもいい。だから今すぐ来い。例えどんな用事があってもすっ飛ばして来い。必ずだぞ。じゃあな」
「え、ちょっと」
遠藤は一気にまくしたてると、そのまま電話を切ってしまった。
「いや、これはロクでもなさそうな気が物凄くするんだけど……」
さっきのまともな事を言うって考えは、気のせいだったかもしれない。けどまあ、無視するわけにもいかない。
僕は制服のまま部屋を出た。階段を下りて玄関へと向かう。途中でリビングを通ったが、まだ父さんは帰ってきていなみたいだった。
僕は靴を履き、玄関のドアを開けた。
遠藤の家へは真っ直ぐ、八十歩。近い。急ごうとしなくてもすぐに着く。
普通にいつもどおり、例えば学校に行く時とか、コンビニへ飲み物を買いに行く時のように歩き始めた。
その時だった。不意に、唐突に、予期せずに。
視界が真っ白に染まった。

そして僕は、ヒーローに出会う　5

気が着くと、僕はさっきまでと違う場所にいた。よく知っている風景。学校の通学路だった。いつも、僕が通っている道だ。二分もあれば、僕の家へつく。

「なんでここに……」

思い当たるのは、真っ白になったあれのせいってことくらいだ。視界が真っ白に染まって、何も見えなくなった。一瞬、意識を失うような感覚があった。

もしかして頭でも打ったのかと思ったけれど、頭痛がするということはなかった。どこかに違和感を感じているわけでもない。

僕は困惑し、周囲を見回す。その時、視界に巨大な何かが入った。赤いそれは、腕を振リ回し、その腕がブロック塀突き破ってを民家を破壊していた、

――なんだ、あれ。

僕は呆然として、声が出ない。それに目を奪われ、僕は立ち尽くす。

そいつは豚だった。ただ、普通の豚とは違う。赤く、巨大で、二足歩行をしていた。僕はそんな豚を見たことをなかったし、聞いたことすらない。家よりも大きな豚って、存在するのか？

――怪人じゃないか。

そうとしか言いようがなかった。それ以外に当てはめようがなかった。　町を破壊していくそいつは、特撮番組に出てくる怪人そのものだった。

赤い豚は低いうなり声を上げ、住宅を破壊していく。

僕は目の前で起こっていることが信じられなかった。

特撮番組ならかなり見ている。テレビにこういう場面はいくつも

あった。言い方を変えるなら、僕はこんな場面なら見慣れている。けれど、自分がそんな場面に遭遇するのは初めてだ。

こんな日が来るなんて思わなかった。あんなにも、ヒーローに憧れていたのに。

赤い豚が動きを止めた。視線を動かし身体を捻り、何かを探している。

赤い豚に気づかれないように、僕はブロック塀の影へと隠れた。見つからないようにと、しゃがんで座り込む。

赤い豚が何を探しているかはわからないが、もしも僕が見つかったら無事ではすまないだろうという事は感じた。見境なく家を壊しているくらいだから、見境なく人を殺す事だってあるだろう。

赤い豚が動き出した。足音というには大きすぎる音があたりに響く。なんとなくだが、地面も揺れている気がする。

周囲はあまりにも静かで、赤い豚の足音とうなり声以外は聞こえない。

――なんでこんな事が起こっているのに誰も声を上げないんだ？

僕は、あまりにも遅すぎる疑問にたどり着いた。

さっきから誰にも会っていない。こんな、非現実的なことが起こっているのに、誰も出てこない。怯えてるにしたって、誰一人姿すら見せないなんて、そんなこと、あるのか？

時間は夕方の五時くらい。場所は学校の近くの住宅街。帰宅している学生がいたり、買い物帰りの主婦がいるのが当たり前のはずだ。

それなのに、誰もいない。

――ここは本当に僕が住んでいる街なのか？

僕の身体を何か、嫌な感覚が駆け抜け。それるは恐怖だった。僕はこの状況に怯えている。

どこがぼんやりとした感覚の中で感じ取っていたことが、急に鮮明なものに感じ取れた。赤い豚も、誰もいない町も、いきなり現実味を帯びてきた。

徐々に大きくなってくる足音は、確実に僕へと向かってきている。

見つからないように隠れたつもりだったが、赤い豚は気づいていたのかもしれない。

僕は這うようにして近くの家へと向かった。音を立てないように這った、というより恐怖で足がすくんでいた。

もしここが僕の住んでいる街じゃなかったら。

もし僕以外に誰もいなかったら。

一体僕はどうすればいいんだ？

なんとか玄関へたどり着いた。何度も見たことのある家だった。僕が学校へと向かう途中の通学路で、さっきも遠藤と一緒にここを通った。

この家には年を取った夫婦が住んでいる。話したことはないが、会釈程度はしたことがあった。

ドアノブへと手を伸ばす。鍵は開いていた。僕は震える手でドアを開ける。

玄関には二足の靴と、サンダルと下駄が一組ずつあった。

それなのに、人の気配はない。

僕はそのままリビングへと向かった。

そこにはミカンと給湯ポットがおいてあるテーブルがあり、椅子の近くには食べかけの饅頭が落ちていた。窓が開いていて、そこからは庭に干してある洗濯物が見えた。その近くには洗濯物が入っている籠がある。

洗濯物を取り込んでいる途中のように。

「なんだよ、これ」

洗濯物を取り入れるのを途中で止めて出かける人はあまりいないだろうし、食いかけの饅頭をその場に置いて出かける人間もまずいないだろう。まるで、普段の生活の中から人間だけをなくしたようだった。　ここはきっと、僕の知っている街じゃない。

全身から力が抜けて、僕はその場に座り込んでしまった。

直後、コンクリートが砕ける音とともに、僕の上を何か巨大なものが通過した。

「うわっ！」

風圧で僕の身体が吹き飛ばされた。近くでメキメキと木が折れる音が聞こえる。僕の視界には吹き飛ばされた屋根が映っていた。

何かが背中に当たり、僕の身体が止まる。痛みは後からやってきた。自分の目の前で起こったことが信じらず、痛みに意識が向かなかったからだ。

「あ……あぁ……」

屋根が無くなっていた。そしてその向こう側には、赤い豚がいた。その手にで、この家の上半分を吹き飛ばしたのだ。

赤い豚が僕に向かって手を伸ばしてくる。

――に、逃げなきゃ……

そう思っているのに、僕の足は動いてくれない。怯えることしかできない。

僕の身体を巨大な手がつかんだ。そのまま僕は上へと持ち上げられる。

身体を締め付ける力は徐々に強くなっていった。豚の低いうなり声が僕の心臓の音と共に耳の奥で鳴り響いた。

――ここで死ぬ？こんな訳の解らない状況で？

僕はついさっきまで自分の家で寝ていた。その前だって、何も無かったわけじゃないけど、極めて普通の生活を送っていたハズだ。死ぬようなことなんて、こんな状況に陥るなんて、絶対にありえなかったハズだ。

それなのに。

心臓が大音量で鳴り響く。息が荒くなり、頭が内側から殴られているかのような感覚に見舞われる。

見慣れた街と似ている何処かは、僕には何所もが歪んで見えた。

僕は力を振り絞って暴れた。ただこの巨大な化け物から逃れたくて、暴れた。

言葉にならない声を上げ、身体の束縛を解放とうとして暴れた。

それでも僕は逃げ出すことができない。むしろ、僕を押しつぶす

力は増す一方だ。
――痛い、痛い、痛い！
肉が圧迫される。骨が軋む音がした。全身が引きちぎられそうな痛みを感じた。
そして、僕は死を覚悟して――
僕の目の前に、ヒーローが現れた。

そして僕は、ヒーローに出会う　6

子供の頃からヒーローに憧れていた。正義の味方、と言い換えてもいい。

いかなる時でも正義を守り、いかなる場合でも悪を倒す。

どんな強敵にも立ち向かい、どんな危険も乗り越える。

自分が死ぬ可能性があろうとも怖れず、そして必ずやり遂げてみせる。

そんなヒーローに憧れていた。

そして今、僕の前でヒーローが怪人と闘っている。

ポリバケツとその蓋の隙間から見える光景は、あまり現実味が無く、それでいてはっきりとしていた。

一方は黒のプロテクターを付けた人間。もう一方は赤い巨大な豚の化け物。

ポリバケツの中で充満している生ゴミの臭いなんて、どうでもよくなる光景だった。僕の目はそれに惹きつけられてしまう。

黒のプロテクターをした人間は、特撮にでてくるヒーローのような外見をしていた。どこかの番組の衣装だと言われても、違和感は無い。

頭は黒いヘルメットのようなもので覆われいる。バイクに乗るときのようなヘルメットとは全く違い、ところどころが尖がっているヘルメットだ。ヘルメット、というよりは特撮ヒーローのマスクに近いものがあった。

全身にはプロテクター以外に、白い線が所々に入っていた。背中には、ロボットでいうバックパックのような物がついている。

赤い豚の巨大な腕が振り下ろされた。その先には、黒のプロテク

ターをした人間がいる。
「危ない」
かすかな声で僕は言った。子供の頃、テレビに映るヒーローを応援していた時のように。
轟音と共に、アスファルトが砕ける。地面が震動し、道路に書かれた「止まれ」の文字が、破片となって飛び散った。僕が中に入っているポリバケツに、いくつかの破片が当たる。
プロテクターをした人間は、間一髪で赤い豚の腕をに避けていた。そしてそのまま跳躍して化け物を飛び越え、その背後へと着地する。その高さは三メートル以上あった。常人の身体能力をはるかに超えている。
――本当にヒーローみたいだ。
化け物が唸り声を上げながら背後を見た。身体をねじるようにして腕を引き抜いた。身体を相手に向けながら腕を振りかぶり、そして今度は縦ではなく横に腕を振り回す。
腕はブロック塀を破壊して家の一部を破壊しながら、そして目標へと向かっていく。
プロテクターをつけた人間は跳躍した。そしてそのまま化け物の顔面へと拳を叩き込む。
化け物がよろけた。仰向けになって倒れていく。赤い豚の身体が民家へと激突していく。それでも人の声はしなかった。
そのまま追撃をかけるのかと思ったが、黒の装甲を纏ったその人物は、地面に着地するとなにやら右腕のブレスレットを操作し始めた。ダイヤルを回すような仕草をし、そして右腕を前へと突き出す。
光が右腕のプロテクターに集まっていった。機械のモーター音が辺りに響き、バックパックから蒸気が噴出した。化け物はそれに気がついたのか、身体を起き上がらせ、狂ったように殴りかかった。倍以上ある体格の化け物が襲い掛かってくる。
しかし、黒いプロテクターを全身に纏ったその人物は、動じない。特に何かをするわけでもなく、右腕を突き出したままだ。

化け物の拳が叩き込まれた。鈍い音が走った。プロテクターが破壊された音なのかもしれない。

だが相変わらずモーター音と蒸気は出つづけていた。

僕の目には、左手で化け物の手を受け止めている、その人間の姿が映っていた。まるで、子供のパンチを受けるような軽さで。

次の瞬間、発光する右拳が化け物に叩き込まれた。光と轟音と爆風が同時に表れ、そして化け物が吹き飛ばされる。

民家の窓ガラスに罅が入って、瓦がいくつか飛んでいった。僕の入っていたポリバケツはゴミ袋へと倒れこんだ。

化け物は十五メートルほど吹き飛ばされていた。その腹部は発光していて、そこから全身に光の罅が走っていく。そして——砕けた。

化け物は光の粒子となり、消えていった。それを確かめると、プロテクターをつけた人間は僕の方へとやってきた。

僕はポリバケツから這い出す。生ゴミのにおいが鼻についた。気が緩んだのかもしれない。

変わりに胸が高鳴っていた。僕の目の前にヒーローがいる。子供の頃から憧れてたヒーローが。

「立てる？」

プロテクターを装備した腕が差し出された。左腕だ。右腕はまだ若干発光している。

今、僕の目の前にヒーローがいる。

ヒーローの差し出した手を掴んだ。その手には装甲が付いていてゴツゴツしていたけれど、どこか温かかった。

「あの、助けてくれて、ありがとうございます」

僕は立ち上がりながら礼を言った。

さっき、僕が赤い豚に押しつぶされそうになっていた時、目の前にいるこの人が助けてくれた。

豚の顔面を蹴り飛ばし、僕を掴んでいた手が緩んだところを、助け出してくれた。僕がポリバケツの中にいたのは、この人がそのあたりに隠れていたほうが良いと言ったからだ。

目の前の人は本当にヒーローだった。僕の心情的な意味と、外見的な意味の両方で。

黒のプロテクター。

顔を覆うヘルメット。

背中のバックパック。

そして、さっきの必殺技。

僕がテレビで見ていたヒーローと全くと言っていいほど同じだった。

辺りは夕焼けに染まりだしていた。僕が赤い豚、つまり化け物見つけてから少なくとも十五分は経っているだろう。それでも、他人の気配は無いままだない。やっぱりここは僕の街じゃない何処かなんだ。

けれどそんなことはどうでもよかった。

「えっと、本当にさっきは死にそうで、僕、きっと助けてもらわなかったら死んでいたと思います。あの、だから本当にすっごく感謝してて、それで」

「無事でよかった」

プロテクターの向こう側から声が聞こえた。僕は感激して言葉を失う。

一生、夢見たままで終わると思っていた。ヒーローなんて、本当はいないと諦めていた。

憧れたままで、いつかは僕も皆と同じように、興味がだんだん無くなっていくのかと思っていた。

いつかはテレビも観なくなって、懐かしく思い返すだけになるのかと思っていた。

それでも、目の前にいるこの人は紛れもなくヒーローだ。僕を助けてくれて、怪物を倒したヒーローだ。

「気をつけて」

「あ、あの」

そういうと、その人は跳躍して去ってしまった。

僕は呼び止めようとしたが、聞こえなかったのだろう、見向きもしないで遠くへ行ってしまった。
人を超えたジャンプ力だ。僕なんかではとても追いつけない。
けど、仮に追いつけて呼び止められたとして、今の僕では考えがまとまらなくて、ちゃんと話せないだろう。
自分の憧れが本当にあったと知れて、それで十分だった。
それでも呼び止めようとしたのは、僕の目の前から消えてしまったら、二度と会えない気がしたからだと、思う。

そして僕は、ヒーローに出会う　7

「なんていうか、末期って言えばいいのか？　正気とは思えないぜ」
ため息をつきながら遠藤が僕の肩に手を置く。
僕の話をまったく信用してない。まあ、それはそうだろう。僕だって他人がそう言っていても信用しない。
ここは遠藤の部屋だ。僕は座布団の上に座り、遠藤は椅子に座っている。
遠藤の勉強机の上にはノートパソコンがある。勉強をしている形跡は無かった。本棚には漫画が何冊もある。バイクの本も、いくつかあった。参考書は一冊も無い。そして、僕の目の前にはポテトチップスとアーモンドチョコレートの盛り合わせがあった。
「俺はお前との付き合いが長いからさ、笑って済ませられるんだ。けどさ、他人から見たらお前は重度の妄想癖持ちヒーローオタクだぜ？　そこを踏まえて冷静になれよ」
「言ってる意味がよくわからないし。信じられないかもしれないけど、本当なんだ。だってホラ、遠藤から電話貰ってからここに来るまで、かなり時間が掛かっているだろう？」
時計を見ると、夕方の五時二十分だった。
僕が家を出たのが五時前。この約二十分の時間が、あの出来事が本当にあったのだと僕に確信させる。
あの後、ヒーローが去っていった直後、僕の視界は再び真っ白になった。気が付くと僕は元いた場所に戻っていた。自分の家の近くで倒れていたのだ。辺りを見回しても破壊されたような建物は何所にも無い。いつもどおりの街並みだった。
それでも、あれは本当にあったことなんだ。
「確かにお前が呼び出してからこんなに時間をかけるというのは珍しいことだ。けどな、だからって『ヒーローと怪人に会った』って

言われてもなぁ。それに知らない場所に居たとか言うしよ。わけわからん」
「だから嘘じゃないって。本当だよ」
「嘘臭い。ていうか嘘だろ？　またまた、英志君は想像力豊かなんだから」
「だから、本当なんだってば。赤い豚の怪物が現れて、僕、殺されそうになったんだ」
「何だよ赤い豚って。ジブリじゃあるまいし」
「そこに、ヒーローがやってきて」
「変態だろ、そいつ」
「僕を助けてくれて、それで必殺技で赤い豚を倒したんだってば」
「お前、夢の話をしてるんだろ？」
いくら言っても遠藤は信じてくれない。嘘ではないのだけれど。
「まあ、それはそれとしてだ」
「勝手に話題を変えるなよ」
「嫌だ。変えるね。大体、俺はそのためにお前を呼んだんだぜ。本来の目的を蔑ろにする訳にはいかないだろ」
遠藤は机の引き出しから一枚のＣＤを取り出した。ＣＤを受け取ると、表面に油性マジックで「英志のヤツ」と書かれているのいがわかった。
「何これ。すごくアバウトな名前の付け方だね」
「それ、お前が観たいって言ってた特撮の映画のヤツだよ。たまたま見つけたから、落しといた」
「えっと、あ、ありがとう」
僕はびっくりして戸惑ってしまった。遠藤がこんなものをくれたのは初めてだ。
いままではアダルトビデオだとか名前も聴いたことの無い漫画とか、そんなものしか渡してこなかったのに。
「何かあったの？」
そう、勘繰りたくなってしまう。というか、何かあったとしか思

えない。
遠藤は僕の作った同好会に入ってくれて入るものの、特撮を見ることに関してはどちらかと言えば否定的だった。
その遠藤が、どうして。
「別になんでもねぇよ。、ああ、強いて言えば食わず嫌いもよくないのかなーって」
遠藤は皿の上のポテトチップスに手を伸ばした。
「気が引けるなら金でも払うか？　千円でどうだ。手ごろな値段だろ」
「落したヤツで金儲けしたら犯罪だよ」
「英志は固いな。まぁ、いっか。とりあえず用事はこいつな。観終わったら感想教えろよ」
僕は皿の上のアーモンドチョコレートを口に入れた。
「感想って、遠藤はまだ観てないの？」
「いやぁ、俺っていいやつだろ？　だからさ、自分で見る前に親友に見せてやろうと思ったわけよ。俺はその間別のヤツを観てればいいしな」
嘘臭い事を真顔で言ってのける。遠藤っていうのはそういうやつだ。
わけわからないし、変なところもたくさんある。けど、根本ではいいやつだ。
「とにかく、ありがとう。うれしいよ」
嘘か本当かは微妙なところだが、とにかく遠藤が僕の観たかった映画をくれたのは事実だ。
「じゃあ、僕帰るよ。そろそろ父さんも帰ってくる頃だろうし」
「そうか、じゃあな」
遠藤の部屋は一階にある。廊下に出たらすぐに玄関だ。そして僕の家と遠藤の家の距離は近い。ここを出たら数分で家に帰れる。
父さんは六時くらいには帰ってくる。今の時間は五時三十分。今から風呂を洗ったり米を磨いだりと、やることはたくさんある。

僕の家では米を炊いたり洗濯物を干したりするのは僕の役目だ。その代わり、父さんは仕事に買い物をしてくれて、僕の弁当を作ったり晩御飯のおかずを作ってくれる。

「ああ、そうだ。英志」

玄関で遠藤に呼び止められた。僕は靴をはきながらその言葉に耳を傾ける。

「なんだよ」

「いや、さっきのお前の夢の話なんだけどさ」

夢の話、と言うのはさっき遠藤に話したヒーローについてのことだろう。

「お前さ、そいつがヒーローだと思えるの？」

遠藤はまじめな顔でそれを言った。

「どういうこと？」

「そいつはさ、お前を助けるために怪物を倒したんだろ？　怪物だって生きてるんだぜ。もしかしたらさ、怪物にだって何か事情があったかもしれないじゃないか。それでも、お前の言うヒーローはそいつを殺したんだ。それでもお前、そのヒーローが正しいって言えるの？」

この質問は、ふざけてる訳じゃないというのはわかる。僕を困らせたいだけの時はもっと軽い口調で喋るからだ。

けど、今はそんな軽さは無い。本気で答えが知りたくて、僕に質問をしている。

「……死にかけの僕を助けてくれる人が、悪い人なわけないじゃん。それこそ、ヒーローにだってあの赤い豚を倒す理由があったんだよ」

僕は玄関を開け、外へと出た。夕や明けは少し青く変わっていた。暖かいような寒いような、微妙な風が吹いている。

「じゃあね、遠藤」

「ああ、変な事聞いて悪かった。また明日な」

僕は遠藤の家のドアを閉め、歩く。二分も掛からないで、僕は自分の家にたどり着く。

ドアを開け、家へと入る。父さんがいた。今日は早帰りだったのだろうか。

リビングにあるソファーに座り、ぐったりとしている。きっと、仕事で疲れているのだろう。

「あぁ、英志。帰ってきたのか」

父さんは僕に気がつくと、ソファーから身体を起こした。顔を見ると、無気力と言うかなんというか、そんな感じの顔だった。

「何、そんなにつらいの？　今の仕事って」

今はあまり景気がよくない。町工場もそれはきっと例外じゃないはずだ。

「いや、仕事はそこまでじゃないんだが、ちょっとな」

「そっか。今から米を磨ぐから待っててよ。早く帰ってくるんだったら、教えてくれればよかったのに」

僕は米を三合分とって、ボウルに入れた。浄水器の蛇口をひねり、水を出す。米をかき混ぜるようにして磨いでいく。これを数回繰り返せば、あとは水を張って二十分ほど寝かせればいい。その間に風呂場に行って、風呂を掃除してお湯を入れる事くらいはできる。

「済まないな、英志。お前には無理をさせてしまって」

唐突に父さんが口を開いた。

「何言ってんだよ、父さん。たかが家事じゃないか」

そうだ。たかが家事だ。その代わり父さんは働いて、男手一つで僕を学校に通わせてくれている。

「別にいいよ、これくらい。なんなら、今日のおかずは僕が作るよ」

そう、これくらい何とも無い。

今日、僕は死ぬような思いをして、憧れのヒーローに会った。その時の衝撃と感動に比べたら、こんなことは大したことじゃない。

父さんにも今日会ったことを話そうかと考えたが、やめた。

さすがの僕も、父親を相手にしてまでヒーロー、ヒーローと喋るのは恥ずかしい。

「本当に済まないな」

父さんのその言葉は、とても悲しそうで、今にも消えてなくなりそうだった。

彼女の名前は天月葵　1

翌日、ぼんやりとした頭を抱え、起きた。昨日、体験した事が気になって、あまりじっくり眠れなかったのだ。

階段を下りてリビングへ行くと、若干酒臭かった。父さんは僕が布団に入った後、一人で酒を飲んでいたようだ。台所にはビールの空き缶がいくつもあった。

父さんが酒を飲む事はあまりない。やっぱり仕事がつらいんだと思う。

父さんは七時くらいに家を出る。今は七時十五分だ。僕はいつも八時過ぎぐらいに出ている。家と学校が近いからだ。

僕は朝食のパンをトースターで焼き、それにバターを縫って食べた。リビングに置いてあった父さんの作ってくれた弁当をかばんに詰め、身支度をする。

テレビでは、どこかの田舎で集団失踪事件があったと告げていた。物騒な世の中だ。昨日見たような怪人がいなくたって、十分に。

時計を見ると七時四十五分。いつもよりも早い時間だったが、僕は家を出た。

通学路の途中で遠藤と会った。会った、というよりは遠藤が追いかけてきた、というのが正しいか。

「よう、英志。今日は早いな」

若干息を切らせながら、遠藤は喋る。

「今日、俺たちのクラスに転校生が来るんだぜ。知ってたか？」

「転校生？」

そんな言葉は漫画やアニメの中でしか聞かない言葉だと思っていた。

「そう。転校生。どんなヤツかな。可愛い女子だったらいいな」
「あのさ、ウチの学校は転校生の受け入れってやってないんじゃないの？」
僕達の通っている秋川高校は進学校で、外部からの編入は行っていないはずだ。
「それに、今は五月だよ？　こんな時期に転校っておかしいでしょ」
「そこは家庭の事情ってやつじゃねぇの。物凄く頭のいいヤツだったら、ウチの学校みたいなとこでも特例で編入させる事があるかもしれない」
「そうかなぁ。なんか、嘘臭い」
何でこいつは学校にも着いていないのにこんなことを知っているのだろう。
僕は交友関係が広いわけじゃないが、極端に少ないわけでもない。まあ、ほとんどが遠藤つながりなあのだが、友人はいる。
遠藤は「転校生がやってくる」なんて情報を手に入れたら、即座に周囲にばら撒くヤツだ。それなのに、僕は今、この瞬間まで転校生がくる、という事を耳にした事が無かった。という事は、昨日、僕が遠藤の家から帰ってから手に入れた情報なのだろう。
「お前、俺を信じろって。俺は嘘をつかない男だぜ。神に誓ったっていい」
「さらに信じられなくなった。転校生の情報って、誰から聞いたのさ」
「情報源か。教えてほしいか？」
「少し、気になる」
僕の言葉に対して、遠藤はしっかりとタメを作って言った。
「それは、秘密だ。言ったら殺されちゃうからな」
ちょっと殴りたくなってしまった。
横断歩道を渡ると、僕達の通う学校が見えてきた。僕の家から徒歩にして十五分。この間には横断歩道が一つあるだけ。物凄く近い。
校門をくぐると、右手にグラウンドが見える。正面には校舎。校

門から下駄箱までの道の間には、僕達以外にも何人かの生徒がいた。中にはカップルもいる。グラウンドではサッカー部と野球部が朝連をしていた。

「まあ、情報源はともかく、こいつはチャンスだぜ」

「チャンス？　何の？」

「馬鹿だなぁ。ヒーロー同好会だよ。あと一人分埋めなかったら、俺たちの同好会はなくなっちゃうんだぜ。忘れてたわけじゃないだろ？」

「あっ」

正直忘れていた。

昨日は怪物に殺されそうになったりヒーローに会ったり、遠藤から借りた映画を見たりと、別の事が忙しくて、記憶から押し出されてしまっていた。

遠藤は呆れたようにため息をつく。

「俺がこんなにも協力的な姿勢を示しているのに、久坂君はどうでもいいと思ってたんですか。ああ、ショックだ。とてもショックだ。英志がそんなやつだったなんて思いもしなかった」

「悪かったよ。昨日は別の事で頭がいっぱいで」

「赤い豚とヒーロー様の事で頭がいっぱいだったのか？　ふざけんな、現実を見ろよ。俺はお前をそんな弱い男に育てた覚えは無いぜ」

「遠藤に育てられた覚えは無いよ」

「まあな。俺も育てた覚えはねぇ」

「お前……」

「ともかくだ。転校生が男にしろ女にしろ、俺たちの同好会の悪評はまだ耳に入っていないはずだ。他のゴミ虫どもが集る前に、俺たちが奪ってしまえばいいんだよ。同好会は三人になって、お前は幸せだ。いいことしかない」

「そんなに上手くいくとは思えないけど」

世の中、そんなには甘くない。思い通りに、簡単に物事が運ぶなんて事はまず無い。

なのに、遠藤は自信に満ち溢れた顔でこう言った。
「俺に任せろ。なんとかする」
正直、あまりいい予感がしなかった。

彼女の名前は天月葵　2

ホームルームの時間が来た。遠藤は「俺に任せろ」と言ったきり、何処かへ行ってしまった。学校内にいるのは確かだが、一体何所へいったのだろう。僕の後ろの席には、遠藤の鞄が置いてある。

「ねぇ、遠藤君、何かあったの？　鞄はあるけど、教室にいないし」

隣の席の笹倉さんが尋ねてきた。合唱部に所属しているらしい。面倒見のいい人で、遠藤はよく笹倉さんにノートを借りていた。曰く、「笹倉のノートが一番わかりやすい」だそうだ。たしか、笹倉さんも遠藤とは付き合いが長いはずだ。

「野暮用があるっていってたよ。心配しなくても大丈夫だと思う」

「ふぅん、そうなんだ」

「それじゃあ、ホームルームを始めるぞ」

担任が声をかけ、生徒は喋りながらも席に座っていく。遠藤以外は全員出席だった。そして、誰も座っていない席は二つある。

――本当に転校生がくるのか。

「そこの空いてる席は……遠藤がないのか。しょうがないヤツだな」

担任が座席表と照らし合わせながら言った。僕たちがこのクラスになってたから一ヶ月と少しが経過したが、まだ担任の山崎先生は座席と名前が一致していないらしい。

山崎先生はコホン、と咳払いをした。山崎先生はまだ若い先生だ。けれど、仕草が古臭い。

「今日は皆に転校生を紹介する」

教室がざわついた。僕だって、朝に遠藤に聞かされていなければ、声の一つくらい上げていたと思う。

転校生なんて言葉は日常ではまず出てこない。そんな事は普通に

は無い。小学校のころならともかく、進学校の高校では、まずありえない言葉だ。

「それじゃあ、天月（あまつき）、入ってくれ」

ドアが音を立てて開けられた。みんなの視線がそこに注目する。けれど、そこにいたのは。

「――だからさ、入ってみようぜ。俺達の同好会に。活動なんてしなくたっていいんだ。そんなのは、有って無い様なものなんだから。君はいてくれるだけでいい。もう、君なんかと同じ同好会にいられたらそれだけで幸せだよ」

など抜かす、遠藤だった。

後ろ向きに歩きながら、誰かに向かって話を続けている。その相手はどうやら転校生のようだ。僕は窓際の方の席なのだが、僕の位置からだと遠藤が邪魔になって転校生が見えない。

「何をしてるんだ、お前」

山崎先生が遠藤に向かって言った。怒っているのではなくて、呆れたような口調だ。

「あ、先生。今日もいい天気ですね。僕は元気ですよ。それじゃあ、後で。話が逸れたね。とにかくだ、僕は君と一緒の同好会にいたいんだ。だから頼むよ。よろしく！」

遠藤が転校生に手を差し出したらしい。しかし。

「先生。私は何所に座ればよろしいですか？」

転校生の口から出てきたのは、遠藤に対する返事ではなく、山崎先生に対する質問だった。

「ちくしょう、失敗した」

そう言いながら、遠藤は自分の席に座った。

「何やってたの、遠藤君」

笹倉さんが質問した。それはきっとクラスの誰もが抱いている疑問だろう。

「勧誘だよ、勧誘。同好会が人数減っててヤバいから、あの女子を誘ってたんだよ」

僕の嫌な予感は的中していたようだ。

「出会いは早いもの順、第一印象が命というからな。俺の精一杯の誠意を伝えたんだが、駄目だった。敵は強大、俺はあえなく撃沈。いい作戦だと思ったんだけどなぁ」

「あのさ、遠藤。僕は確実に第一印象が最悪になったと思うんだけど」

笹倉さんも、僕の隣で「馬鹿じゃないの」と呟いていた。

「そんな事は無いさ。きっと大丈夫だ」

こいつは何を根拠にこんな事を言っているのだろう。不思議で仕方が無い。

教卓の前では転校生が自己紹介をしていた。紹介、と言えるほど喋っているわけではなかったが。

「天月葵（あまつきあおい）です。よろしくお願いします」

転校生は長い髪をしていた。背は平均的な女子くらい。そして……

「英志、お前、今あの子可愛いなって思ってるだろう」

「いや、そんなことはないよ」

口ではそう言ったが、遠藤の予測は大正解だった。けれど、そんなことがバレたら後が面倒だ。クラスの他の男子も、同じような事を話している。女子はちょっと不服そうだ。

「天月、何か皆に言っておきたい事はあるか？」

山崎先生が転校生へ言った。クラスに早く溶け込めるように、という配慮なんだろう。

「いえ、特に何も」

そう言った転校生の口調は、はっきりとしていた。

普通、こういう時は緊張して何もいえないものなのだろうが、転校生にその様子は無い。何も言いたくないから何も言わない、と言

っているようだった。
「そ、そうか。なら、誰か質問はあるか？」
すると、何人かの男子から手が挙がった。その中には遠藤も入っている。
質問タイム、もとい男子からの質問攻めが、転校生を襲った。
「好き嫌いはありますか？」
「特にありません」
「趣味とかありますか？」
「ありません」
「何で転校してきたんですか？」
「親の都合で」
「好きなバンドとかありますか？」
「音楽は聴きません」
「テレビは何観ますか？」
「テレビはあまり観ません」
「彼氏いますか？」
「いません」
とまあ、こんな具合に。
「表情一つ変えないとはな」
質問を終えた遠藤が呟いた。「彼氏いますか？」と聞いたのは遠藤だ。
「何聞いてんだよ。こっちが恥ずかしい」
「まあ、隣のヤツに頼まれたからな」
そう言って遠藤は左隣の佐藤君を指差した。
「ま、お前も聞きたかったんだから別にいだろう？」
「ちがうって」
ホームルームも終わりの時間になってきた。
「それじゃ、天月はあそこの空いている席に座ってくれ。皆、仲良くするんだぞ」
丁度その時、鐘が鳴った。

係りが号令をし、ホームルームが終えると、山崎先生は職員室へと帰っていった。山崎先生はいつもなら鐘が鳴ってもホームルームを続けるが、今日は早めに切り上げた。珍しい。

「気を使ったわけね」

遠藤が廊下を見ながら言った。そこには転校生を一目見ようと集まった、男子女子問わず生徒が沢山いた。

そして、もうすでに転校生の周りに包囲網ができている。

「これじゃぁ、同好会に誘うのは無理そうだね。近づけそうに無い」

それ以前にどんなに頼んでもあの転校生が『ヒーロー同好会』に入ってくれるとは思えない。

けれど、遠藤はまたもや堂々と言い放った。

「大丈夫だ。俺に任せろ」

その言葉で、僕は早く同好会に入ってくれそうな人を見つけよう、と決心した。

彼女の名前は天月葵　3

昼休みになった。教室の中では弁当の匂いが充満している。僕も、父さんの作ってくれた弁当を食べていた。

ホームルームが終わってから何人かの人に声をかけたが、結局、誰一人として同好会に入ってくれなかった。例の「帰宅同好会」の生徒にも声をかけえたが、あまり言い返事は返ってこなかった。どうやら、「ヒーロー同好会」というステータスを得たくないようだ。

「何もしなくていいから」と言ったのに断わられたという事は、つまりはそういう事だろう。もう少し、当たり障りの無い名前にすればよかったかな、と思う。

「手ごわいぜ、彼女。俺、全然相手にされてない」

そう言ってきたのは遠藤だ。僕の後ろで購買で買ってきたパンを食べている。

「そいやあ知ってるか？　天月葵って、バレーの時間の時、すごかったらしいぞ」

「ああ、知ってる。運動神経抜群なんだって？」

聞いた話によると、天月葵は体育で行ったバレーボールで、類まれなる運動センスを見せ付けたらしい。バレー部を凌駕するほどの腕前だったと言う。

「お陰で運動部という強大な敵を作ってしまった。それにあいつ、スタイルもそこそこだからな。下心丸出しの野郎どもが沸いてる。特に水泳部とか水泳部とか水泳部とか」

「遠藤も下心丸出しだろう？　遠まわしに付き合ってくださいって言ってるようなもんじゃないか」

「いや、それは違う。俺はお前の為を思って行動してるんだぜ？

それに、人はいつ死ぬかわからないんだ。もしその時彼女がいたら、可愛そうだろう？　だから俺は彼女はつくらん」

信憑性が全く無い。

とにかく、遠藤を当てにできないことが確定したということは確かだ。

正直、一日目で新しい同好会のメンバーの獲得ができなかったら、次の日からも空振りに終わってしまう気がしてならない。こうなったら、中学の時に同好会のメンバーだった人たちに頼むしかないかもしれない。泣き落としなんて事はしたくないが、そうするしかない気がする。

「つーかよ、何で英志はそこまで『ヒーロー同好会』に拘るんだ？　話題の合いそうな奴を見つけて、そいつと家とか店とかで話すだけなら、同好会の必要ないぜ？」

「それはそうなんだけどさ」

他人にそういった趣味を知られたら嫌な顔をする人はいるだろう。田上君みたいに、「ヒーロー同好会」という肩書のせいで肩身の狭い思いをする人もいるかもしれない。でも。

「なんていうか、誰かに隠れてやるより、堂々としてた方がきっと楽しいと思うんだよね」

僕はそう思う。他の人は違うかもしれないけど、僕はそう思ってる。

「お前の考えてる事は、イマイチよくわからん」

「僕だって、遠藤のことがわからない事がよくあるよ。ホームルームでの事とかさ」

「過ぎた事は水に流せよ。つーか、飯食った後どうしようかなあ」

「僕は弁当を食べ終わったら勧誘にいくよ。遠藤は？」

「言わせないでくれよ、恥ずかしいから。俺はピュアボーイなんだぜ？」

遠藤はなぜか頬を赤らめて言った。どうせ天月葵に勧誘という名のちょっかいを出しにいくのだろう。

というか、自分から話を振ってきたくせに、何て事を言うんだ。こいつは。

「クールで手厳しく運動神経抜群でスタイルもよく、おまけに美人ときたもんだ。なんかのギャグだろ、あいつは。もう少しこう、隙っていうもんがあってもよさそうだけどな」

「ギャグとか言うなよ。失礼にもほどがある。それに、天月さん来てるよ」

噂をすればなんとやら、だ。天月葵が数人の女子と一緒に教室に入ってきた。その中には笹倉さんもいた。転校生を放っておけなかったのだろう。

「つうか彼女、こっちに来てるぞ。俺の積極的なアプローチが実を結んだんだな！」

パン、と遠藤が手を叩いた。

「いや、笹倉さんの席に行きたいだけじゃないの？　いつも女子はこの辺で固まってるし」

「まあまあ、見てなって」

例のごとく、遠藤にはよくわからない自身が満ち溢れている。

笹倉さんが自分の席に座った。そのほかの女子も、自分の椅子を持ってきてその周りに座った。天月葵もそうしていた。

「どう？　俺と一緒に同好会に入ってくれる気になった？」

そこに遠藤が話しかけに言った。見てるこっちが恥ずかしくなってくる。

「遠藤君、もう止めたほうがいいわよ。天月さん、困ってるじゃない」

笹倉さんが立ち上がった。他の女子も口には出さないが笹倉さんと同じ事を思っているのだろう。その目には敵意があった。

その一方で天月葵は別のところを見ている。辺りを見回し、何かを探しているようだ。

「あのなあ、こっちは廃部の危機なんだよ。いや、同好会だから廃会か。まあ、そんな事はどうでもいいんだ」

「なんで関係の無いことで自己完結してんのよ。気持ち悪い」
「うん、まあ、今回は俺が悪かった。ともかくさ、俺は天月葵に同好会に入ってほしいの。合唱部の美由紀はお呼びじゃないの。お前が代わりに入ってくれるって言うなら別だけど」
美由紀、というのは笹倉さんのことだ。
「うっさいバカ。なんで私がアンタのよくわからない同好会に入らなきゃいけないのよ」
笹倉さんの頬が赤くなったのは気のせいだろうか。
「言っとくけど、そのよくわからない同好会を設立したのはそこにいる英志だからな。お前の言葉はすべて英志の胸に突き刺さったぜ」
遠藤が僕を指差した。僕を話題の中に盛り込むのは止めてほしい。遠藤と笹倉さんの口喧嘩は、今、いろんな人からの注目を浴びかけているのに。
笹倉さんは僕がいることに気がついていなかったか僕がいることを忘れていたのか、僕を見ると早口で誤ってきた。
「久坂君、いるってわからなくて、いや、えっと、そういう意味じゃなくて、このバカがよくわからないって事で、同好会のことがおかしいって意味じゃなくて、いや、うんと、ゴメン……」
「いや、いいよ。気にしてないし」
僕は笑って答える。正直、存在を認識されていなかったと言うのは、ちょっと傷ついたけれど。
「アンタのせいだからね！」
笹倉さんが遠藤を睨みつけた。声を大きくしたせいで、余計に注目が集まってしまった。
「落ち着けよ、美由紀」
「何よ！」
笹倉さんと遠藤の言い合いはヒートアップしてしまった。顔を真っ赤にして詰め寄ってくる笹倉さんを、なぜか遠藤がなだめている。

彼女の名前は天月葵　4

「どうどう」
「バカにしてるの！？」
笹倉さんが怒るのも、わからなくは無い。
「一体、何やってるんだろう……」
ため息が出た。天月葵にひたすら話しかける遠藤を見ているのは恥ずかしいが、笹倉さんと痴話喧嘩もどきをしている遠藤を見るのも、違う意味で恥ずかしい。どうせなら、まだ勧誘を名目にしている方がマシだ。
遠藤のターゲットだった天月葵はというと――
「いた」
天月葵が声を発した。声というよりは、呟きと言った方が正しいかもしれない。
そして、彼女が立ち上がった。殆どの生徒は遠藤と笹倉さんの痴話喧嘩を見ていた。だから、多分、彼女の行動には気がついていないと思う。
天月葵は僕のほうに向かって来た。
無言で、無表情で、今朝のホームルームの時のように、遠藤の言葉を無視し続ける時のように、歩いている。
「久坂君」
「は、はい」
天月葵が発した言葉に反応し、僕は反射的に返事をした。
なんで天月葵が僕のところにきたのかが解らなかった。　それに、天月葵は僕の名前を呼んだ。僕は自己紹介なんてした覚えはないし、先程の様子から察するに、彼女が遠藤と笹倉さんの痴話喧嘩を聞いていたとは思えない。
どうやって僕の名前を知ったのだろう。
そんな疑問は、次の言葉で吹き飛んだ。

「今日の放課後、時間ある？」
そんな言葉を、天月葵は表情一つ変えずに喋るのだ。
「着いてきてほしい場所があるんだけど」
僕は驚いて言葉を失ってしまった。そんな事を言われるだなんて、思いもしなかったから。
それでもなんとか「別に無いけど」という一言をひねり出した。
「そう。よかった」
そう言って、天月葵は踵を返した。
「あのさ」
僕は何も考えず、そんな言葉を口走っていた。
「入る部活って決めてるの？」
天月葵を引き止めるような形になる。彼女は席へ戻ろうとするのを止め、僕の方へと顔を向ける。
何でそんなことを言ったのかはよく解らない。ただ、色々と混乱していたせいだと思う。
「決めてないならさ、僕達の同好会に入らない？　遠藤が、えっと、遠藤って言うのはあのうるさい奴の事ね。その遠藤が何回も言ってると思うんだけど、僕達の同好会は人数が足りないんだ。もしよかったらどう？」
僕はそれを一気にろくに息継ぎもせず喋っていたような気がする。息が苦しいはずなのに、頭の中が真っ白になっていて、そんことも考えられなかった。
僕の話を聞くと、天月葵は考え込むように瞼を閉じた。
ほんの少し、間が空く。その時の僕の心臓は、とにかく暴れまくっていた。
そして、目を開くのと同時に天月葵はこう言った。
「いいわ」
それだけを言うと、天月葵は女子たちの固まっていた場所へ戻っていった。
天月葵が去ってから、僕は座ったままだった事に気がついた。せ

めて、目線ぐらいは合わせるべきだったかもしれない。
僕と天月葵のやり取りを遠目から見ていたのか、遠藤は皆に聞こえるような声でこんなことを言っていた。
「なあ、美由紀」
「何よ！」
「俺はモテないと思うんだ」
「は？」
「好き放題やってるし、正直うざったいだろうし、俺が女子にモテないのはわかるんだ」
「遠藤君、アンタ、何言ってるの？」
「それでもさ、俺があんなにひたすら話しかけても完全にシカト決めてた天月葵が、何故か英志に自ら話しかけて、さらには何であんなに好意的なのか、俺は理解ができないんだ。あいつだってモテるわけではないのに、どうしてこうも差がつくのか、俺には納得できないんだ。これが月を見るスッポンの気持ちか。雲泥の差って奴か。うわ、なんだこれ。悲しくなってきた。なあ、どう思うよ、美由紀」
「わ、私は知らないわよ」
「英志、後で屋上に行こうぜ。いや、つうか来いよ。必ずだぞ。のしてやるからな！」
最後に遠藤が何を言っていたが、そんなことは僕にはどうでもよかった。
ともかく、僕は何故か天月葵と放課後に何処かへ行く約束をし、彼女を「ヒーロー同好会」へと誘うことに成功していた。

彼女の名前は天月葵　5

帰りのホームルーム中、僕は山崎先生の言っていることが全く頭の中に入ってこなかった。

原因は一つ。昼休みに天月葵と何所かに行くという約束のせいだ。

僕は女子との係わり合いに積極的なわけじゃないし、普通の男子高校生よりは女子に対する興味が無いという自信がある。

けれど、そんな僕だって、転校生の美少女と何処かに行く、という約束を交わしたらどうしたって気になってしまう。

「英志はいいなあ。放課後は愛しの天月さんとデートだもんなあ」

後ろから冷かしてくるのは遠藤だ。

昼休みの時から、ずっとこんな調子だ。自分が無視され続けていて、僕に対しては彼女の方から話しかけてきたのが気に入らないらしい。

「多分、そんなんじゃないよ」

「ほう。多分。多分か。つまりはそういう期待が無いわけじゃないんだな？でも、愛しの彼女は転校初日から掃除当番だ。残念だな。待たなくちゃいけなくて。いや、待つ時間も幸せのうちか？」

ウチのクラスは出席番号順で掃除当番を決めている。天月の出席番号は四。その以降の出席番号は一つずつ、ずれたことになる。

ホームルームが終わり、掃除が始まった。僕は荷物をまとめ、廊下へ行くことにした。

僕が教室にいたって掃除の邪魔になるだけだし、掃除が終わるまで待つんだったら何所にいたって一緒だ。

「やあ。久坂」

廊下に出た瞬間、声をかけられた。声の主は田上君だった。昨日彼の出した退部届けは、今、僕の鞄の中に入っている。

「田上君。どうしたの、一体」

正直、僕と田上君の接点はあまり無い。中学二年生の頃、その時に一度だけ同じクラスになったことがあったが、それっきりだった。なにか接点があるとすれば、「ヒーロー同好会」くらいのものだったが、田上君は昨日、僕に退部届けを出している。きっと先生にも退部届けを出していることだろう。

「なんていうか言いにくいんだけど」

田上君は気まずそうに言った。

「やっぱり、同好会を辞めるの、取り消そうかと思って」

「え？」

僕はびっくりして、手に持っていた鞄を落としてしまった。

「おう。どうしたんだよ、田上」

僕の背後から遠藤が現れた。

「お前も天月さんを見に来たのか？　しかし、彼女には先約がいるぞ。まあ、見るのは自由だ。その相手も文句は言うまい」

「ちょっと、遠藤」

「それマジ？　誰だよ、相手って」

田上君は興味津々だ。けど、僕としてはその相手が誰だか、知られたくない。

「田上君が退部届けを取り消すってさ！」

僕は田上君の言葉を掻き消すように叫んだ。それを聞いた遠藤は、田上君を見た。というか睨みつけた。

田上君はそれに気おされたらしく、一歩後退りをする。

「何んで睨んでんの」

この状況でどうして睨むのかが、僕には判らなかった。

「そうか。お目当ては天月葵か」

遠藤が口を開いた。

「なるほど、大体わかったぜ。お前がどんなヤツなのか」

「なんだよ。どうしたんだよ、遠藤」
僕は遠藤が心配になってきた。今日一日の行動で遠藤が変な奴だというのは証明済みだ。
けれどその上に、ぶつぶつと独り言を呟くようになったら、変人を通り越して犯罪者予備軍の仲間入りだ。一応友人として、あまり人の道を外れてほしくない。
「お前、どうして田上が急に辞めないって言ったのかわからないの？」
まるで世間一般常識を知らない人間を馬鹿にするような口調で、遠藤は僕に問いかけた。しかし、僕には全く見当が付かない。
無言でいる僕を見た遠藤は、あのな、と前置きをしてから喋った。
「田上はな、あのクールで手厳しく運動神経抜群でスタイルもよく、おまけに美人な天月葵と一緒の同好会に入っておきたいんだよ。だから退部届けを取り消すって言ってんの。つまりそういうこと。男の子なんだから当たり前だろ？」
当たり前と言われても、とまで考えて、僕は理解した。
もしかしたら、田上君は彼女に惚れているのかもしれない。
そうでなくとも、好意は抱いているはずだ。だから、なるべく近くにいたい。つまりはそういうこと。
「お、おい。止めてくれよ」
それを公衆の面前でさらけ出された田上君はたまったもんじゃない。他の生徒からのからの視線を気にしている。戸惑っている。
「まあ俺はこういうヤツが出現することまで見越して、彼女を誘ってたんだけどな」
「そ、そういえばさ、なんで天月さんは内部生のクラスに転入したんだろうね」
田上君が無理やり話題を変えようとした。
内部生、というのは中学生の頃からこの学校に通っている生徒のことだ。この学校では進路の進みの違いから中学から入った生徒と、高校から入った生徒は分けられている。

「よくわからないけど、普通は高校入ってきたやつと一緒のクラスにすると思うんだ。なんでだろうね」
「そこは大人の事情ってヤツだろ。まあ、俺達みたいな純粋無垢な学生の知ったこっちゃ無い範疇の話だ。気にするだけ無駄だ、無駄。もしかしたら、彼女のバックには巨大な政府お抱えの組織が付いていて、その組織の手引きでこの学校に入学したのかもしれないぜ」
どうやら田上君の作戦は成功したらしい。周りの生徒の反応はともかく、遠藤の思考は完全に切り替わった。

「政府お抱えの組織なんて話は置いといてさ」
「置いとくなよ。重要だろ」
「俺たちって中学生の頃からほんの少しだけど高校の内容を先取りして勉強してるだろ？　だから、転校生が内部生のクラスに入るって、おかしいと思うんだ」
田上君の疑問は正しい。それは、僕も思っていたことだった。
中高一貫生のメリットの一つに、中学生の頃から高校の内容を勉強し、普通の高校生よりも早くカリキュラムを終えることができる、というのがある。僕たちは普通の高校とは勉強している範囲が違う。少し進んでいるんだ。
けれど、高校から入ってきている生徒の勉強している範囲は、他の学校と大して変わらない。だったら、転校生は高校からのクラスに転入するのが普通なんじゃないだろうか。
「そんな堅苦しいこと考えてどうするんだよ。それより面白いことがあるんだ。英志の野郎、放課後によ」
「遠藤、やめてよ」
油断の隙もありはしない。こいつは、ともかく人の恥ずかしいことをばら撒きたくて仕方が無いらしい。
「何？　俺、それちょっと興味あるんだけど」
「だろ？　ほら、田上も知りたがってるし、いいだろ？」
「そんなの関係ないよ」
そんな理屈で暴露されるだなんて、たまったもんじゃない。
今、廊下にはたくさんの生徒がいる。もし遠藤が言いたい事を全て暴露したら、僕はきっと主に男子生徒からの怒りの視線を浴びるだろう。
「英志、お前顔が赤いぞ。まあな。お相手があの愛しの彼女だもんな。口じゃあ否定しているが、満更でもないんだよな」

赤くなってない、と思う。多分。
「愛しの彼女？　それって誰だよ。俺にも教えてくれよ、久坂」
「だから違うって」
「久坂君」
突然、後ろから声をかけられた。
振り向くとそこには天月葵がいた。もしかしたら、今の会話を聞いていたのだろうか。
そうだとしたら、僕はすごく恥ずかしい。きっと彼女は、そういうつもりで僕を誘ったわけじゃないのに。
「行きましょう」
僕は無言で頷き、それに従った。遠藤と田上君が何も言わずに道を開ける。二人とも、突然に現れた天月葵に驚いているんだと思う。僕だってそうだ。
僕と天月葵は二人で廊下を歩いていく。
途中、生徒の視線、特に男子生徒からの視線がきつかった。天月葵はなんともないのだろうか。僕にとってこんなことは初めての経験だったから、緊張して仕方が無かった。
「どういうこと、あれ」
「天月葵が、英志の放課後の相手って事」
「えっと、よく状況が飲み込めないんだけど」
「天月葵の先約は、なんと久坂英志君だったってことだよ」
「……マジ？」
「マジだよ」
二人の会話が聞こえてきたけれど、聞かなかった事にしよう、と思った。

黒のキャンピングカー　1

僕達二人は学校の外へと出た。大通りを二人で歩く。
校内での視線の鋭さは相当のものだった。学校の外でもそれはまだ続いている。主に、帰宅途中の生徒からだ。
僕の先を行く天月葵は、僕の家とは逆方向へと向かっていた。その方角にあるのは洒落たカフェや値段の張る料理屋、そして高級住宅街だ。
天月葵は何も喋らず先を行く。
何か話題を切り出そうかと考えるが、よく考えれば僕は天月葵の興味のありそうなことを何も知らない。転校初日の生徒について、知っている事がある方がおかしい。そもそも、僕と天月葵がこうして並んで歩いている事自体が間違ってる。
そうして無言のまま歩いている内に、カフェや料理屋を通り過ぎていった。
「あの、天月さん？」
「何」
彼女の返事はそっけない。遠藤曰く、クールで手厳しい。
「僕達、何所に向かってるんでしょうか」
「私の家」
僕は立ち止まってしまった。
聞き間違いじゃなければ、家、と言ったと思う。いや、でも、そんあことあるわけないし。
「どうしたの？」
彼女が不思議そうに問いかけてきた。驚くほどのことでもないじゃないか、と言っているように。

「いや、ごめん。なんでもない」
もう、わけがわからない。
僕は考えるのも面倒くさくなって、歩き出した。
どうせ、彼女はなんとも思ってはいないんだ。僕だけ振り回されてるみたいで、馬鹿らしい。
昨日からこんなことばっかりだ。気がついたら変な所にいて、変な怪物に殺されかけて、ヒーローに助けられて。転校生が来て、いきなり話しかけてきて、何故か約束をさせられて。
どれだけ驚けばいいんだろう。なんか、昨日のあの時からの時間の密度が途轍もなく濃い気がする。
「私の家、もうすぐ着くから」
高級住宅街の近くに来た所で天月葵が言った。さっきのは聞き間違いじゃなかったらしい。
ここの住宅街は、僕みたいな庶民には夢のような場所だ。幅の広い道の横には、手入れの行き届いた街路樹。デザインのよい街頭がいくつも並び、夜になると木にくくりつけられた電球がライトアップされる。ここにはいくつもの高層マンションが立ち並び、二十階なんてざらだ。この街の中で、異様に浮いている。この場所だけ、建物が高すぎるのだ。
僕らの街は、都心ほど栄えているわけでもないし、マンションが大量に建造されて得いるわけでもない。というか、マンションなんてここの高級住宅街くらいのものだ。安アパートならば、何軒かあるけれど。
駅から近く、都心へも近いというこの住宅街は、いくつものセキュリティによって守られている。聞いた話では、事前に頼みさえすれば衣類のクリーニングや、部屋の掃除までしてくれるサービスがあるらしい。夜景の面では少々物足りないのかもしれないが、その分、サービスを売りにしているということだろう。
もしかして、天月葵はそんなところに住んでいるのだろうか。
金持ちで、お嬢様、か。ありえない話じゃない。

だがそれは僕の勘違いだったようだ。
彼女は高級住宅街を過ぎても歩みを止めなかった。
この先には人が住めそうな、家と呼べそうなものは無い。川を越えた先に工場があるくらいだ。その中には親会社の倒産で、廃工場になっている工場もある。
「ここ、降りて」
そう言って彼女は川原の土手を下っていく。僕は彼女についていった。
ここに来るのは久しぶりだ。中学二年生以来だろうか。
川原にはいくつかのビニールシートで作られた家と、ダンボールが捨てられている。雑草これでもか、というくらい生えている。地面はぬかるんでいて、靴には大量に泥がついた。
それと少し離れた場所に黒いキャンピングカーが留めてあった。窓はカーテンに覆われていて、上には巨大なアンテナみたいな物が付いている。不気味だ。誰か住んでいるのだろうか。
「着いたわ」
そう言って彼女が止まったのは、黒いキャンピングカーの前だった。

黒のキャンピングカー　2

――このキャンピングカーが家？　いや、確かに人は住めるかもしれないけど。

彼女は制服であるブレザーの裏ポケットから黒いカードを取り出すと、それをドアの近くにあった差込口に入れた。

少しすると、パネルと小型のカメラが出てくる。天月葵は慣れた手つきでそれを操作し、そして顔をカメラに近づけた。

何をしているのか、よくわからなかった。だがこれだけは、はっきりとわかる。

この車も、天月葵も、普通じゃない。

カチャリ、とドアの開く音が聞こえた。直後、差込口から黒いカードが排出される。天月葵はそれをを差込口から取り出し、ブレザーの裏ポケットへしまった。

「こっち」

僕は無言でついていく。　彼女は何か操作をし、車の背後のドアを開けた。開けたというより、上げた、か。

キャンピングカーの中には、確かに人が住めるだけの空間があった。

ベットがあり、机があり、ソファーがある。机の上にはノートパソコンが置いてあった。奥のほうにはトイレだと思われる個室もあった。台所は無かった。代わりに、巨大なサーバーと思われるものがある。情報室とかにある、あのでかいやつだ。運転席はここからだと見えない。黒いカーテンがさえぎってしまっている。

「上がって」

彼女は土足のままで車の中に入った。僕もそれに続く。

キャンピングカーの中は、普通の部屋のようだった。少し狭い気はするが、確かに生活できなくはないだろう。

けれど、ここに天月葵が住んでいるというのはかなり違和感があ

る。
音を立てて、入ってきたドアが閉まった。天月葵は何もしていなかった。ただ部屋の中で立っていただけだ。
じゃあ、一体誰が閉めた？
「やあ、君。よく来てくれたね。名前は久坂英志、だったっけ？」
黒いカーテンの向こうから男の声が聞こえてきた。
「はじめまして、か。僕の名前は一ノ宮。よろしく」
そう言って出てきたのは、髪とひげを無造作に伸ばした、白衣を着た男だった。少なくとも、雰囲気が一般人の類ではない。あまり関わってはいけない香りがする。
「あの、あなたは……」
「まあ、立ち話もなんだし、座りなよ」
僕の言葉をさえぎって、一ノ宮と言う男はソファーに座り込んだ。僕は机を挟み、もう一方にあった椅子に腰掛ける。
「じゃ、ちょっと失礼」
そういうと、一ノ宮という男は僕の腕に何かを刺してきた。あまりにも突然だった。何が起こっているのか理解できない。
刺されたものが注射だと気がついた時には、もう僕の腕からそれは抜かれていた。
「え、あの、これは一体」
「悪いんだけどさ、髪も五本くらい、くれないかな。なるべく新鮮なやつがいいんだけど」
一ノ宮という男は、僕の質問に全く答えてくれない。
「君は昨日、仮想空間に間違って転送されただろう？　まあ、システムの誤動作だと思うんだけど、一応君も調べとかなくちゃいけないんだよね。血液サンプルだけじゃ足りないから、身体の一部を貰いたいんだけど、髪の毛が一番無難だろう？　だから、髪を頂戴」
一ノ宮と言う男は、半分以上理解不能な事を喋った。仮想空間とか、転送とか、システムの誤動作とか、全然意味がわからない。
「あれ？　もしかして、天月君は事情を説明してないの？」

困惑した僕の表情を読み取ってか、一ノ宮という男が天月葵に聞いた。
「はい。一般人に私達の事をむやみに公表すべきではないと判断したので」
当然のように、淡々とした口調だ。今はその冷静さが怖い。
それを聞いた一ノ宮という男は、ため息をついた。そして、胸ポケットから一枚の名詞を取り出す。
「いや、ごめんね。説明が無くて」
質問を無視してたのは貴方じゃないですか、とは言わなかった。
「じゃあ、改めて。僕は一ノ宮敦（いちのみやあつし）。政府管轄の、対変異種第三実動隊の現場指揮官を任されているんだ」

「はあ……どうも」

僕は差し出された名刺を受け取る。『対変異種第三実動隊　現場指揮官　一ノ宮敦』。やたら長い肩書だ。

「何所から説明しようか。君は何か知りたいことはあるかい？」

「それなら、何で僕の名前を知ってたのかを……」

どうでもよさそうなことなのだが、僕が一番気になっていることと言ったらそれだった。他の事に関しては知りたいとかそういう次元じゃなかった。全くの理解不能で、知りたいという気持ちすら起きない。

「そうだな、そんな事よりもまずは変異種について説明しようか。その方がいいと思うんだが。構わないかい？」

自分から言ってきたくせに、目の前のこの人は僕の質問に答えてくれない。

「じゃあ、それで」

僕は気の無い言葉を返した。多分僕に拒否権は無いんだろうし、どうせ全部知らないことばかりだ。どれから聞いても一緒だろう。だったら、一つ一つ片っ端から聞いてけばいい。

と、思っていたけれど。

「変異種というのは、全ての生物の遺伝子に眠っていると言われている『進化の系譜』が、覚醒因子に引き起こされ、脳や身体に影響を与えるようになった生物の事を指す。ある程度の差はあるが、どの個体も理性を失い、凶暴性が増す、という特徴がある。これはヒトおよび霊長類と言う種の最大の特徴である発達した脳が、『進化の系譜』内に記録されている他の生物のものと入り混じることにより、俗に言う、本能という奴が活発化するのが原因だ。他の生物は理性を持ちながら行動することは無いからね。極稀に全ての『進化の系譜』を自由に引き出せる個体が発見されるが」

「あの、すみません。もう少し解りやすく教えてもらえますか？」
僕の考えが甘かった。一ノ宮という男の口から出た言葉は、さっきよりも訳がわからなくなっている。
「十分解りやすいと思うんだがなあ……」
そんなことはない、という言葉を飲み込んだ。
「うーん、じゃあこうしよう」
そう言うと、彼は黒いカーテンの向こうへと行ってしまった。
その場には、僕と天月が残される。お互い、何も喋らない。
パソコンをいじっているようだ。キーボードを打ち込む音が、こっちまで聞こえてきた。
「天月さん、あの人って、天月さんの父親とかじゃないんでしょ？」
二人の間に流れる沈黙に耐え切れなくなった僕は、天月葵に問いかけた。地味に気になっていたことだ。
彼女はここが家だと言った。それなら一ノ宮と言う人保護者と言うことになるのだろうか。けれど僕にはあの人が保護者、と言うのが想像できない。言っちゃ悪いが、犯罪者の香りがしなくもない。
「そう。一ノ宮博士は現場指揮官。私の上司。だから、私のパパではないわ」
一ノ宮と言う人はどうやら博士らしい。
けど、そんなことより。
「パ、パパ？」
「何？」
「天月さんが『パパ』なんて言うとは思ってなかったから」
天月葵の口調から、パパなんて言葉が出てくる。そんな事、誰が想像できただろう。
「パパって呼ぶのは、おかしいの？」
彼女は僕の顔を覗き込むようにして聞いてきた。なんというか、近い。
「いや、そんなことないと思うよ」
僕は何も考えずにそう言った。というか、考えられなかった。

「そう。ならよかった」
そう言って、彼女は僕から顔を離した。
「これなら大丈夫だろう」
一ノ宮博士がカーテンの向こう側から飛び出してきた。
その手にはいくつものコードに繋がれたノートパソコンがあった。
それらのコードは全て、サーバーへと伸びている。
「どうやら君は一つ一つの単語を明確にしなくちゃわからないようだからね。説明することは最低限に絞ることにしたよ。これでわかるはずだ」
一ノ宮博士が僕へと見せたノートパソコンの画面には、昨日の怪物が、赤い豚がいた。
「こいつは」
僕を握りつぶし、殺そうとした怪物。そして、ヒーローに倒された怪物。
「そう。これが変異種。普段は僕たちと同じような人の形をしているけど、遺伝子の中に刻まれている『進化の系譜』にアクセスし、このような化け物になってしまう」
画面の中には赤い豚以外にも、下半身が馬の人間や、蝙蝠のような人型の化け物がいた。
「『進化の系譜』って？」
「『進化の系譜』とは、全ての生き物の遺伝子に刻まれている、進化の過程の記録だ。僕たちがプランクトンからこの姿までになるまでの過程や、そしてなりえた可能性までが刻まれている」
「あの、そんな話は聞いたことが無いんですけど」
なんなんだ、そのトンデモ理論は。
「ある意味、有名だよ。この説は知らないかい？　『生物の一生は遺伝子に刻まれている』っていう説。それの飛躍版だと思えばいい。『生物の進化は遺伝子に刻まれている』ってことだ。もっとも、未来の進化の過程も刻まれている。それを解析した結果によると、僕ら、つまりヒトという種は行き止まりのようだ。ここから先に発展

しない。まあ、そんな事は置いといて」
　画面は切り替わり、教科書に出てくうるような、枝分かれした図があらわれた。出発点は微生物で、終着点は人や鳥、魚などが描かれている。
「例えば君が遭遇したあの変異種なんかは、僕たちがなりえたかもしれない『豚』というの系譜を覚醒因子、まあ言うなれば、起動装置のようなものが呼び覚ます事によって、『人』という種と交わったものだ。君も体験してわかったと思うが、あいつらは凶暴だ。その理由は人の理性が交わった種の本能にかき消されてしまうから。それに彼らは自分を制御できないんだ。人間の理性なんて他の種の本能に比べればちっぽけなものだからね。だから変異種は危険な生き物だ。まあ、変異種に対する説明は以上。わかった？」
「あの、なんで変異種とか言うのは、『進化の系譜』っていうのを利用できるんですか？」
　というか、なんで他の動物と混ぜあっちゃうのか、よくわからない。普通の人間はそんなことはできない。
「それができるような突然変異をしているから、変異種って言うんだよ」
　なんというか、適当だ。
「まあ、大まかに言うとこうだ。本当はもっと複雑なんだが……これだけ知っていれば十分だろう」

黒のキャンピングカー　4

「はあ、そうですか」
口ではそういいつつも、僕はあまり納得できてなかった。
言ってることはさっぱり理解できなかったし、わかったことと言えば、あの怪物の名前が変異種という事ぐらいだ。それにしても、何でこの人は赤い豚の画像を持っていたのだろう。
「君は昨日、殺されかかっていたしね。変異種の危険性については、よくわかっているだろう」
「なんで、それを？」
「なんでって、それは僕が対変異種第三実動隊の現場指揮官だからだよ」
パソコンの画面が切り替わった。
「僕達はこの街に潜伏している変異種を殲滅しに来たんだ。戦いの記録は全て撮っているし、報告書だって受け取っている。だから、君が昨日どんな目にあったのかも知っている」
画面に表示されているのは動画だった。赤い豚に掴まれている僕が映っている。
直後、黒と白の装甲をつけた人間が、赤い豚の顔面を蹴り飛ばした。赤い豚の手が緩み、僕の身体が空中に放り出される。
「僕達、ってことは、天月さんもそうなんですか？」
この目の前の人は昨日の赤い豚のような怪物を倒すためにこの街に来た人間で、天月葵はその仲間と言うことなのか。
「もちろん。君も一度見ているからわかると思うよ」
僕の目の前では赤い豚と、白と黒の装甲をつけた人間が闘っていた。
「そこにいる天月葵こそ、変異種に対する人類の切り札であり希望でもある、ヴァリアント・システムの適合者だ」
「あの、何を言ってるのかさっぱり……」

「難しいことを抜きにして言うなら、彼女は変異種と闘う人ってことだよ。ほら、これに映っているだろ。これ、天月さん」

そう言って一ノ宮博士が指差した画面にいたのは、昨日僕を助けてくれたヒーローだった。

「え？」

僕は横に立っている天月葵に顔を向けた。彼女は相変わらず無言で立っている。

――天月葵が昨日、僕を助けてくれたヒーローってこと、だよな？

「そして、君が変異種と出会い、彼女に助けられたあの場所が、仮想空間だ。あれは、一般人に知られないように、変異種を殲滅するための空間だ。普通の人に変異種の存在を知られるわけにはいかないからね。本来は彼女と変異種のみを仮想空間に転送する予定だったんだが、なぜか、君も転送されていた。だから、君を調べる必要があるんだ。これでわかっただろ？だから、髪を頂戴」

そうか、そういうことか。やっと話が繋がった。

昨日、僕が気がついたら違う場所にいたのは、仮想空間っていうところに事故か何かで送りつけられてしまったから。

赤い豚の怪物は変異種とかいうやつだった。

あの場所で人の気配が全く無かったのは、そもそも人のいない場所だから。

僕を助けてくれたヒーローは、変異種っていう化け物を倒すために、あそこにいた。

そして、天月葵がそのヒーローだということ。

彼女はこの人に頼まれて、僕をここまで連れてきた。

それで、仮想空間って所に送られてしまった原因は僕の身体にもあるんじゃないか、ということで僕の血を注射器で採って、さらに髪の毛を要求している。

こういうことらしい。

僕は自分の髪の毛を適当に抜いて、目の前の一ノ宮博士に渡した。

「やっとわかってくれたか。じゃあ、結果が出るまでそこにいてく

れ」
僕の手から髪の毛を奪うようにして受け取ると、カーテンの向こうへと消えていく。
「あのさ、天月さん」
僕は聞きたくてしょうがなかった事を聞こうとした。どうして君は闘っているのか、と。
「出たよ、結果。血液だけで十分だったよ。悪いね。もう結果は出てた」
けれど、天月葵が答えるよりも早く、一ノ宮博士が戻ってきてしまった。
「それでさ、久坂英志君に提案があるんだけど」
一ノ宮博士は笑顔で言った。
「君、ヴァリアント・システムを使ってみないかい？」
「博士、それは」
そう言った天月葵の顔に、初めて感情らしきものがうかがえた。
それは、焦りだと思う。
「彼は一般人です。巻き込むわけにはいきません」
「彼の適合値は全て君を上回っていたんだ。それだけで理由としては十分だ」
「……でも」
「それに、指揮官は僕だ。誰を闘わせるかは、僕が決める」
その声は、僕に話しかけたときよりも低く、暗かった。
「あの、ヴァリアント・システムって何ですか？」
さっきもそんな単語を言っていたけれど、一体どんなものなんだろう。
「君ならきっと気に入るよ。きっとね」

黒のキャンピングカー　5

「一ノ宮博士、彼は一般人です。ヴァリアント・システムを使用させるのは正しい判断とは思えません」

天月君は一ノ宮博士を睨み付けている。僕はそれを見て、驚いた。朝のホームルームから今までで、こんな感情的な天月葵を見るのはじめてだった。

「僕に命令する気かい？この僕に、部下の君が。所詮、ヴァリアント・システムを使えるだけという君が、現場指揮を任されている僕に、命令するのかい？」

「適正が高いというだけでヴァリアント・システムを使用させるのは、軽率過ぎるのではないでしょうか」

「軽率？　僕が？　何も知らないただのガキがよく言う。君は僕が何も考えずに決定を下していると思っているのかい？」

携帯電話の着信音が聞こえてきた。

曲は初期設定のままなの、ベルの着信音だった。一般的に、「着信音１」という名前で登録されているやつだ。

一ノ宮博士は白衣の胸ポケットから携帯電話を取り出した。普段あまり使わないのだろうか。携帯電話を操作する指が遅い。

それから少しして、一ノ宮博士が口を開いた。

「変異種の所在が特定できた。今すぐ仮想空間に転送する」

一ノ宮博士は手に持っていた携帯電話をソファーに投げ捨てると、ノートパソコンを自分へと向けた。そして、先程の携帯電話の操作とは比べ物にならないほどの早さでタイピングを行う。

「……了解」

一ノ宮博士の言葉を聞いた天月の口調は、感情を圧し殺すようだった。

僕は何が起ころうとしているのかまるでわからず、ただ呆然と二人を見ているだけだった。さっきの会話だって半分も耳に入ってい

ない。あり得ない非日常を受け入れようとするのが精一杯だった。
赤い豚、ヒーロー、同じようで違う別のどこか。
仮想空間、変異種、ヴァリアント・システム。
頭の中が整理できなくて、ぐちゃぐちゃになる。
「変異種が見つかったんだ。今から彼女が殲滅に向かうんだよ」
一ノ宮博士が言った。
「そうだな、君も着いていくといい」
「着いていく？」
「そう。百聞は一見にしかず、と言うだろう。実際に仮想空間に行って、変異種をその目で見て、天月君の闘う姿を見れば、僕の言ったことが理解できるようになる」
「それは危険です。もし変異種に襲われでもしたら」
天月葵が反論した。それに対して舌打ちが返される。
「現場指揮官は僕だ。何をどうするかは僕が決める」
「でもそれは」
「久坂君はどうしたいんだい？」
天月葵の言葉を遮るように一ノ宮博士が言った。
「え、僕、ですか？」
「ヴァリアント・システムと変異種、そして仮想空間。もう一度その目で見てみたくはないかい？　本物の正義のヒーローと悪の怪人。その闘いを見たくはないかい？」
「本物の正義のヒーロー……」
僕はそう、呟いていた。
子供の頃から憧れていた。誰かのために自分の身を省みず闘い、自分の信念を貫き、正しい道を行くヒーローに。
カッコいいから、と言う理由だけじゃない。僕自信がそうでありたかった。誰かのために闘えて、自分の信念を貫ける人間になりたかった。
けれど成長していけばいくほど、それが無理だとわかっていく。正しい人が否定されて、間違っている人が肯定されるなんて、よく

ある話だ。
それでも、だからこそ、僕は正義のヒーローに憧れる。
正義のヒーローなんてこの世にいやしないと諦めるしかないのに、諦めきれない。だから、僕はすがるように架空のヒーローに憧れる。
でも今、僕は本物のヒーローをこの目で見ることができるんだ。
「久坂君、止めて」
天月葵が僕を見て言った。
「あの時はたまたま無事だった。けど、次もそうとは限らない。だから、止めて」
「決めるのは君だ。危険だと思うなら今すぐ家に帰ればいい。データは採れたしね。でも、もし君が望むなら、僕は君を仮想空間へ送ろう」
僕は黙って、うつ向いている。
天月葵の言うことはわかる。僕が生きて帰ってこれるという百パーセントの保証はないだろうし、それに、僕がいても邪魔になるだけだろう。
けれど僕はこの目でヒーローを見たい。
本物のヒーローがいるとわかっていて、それを無視して素通りするのが、僕にはできなかった。
「見てみたいです。この目で」
単なるワガママだ。そんなのわかってる。でも僕はもう一度、この目で本物のヒーローを見たかった。そこに本物にヒーローがいると、確かめたかった。
「よし、じゃあ決まりだ」
一ノ宮博士が嬉々とした表情で言う。天月葵は何かを言いかけたが、飲み込んだようだ。不満そうな、悲しそうな、辛そうな、そのどれでもあって、どれでもないような顔をしている。
「よし、じゃあ二人まとめて仮想空間に転送するから、外に出て待っていてくれ」
「外、ですか？」

「ああ。建物の中だったり電波が少しでも入りにくい場所だと、仮想空間に転送する事ができないんだ。だから、外に出て行ってくれ。あとはこっちでやる。久坂君を頼むよ、天月さん」

「……了解」

僕と天月葵は車の外に出た。

天月葵は何も言わなかった。怒っているかもしれない。

彼女が怒るのは当然だ。彼女は僕を心配してくれているのに、僕はそれを無視したんだから。悪いのは完全に僕だ。

――でも僕は、ヒーローがいるって確かめたいんだ。

「それじゃあ、転送を始めるよ」

車の中から一ノ宮博士の声が聞こえくる。

次の瞬間、真っ白な光が僕の視界を包んだ。

僕は再び仮想空間に転送される　1

真っ白な光の中で声が響いていた。

「仮想空間の原理としては、僕達の存在いる空間をベースとし、僕らの次元から僅かにずれた場所に新しい次元を人工的に作り出す。そこに配置するのは物体だけで、生命体は存在しない。物体は街を丸ごとスキャンすればそのまま配置するだけでいいし、生命体は仮想空間に必要ない。何より、複製が面倒だ」

「僕達の生きている次元は三次元に時間を加えた世界、つまり四次元と言われているが、五次元的視点から見るとそれらは重なり合い、密集したものだ。それを立体的思考で捉えるとしたら、箱という五次元空間に、いくもの紙、すなわち四次元が大量に詰め込まれている。仮想空間は僕達の次元のそばに作成される。その次元と僕達の生きている次元は五次元的に殆ど重なり合っているため、干渉しやすい。なので次元と次元を人為的に繋ぎ、人や物質を転送する事ができる」

「しかし、仮想区間は完全な新しい次元ではなく、所詮人為的に作られた不安定なものだ。維持には膨大な量の電力を必要とし、維持ができなくなれば、崩壊してしまう。仮想空間内で生命体が存在している時は、さらに電力が必要となる。ちなみに、核のような周囲に影響を与えるような物は仮想空間と僕達の空間がお互いに干渉してしまい、僕達の次元へと影響がでてしまうので、使用できない」

「物語などでは、五次元空間内に密集している四次元空間をパラレルワールドと言われることが多い。仮想空間は人為的な一定時間のみの空間だから厳密には違うが、まあ、同じものと考えてくれれば

いい。そっちの方が理解しやすいだろう。人為的な、人や動物のいないパラレルワールドを作り出し、変異種とヴァリアント・システムの適合者を転送し、そこで変異種を殲滅する。それが仮想空間だ」

光が次第に薄れ、僕は横断歩道のど真ん中に立っていた。

学校の近くの、というか僕の通学路にある横断歩道だった。車が道路に止まっている。中に人はいない。人の気配が無い。仮想空間には僕達と変異種他に生き物がいないから、だろう。多分。

隣には天月葵がいる。そして正面には、よだれを垂れ流した男がいた。

訳の解らない事をぶつぶつと呟き、両手をだらりとぶら下げ、今にも倒れそうな足取りで歩いている。

まるで、麻薬中毒者みたいだった。

「久坂君は下がって」

僕は天月葵の言葉に従い、少し離れた所に止まっていた車の陰に隠れる。それを確かめた天月葵は右の袖を捲くった。天月葵の手首には、黒い腕輪がはめられていた。

涎をたらした男は、天月葵に気がついたようだ。男の声がいきなり大きくなった。しかし、言っている事は要領を得ない。

「あははぁ、オンナだなぁ。おい、なんか言えよ。何でなにも言わねぇ。どうしてだ。今の俺が、さっきの俺が、昔の俺が悪いのか？俺のせいじゃない、こんなのは。ああ気に入らない、気に入らない。ぐちゃぐちゃにして、八つ裂きにして、何回も噛み砕いて、あああああ！！！」

「脳が他の生物と混ざり合って、まともな思考ができなくなっているんだ。これが末期症状」

僕の後ろから一ノ宮博士の声が聞こえた。振り向く。しかし、誰もいない。

「これは空間を干渉させて、僕の声だけを仮想空間に送っているんだ。僕はそっちにはいないが、声を伝える事はできる。さっきの仮

想空間の説明も、これと同じ原理でやっていたんだ」
　理屈はよくわからないが、仮想空間にいても一ノ宮博士の声が聞こえる、というのだけはわかった。
　僕は男の方へ視線を戻す。男は奇声をあげて、頭を抱えていた。もう、言葉すら喋れていない。
「一度でも『進化の系譜』を覚醒させてしまうと、もう普通の人間には戻れない。人のに戻る事はできても少しずつ、だが確実に体は『進化の系譜』に侵食されて、肉体や脳が別のものへと変化していく。最終的には、あのように人としての思考ができなくなり、己の本能のみに従う生き物になってしまう」
　男の身体が少しずつ変わっていった。
　全身に黄色の毛が生え始め、顔つきが人のものから虎のものへと変わる。身体が一回り大きくなり、服や靴は裂けて地面に落ちた。歯は牙へと変わり、爪は鋭く分厚くなっていく。足は倍以上に膨れ上がり、目は獣のそれへと変わった。
　虎のうなり声が無人の町に響いた。
　もう、目の前の男は人ではなかった。変異種という名前の、得体の知れない化け物だった。
「あれが変異種だ。覚醒因子が『進化の系譜』を引き起こす前に仮想空間に送れたのは幸いだった。もし街中であの姿になっていたら、何人もの死者ていただろう」
　虎の化け物は再び吼えた。そして、天月葵へと襲い掛かる。
「そして、それらを倒すために造られたのが、ヴァリアント・システムだ」
《解除コード認証。ヴァリアント・システム起動》
　機械的な声が天月葵のしている腕輪から聞こえてきた。そして、虎の化け物時と同じように、天月葵の身体が変わっていく。
　黒色と白色のプロテクターを纏った、ヒーローに。

僕は再び仮想空間に転送される　2

――すごい。

本当に、本物のヒーローだ。誰かが考えた空想上のヒーローなんかじゃない。

実際の、本物の、目の前に存在する、ヒーローだ。

「あれがヴァリアント・システムだ。あの腕輪に内蔵された人工的な『進化の系譜』を、同じく内臓されている覚醒因子で引き起こす事で、あの姿になることができる。原理は変異種と同じだ。『進化の系譜』によって自分の姿を別のものへと変化させている」

変異種が動いた。身体を前に倒して前傾になり、地面を蹴る。鈍い音と共に、黒い破片がいくつか飛び散った。異常な加速を見せた変異種は、天月葵に、つまりヒーローに迫る。変異種の蹴った所はアスファルトが窪んでいた。

ヒーローが腰のホルスターへと手を伸ばす。そこには銃があった。握った銃の照準を変異種に向ける。そして、引き金を引く。誰もいない街に銃声が響いた。

変異種はそれを避けた。弾丸が見えているかのように、最小限の動きで。

ヒーローが再び引き金を引く。今度は連続して三発。変異種は再び弾丸を避ける

「変異種はベースこそヒトだが、その身体能力は全くの別物だ。銃で撃ったとしても皮膚で弾丸を弾く変異種もいるし、あのように弾丸を避けてしまう変異種もいる」

本当は隣いないのに、隣から声が聞こえてくる。すぐそこに存在しているかのようだ。

「そんな相手に一人で勝てるんですか？援護とかした方がいいんじゃ」

「無駄な死人はいない方がいいだろう？銃で仕留められればいいが、

できなければ接近されて殺されるだけだ」
「じゃあ、空爆とか」
「あまりにも強すぎる衝撃は僕達の次元に影響を与えてしまうんだ。五次元的に近いから、互いの次元が干渉し合う。昨日、変異種が家やブロック塀を破壊してただろう。あれくらいなら亀裂程度で済むが、変異種を消滅させるほどの爆撃なんてしたら、下手したら僕達の次元で死人が出る」
変異種がヒーローに襲いかかった。その手の先にある爪で切りかかる。長く、巨大なそれをヒーローは避けた。しかし、変異種は逆の手にある爪で追撃する。
ヒーローは変異種の手首を掴む。変異種は力ずくで押しきろうとするが、ヒーローの力はそれに勝っている。
ヒーローは再び銃を手に取ると、すぐさま引き金を引いた。隙だらけの変異種の腹に弾丸が撃ち込まれた。叫び声を上げながら、変異種が仰け反る。着弾した所からは血が流れ出ていた。
「すごい。もう倒したなんて」
「いや、あの程度では変異種は死にはしない」
ヒーローは手首辺りに内蔵されていた、ナイフを取り出した。そのナイフを変異種に向かって突き刺す。正確には突き刺そうとした、だった。
変異種の巨大な爪がそのナイフを阻んでいた。爪と爪の間で器用にナイフを挟んでいる。
ヒーローはナイフを手放すと、逆の手に持っていた銃を変異種へと向けた。しかし、引き金を引く前に銃は払い落とされてしまった。腕を叩かれた衝撃で、ヒーローの体勢が崩れる。
そこに変異種の蹴りが叩き込まれた。ヒーローの身体は五メートルほど吹き飛ばされ、ブロック塀へと激突する。ブロック塀は崩れ、ヒーローはその下敷きになってしまった。
「あれって、やばいんじゃ」
変異種が地面を蹴った。ついさっきまで僕達と同じ人間の姿だっ

たとは思えないほどの速さで疾走する。巨大な爪は瓦礫の下の獲物へと狙いを定める。

「大丈夫。天月葵はそんなに弱くない」

「でも、あれは」

「それに、ヴァアント・システムは変異種を殲滅するために造られているんだよ」

変異種が瓦礫に向けて爪を突き刺そうとする。

まさにその時、瓦礫の中から銃声が聞こえてきた。

直後、変異種の右足に弾丸が命中した。足を撃たれバランスを崩した変異種の身体は、転がって電信柱に激突する。

「あの程度の相手ならば、負けるわけが無い」

瓦礫の下からヒーローが現れた。その手には銃が握られている。

瓦礫の隙間から変異種を狙ったんだ。体勢は相当悪かったはずだ。視界だって満足のいくものじゃなかったはずだ。すごい射撃技術だ。

変異種が立ち上がった。腹部に三発、そして右足に一発の弾丸を受けている。肩は大きく上下していて、息が荒かった。しかし、敵対の意思は消えていない。

ヒーローへと、巨大な爪を向ける。

ヒーローが変異種との間合いを一気に詰めた。背中と足の裏からはバーニアが吹き出している。それで一気に加速したんだ。

変異種はそれに反応し、自らも前へと出る。しかし、先程のような速さは無い。足を撃たれているからだろう。

ヒーローが銃を撃った。変異種はそれを大きなアクションで避るた。ついさっきは多分、ギリギリ避けていた。撃ちこまれた弾丸が、確実にダメージを与えているんだ。

「まだ終わらないよ」

一ノ宮博士が言った。

「確かに弾丸は変異種の肉を抉り、神経を断ち切り、骨を軋ませているだろう。だがそれは、一時的なものに過ぎない」

「どういう事ですか」

「変異種の腹部を見てごらん」
僕は言われるがままにそれを見た。変異種の腹には、ヒーローに撃たれた時にできた傷跡がある。
けれど、そこから血は出ていなかった。撃たれたのは本当についさっきだったのに。
「傷が高速で修復しているだろう？　あれは全ての生き物が持っている脳内のリミッターを外し、自然治癒力を急激に高めているからなんだ」
「自然治癒力って、傷口が瘡蓋になって瘡蓋が取れて、って奴ですか」
「そうだ。それを極限まで高めればどんな傷でも少しの時間さえあれば塞がっていく。人と動物の脳が混ざり合っているから、本来なら外れる事の無いリミッターも簡単にはずれってしまう。ただ『生きる』、という本能だけでリミッターは開放されてしまう」
「それじゃあ、倒せないじゃないですか」
いくら攻撃しても傷が治ってしまうなら、倒しようが無い。
「さっきも言っただろう。ヴァアント・システムは変異種を殲滅するために造られているんだよ。使用者がシステムの性能さえ引き出せれば、倒せない変異種はいない」

僕は再び仮想空間に転送される　3

変異種の爪が襲い掛かる。ヒーローはそれへと銃口を向けた。爪がヒーローへと接触する直前、弾丸が撃ち込まれた。一発だけではない。連続して五発。

複数の弾丸によって爪が破壊され、変異種の手の肉を抉った。苦しみの雄叫びが発せられる。

変異種は蹴りを繰出した。その足の傷からもう血は出ていなかった。今撃たれた爪や腕も、少しずつだが再生している。

傷跡にはミミズのようなものがいくつもあった。少しして、それはミミズなんかじゃないとわかる。それは肉だった。

いくつもの細い肉がまるで生き物の様にうねり、傷口を塞ごうとしていた。それはもう、生き物の治癒能力なんかとはまるで別物だった。そうやって傷口を治している様は、悪の怪人というより、映画とかで見るエイリアンだとかゾンビだとか、そんな風に言った方がしっくり来る。

ヒーローは蹴りを避け、変異種の腹部を殴りつけた。変異主の身体がくの字に折れ曲がる。そしてそのまま、今度は変異種が吹き飛ばされた。

民家の屋根へとその身体は激突し、いくつかの瓦が屋根から外れて宙を舞い、地面へと落ちて割れた。

「確かに変異種の再生能力はやっかいだ。常人が変異種に勝てない理由でもある」

ふらつきながらも、変異種は起き上がった。腹部にあった弾痕はすでに消え、足の傷も治りかけていた。破壊された爪や肉を抉られた手も同様だった。ミミズのような肉が傷を這いずり、傷を直している。

「だが、生命維持ができなくなるほどに身体を破壊する事ができれば、話は別だ。急所、つまり心臓や脳を完全に破壊する事ができれ

ば、一撃で倒す事も可能だろう。だが、それだけでは死なない変異種もいる。あいつらは理性をなくした分、生存本能という奴が飛びぬけているからね。容易く脳のリミッターを外し、あるいは自分の身体を新しく作り変えて、生き残ろうとする。ならばどうすればいいか」

ヒーローは右手首の腕輪を操作した。するとバックパックからモーター音が聞こえ始め、蒸気が噴射される。右腕が淡く光りだした。ヒーローはその手に握り拳を作り、それを腰のあたりに引き寄せる。力を溜めているみたいだった。

「再生できなくなるりほどに身体を破壊すればいい。その身体を全て消滅させてしまえばいい。爆撃でそれを行おうとしたらこの周囲を全て吹き飛ばさなければならなくなるが、あの姿なら、エニティレイターならばそれができる」

「エニティレイター？」

「ヴァリアント・システムを起動した時の名前だよ。名称があった方がわかりやすいだろう？」

変異種が跳んだ。目標へ一直線に向かっていく。

ヒーローも飛んだ。背中と足のバーニアを吹かして飛行し、変異種を迎え撃つ。

変異種が切りかかる。しかしそれは大振りで、動きも鈍くなっていた。

ヒーローはバーニアを前方に吹かして減速する。変異種の爪は空を切り、完全に体勢を崩す。隙だらけの背中がヒーローに向けられる。

その背中に、淡く光る右拳が叩き込まれた。

轟音、衝撃、発光。

変異主の身体は上空へと吹き飛ばされ、周囲には強烈な突風が吹いた。昨日見た、赤い豚を倒した時のアレと一緒だ。瓦が飛ばされ、電信柱にぶつかっていた。アスファルトの破片が道路を転がる。突風で車のガラスがカタカタ、と揺れていた。発光の中心近くでは、

窓ガラスが割れている車もある。
「エネルギーを右拳の一転に集中させ、そして放つ。それは全て変異種にぶつけられ、その身体全てを消滅させる。そうして全てを消し去って、エニティレイターは変異種を殲滅する」
上空へと吹き飛ばされた変異種には光の亀裂が入っていた。そして、徐々にその身体が光の粒子となり、消滅する。
「すごい」
僕は無意識のうちに呟いていた。
ヒーローは本当にいたんだ。
僕達の知らない所で、僕達が平和に暮らせるように、闘っていたんだ。
もしかしたらやられて死ぬかもしれないのに、一人で闘っていたんだ。
僕の憧れはフィクション（つくりもの）の世界にしかいないと思っていた。現実にいるわけが無いと諦めていた。けど、僕の前で起きた闘いはフィクションじゃない。本当にあった事だ。
「それじゃあ、君達を元の世界に戻そう」
一ノ宮博士がそう言うと、僕の身体は真っ白な光に包まれた。
僕は瞼を閉じる。喜びのような安堵のような、そんな感情を胸に感じ、その光に身を委ねた。

そんなことないと、僕は思う

「目が覚めた？」
気がつくと、僕はソファーの上で寝ていた。身体には毛布がかけられている。すぐ近くには天月葵の顔があった。僕は驚いて飛び起きてしまう。
天月葵はそれを少し仰け反るようにして避ける。天月葵の長い髪が僕の頬に触れた。
「どうしたの」
感情の無い声が聞こえてくる。僕は「何でもないよ」と答えた。内心ではかなり動揺していたけれど。
やっぱり思う。天月はなんというか、距離が近い。今日あったばかりの僕に、全く気にすることなく顔をすぐ近くに近づけてきたりする。天月自身はなんとも思わないだろうけど、僕は動揺する。
「起きたのか」
黒いカーテンの向こうから一ノ宮博士がやってきた。
「君は怪人とヒーローの闘いをその目で見てきたわけなんだが」
一ノ宮博士の手にはノートパソコンがあった。画面を見つめながら、僕に話しかけている。
「あれで大体わかっただろう。仮想空間、変異種、ヴァリアント・システム、そしてエニティレイターが何なのか」
「ええ、まあ」
確かに、ただ説明を聞くよりは分かりやすかった。
「ならいい。本当はまだ説明していないこともいくつかあるが、それはおいおい話すとしよう。今日の所はもう帰ってくれ」
なんというか、突き放すような言い方だった。

時折見せる不安定な感じを除けば、好意的な態度で僕に接してきていた。けど今は、もう用がないと言わんばかりに僕に帰れと言ってきている。

「久坂君を送ってやれ」

天月葵に命令じみた事を言いながらも、一ノ宮博士の視線は画面に固定されている。天月葵はそれに対し、無表情で従う。彼女は無言でキャンピングカーのドアを開け、外に出ていった。僕もそれに続き、キャンピングカーの外へと出る。

「あの、今日はありがとうございました」

僕はキャンピングカーの中にいる一ノ宮博士に向かって御辞儀をした。

けれど、一ノ宮博士からは何の返事も無かった。聞こえていないだけなのか、聞こえていて無視しているのか、僕には判断できなかった。

あたりは薄暗くなり始めている。さっき時計を見たときは、六時半すぎだった。

僕らの他にはあまり人がいない。会社勤めのサラリーマンや、少し遅めの買い物を済ませた主婦がいるくらいだ。

生徒はというと、全くと言っていいほど見かけない。帰宅部はもうとっくに帰っている時間で、運動部、文化部はまだ活動をしている。今はそんな時間だ。

「あのさ、天月さん。いつぐらいから、闘ってたの？」

僕は家へと帰る道の途中で、彼女に尋ねた。

目の前にいるこの女の子は、僕が憧れてた、ヒーローそのものだった。颯爽と現れ、僕を助けてくれた。危険な怪物を倒し、人知れず世の中を守っている。テレビに出てくるみたいなヒーローが、目

絵の前にいる。
「訓練を始めたのは、七歳の頃から。実際に変異種と闘うようになったのは、十三歳の頃から。どうしてそんなことを聞くの？」
「なんでって、その……どうして正義の味方みたいな事をしてるのかなって」
言ってからもう少し違う言い方をすればよかったかな、と思った。
僕は別になんとも思わないが、「正義の味方」という言葉は普通の人には抵抗があるもの、と遠藤が前に言っていた事を思い出したからだ。
けれど、危険な敵を人知れず倒すというのは、まさに正義の味方だった。
僕の言葉を聞いた天月葵は、少し時間を置いて、口を開いた。
「正義の味方なんかじゃないわ」
その言葉には、悲しみの感情が篭っていた。
「変異種になったとしても、人は人よ。だから私は……人殺しだわ」
彼女は悲しい顔でそんな事を言う。
でも彼女は僕達のために闘ってくれているんだ。そんな人が、どうして悲しまなきゃいけないんだろう。
「そんなこと、ないよ」
僕は気がつくとそう言っていた。
「天月さんのお陰で皆平和に暮らせてるんでしょ？　僕だって君に助けてもらったじゃないか。だったら、もしそうだとしても、絶対に間違った事じゃないよ」
もしも彼女が変異種という敵を倒さなかったら、僕は死んでいた。もしも彼女が変異種という敵を倒さなかったら、僕達は普通に暮らせていなかったかもしれない。彼女が闘ってくれたお陰で、僕達は普通に暮らせてる。だから、それはきっと正しい事だ。
僕はそう思う。絶対に、そうだと思う。
「……ありがとう、久坂君」
そう言った彼女が見せてくれたのは、愁いを帯びた笑顔だった。

彼女が見せたそれは、とても可愛くて。
多分、僕の心臓が強く鼓動していたのは、女子に対する免疫が無いからとかじゃなかった。

内藤君とヒーロー同好会　1

「やあ、英志君。昨日は楽しかったかい？　天月さんとのデート」
授業中だって言うのに、遠藤は騒がしい。この話題は今日で五回目だ。
「だから違うって」
「ほう、だったら二人で何をしてたか教えてくれよ」
「いや、それは……」
言える訳が無い。
変異種の事は一般人には明かしてはいけないんだそうだ。そんなものの存在を公表してしまったら、混乱が起きるだから。僕も他人に昨日の事を言わないように、口止めされていた。
この間遠藤には喋っちゃったんだけど、まあどうにかごまかせるだろう。信じてなかったし。
「『言わない約束だから』ってか？　二人だけの秘密ってか？　一体何があったんだろうなあ。人には言えない、つまりはそういう事が起こっていたわけだ」
「そういうことって、何だよ」
「ピュアな俺が口にするには過激すぎるぜ」
「お前は絶対ピュアじゃない」
今は情報の時間だった。黒板には、パソコン用語がいくつも並べられている。担当している先生は今日この学校に赴任してきたばかりの先生だった。
なんでも、情報の担当だった先生が、いきなり学校を辞めることが決まったらしい。

「それにしても、つまんねーよなぁ」
遠藤が大きな欠伸をした。一応軽く注意するが、僕も心の中ではそう思っていた。
どうせすぐ忘れてしまうような単語を大量に覚えさせられ、しかもそれらは日常生活では二度と使わないような単語ばかりだ。
なんというか、やりがいを感じれなくて、僕も欠伸をしたくなってしまう。
黒板を見るのに飽きた僕は、視線を天月に移した。他の生徒が机に突っ伏したり雑談をしている中、天月は真面目に授業を聞いていた。姿勢よくノートを書き写し、先生の話に耳を澄ましている。
「愛しの彼女は」
「だからそんなんじゃないって」
「最後まで言わせろよ」
「違うって言ってるだろ」
最後まで聞かなくたって、遠藤の言いたい事はわかる。伊達に長い事付き合っているわけじゃない。
「ああ、つまんねーなぁ」
窓の外を見て、遠藤が独り言を呟いた。
グラウンドでは中学二年生が体育をしている。今は、サッカーの時間なのだろう。リフティングに挑戦している中学生が何人もいた。
「世の中ではさー、他の国の戦争とかテロとかヤバイ殺人事件とか、テレビでやってた集団失踪事件とか、色んな大変なことが起こってるってのによ、俺らはこんな暇もてあましてて、いいのかね。もっとやる事あるだろ。実際さ。知ってるか?昨日、ひき逃げ事件があったらしいぜ。俺たちの町でさえ、そんなことが起こってるんだ」
「そうは言ってもさ。大事だよ。勉強」
「まーなー。それに、つまんねーってことは平和って事だしなぁ。だったら、何か大変な事が起きて忙しくなるよりも、つまんねー方がいいのかもしれないなぁ」
遠藤は欠伸をもう一つ、上げた。

「ま、そんなことはどーでもいいんだけどよ。眠いし。じゃあ、俺寝るわ」
遠藤は机に突っ伏した。それにつられて、僕も寝る事を決める。
天月はと言うと、やはりよい姿勢のまま、授業を聞いていた。

あっという間に一日が過ぎていく。気がつけばもう六時間目が終わり、帰りのホームルーム最中だ。
「起立」
日直の笹倉さんが号令をする。
特に何事も無く、ホームルームが終わった。これで、今日の授業は全て終わり。
「よっしゃ。それじゃ、部活だ部活」
珍しい事を遠藤が言った。部活というのは、ヒーロー同好会のだ。
遠藤がそれを楽しみに思う発言をするのは、かなり珍しい事だった。
「だってよ、クラスの謎の美少女転校生を間近で見放題なんだぜ。それやあ、誰だって楽しみに思うだろ」
こいつの思考回路が中々下らないのだと言う事を僕は忘れていた。
「ねえ、遠藤君。あなた、掃除当番なんじゃないの？」
笹倉さんが言った。確かに、今日、遠藤は掃除当番だ。
「えー、でも今日は美少女転校生天月葵さんとのデートが……」
「何がデートよ。馬鹿馬鹿しい。あの子はそんな事これっぽちも思ってないわよ」
「いや。思ってるね。心のどこかで俺と一緒の個室にいれることを期待している。俺にはわかる。これは確信と言ってもいい。女心と春の空、というだろう？そんなのもわからないなんて、お前は女子高生失格だな」
どこから突っ込んでいいのかわからなかったが、とりあえず「女心と秋の空」と遠藤は言いたかったのだろう。

「そうだ。英志、お前代わってくれよ。明後日の掃除当番お前だろ。俺が明日やるからさ」
「え、嫌だよ。面倒くさい」
「そう言うなよ。美少女転校生と俺の幸せな一時のためだからさ。マジ、頼むよ」
「何、馬鹿なこと言ってるのよ。あなたが掃除当番なんだからね」
「えー、勘弁してよ、美由紀」
遠藤は笹倉さんに引っ張られて掃除用具入れへと向かっていった。
「久坂君」
突然、僕の後ろから天月の声が聞こえきた。
「さっきの話、あまり聞いてなかったけど。同好会、行くの？」
「もちろんあるよ。もし面倒だったら、来なくてもいいけど」
僕は天月の方を向き、答える。
正直、天月がヒーロー同好会に入ってくれた理由がイマイチ思いつかなかった。天月はヒーロー番組なんて観そうじゃないし、僕が誘ったから、流れで承諾しただけなんじゃないのだろうか。
もしそうだったら無理に同好会に連れて行くのは気が引けた。天月も楽しくないだろうし、僕はあまりそういうことはしたくない。
田上君には悪いけど、天月がヒーロー同好会で活動をしたくないのなら、それでもよかった。同好会は結局、頭数さえそろっていれば存続できるから。
「じゃあ、行くわ。部屋まで案内してもらえる？」
意外にも天月は乗り気だった。
「おーい英志。お前にお客さんだぞ」
教室のドアのところで、遠藤がモップを片手に僕に手を振っていた。
「ゴメン天月さん。ちょっと待ってもらっていい？」
「ええ。構わないわ」
「ありがとう」
僕は遠藤の方へと向かう。誰だろうお客さんって。

「この中学生がヒーロー同好会に入りたいんだとよ」
そう言って遠藤が紹介してきたのは、ちょっと痩せ気味な男子生徒だった。
「こいつは英志な。俺達のボスだ。情けなさそうだろう。実際、情けない。少年漫画や熱血アニメなら間違いなく主人公にならないタイプだ」
「ねえ、遠藤。もうちょっとマシな紹介してよ」
ちょっと適当すぎるんじゃないだろうか。
「は、はじめまして。僕、二年D組の内藤晶（ないとうあきら）です。えっと、ヒーロー同好会に入りたいんですけど」
「このアキラ君は特撮ヒーローが大好きなんだそうだ」
「そっか。よろしく」
僕は右手を差し出した。内藤君という少年は、おそるおそる僕の手を握り返す。
「えっと、あの、入部届けって、どこで貰えばいいんですか？」
「ああ、それは、職員室に行けばもらえるから、そうだ、一緒に行こうか」
「え、あ、ありがとうございます……」
内藤君が軽く頭を下げた。声は小さすぎてあまり聞き取れなかったけど。
「でもよ、英志。天月放置プレイはよくないんじゃないか？」
「あ、そうか……」
確かにそうだ。また待たせっきりってのも、よくはない。
「まー、俺が彼女をエスコートすれば万事解決だけどな。全て上手く行く。任せろ。お前が頼るべきは俺なんだよ。ホラ頼むんだ、英志。『遠藤、天月さんをよろしくね』、と」
「久坂に遠藤。どうしたんだよ、二人して」
僕達に声をかけてきたのは田上君だった。
「なんかさ、二人でその子を脅してるみたいに見えるぜ」
「そんな事してないよ」

「こいつはウチの新戦力だぜ。お前のように下心丸出しのスケベエな野郎とは違うのさ」
遠藤が胸を張って言った。下心丸出しと言ったら、それはさっきの遠藤の方が下心丸出しだった。隠す気なんて、全く無かった。
「別に下心なんてないって」
でもまあ、図星だろう。田上君は天月を近くで見るために同好会に入ってきたようなものだし。
そう考えて、僕は思いついた。
「そうだ。田上君さ、天月さんを同好会で使ってる部屋に案内してよ」
田上君に天月を案内してもらえばいいんだ。
活動にはあまり来ていなかったっけど、田上君は同好会で使ってる部屋の場所を知っている。そうすれば天月を待たせないで、僕は内藤君についていく事ができる。田上君的にもその方がいいだろう。
遠藤はちょっと色々と信用なら無い。
「え、マジで」
「おい、何だよそれ」
田上君と遠藤が同時に言った。
「僕はこの子と一緒に職員室に行くからさ、田上君は天月さんを案内しといてもらえる？」
「久坂、お前サイコー」
「うわあ、見損なったぜ、英志。お前は俺の親友だと思っていたのに」
「遠藤君」
僕達の背後から声がした。この声は、天月だ。
「うわ、ビックリした。やめてくれよ。転校生だからって、人の背後に気配を消して歩み寄っていいわけじゃないんだ」
天月は遠藤の言葉を無視して続けた。
「笹倉さんが怒ってるわ。掃除、真面目にやれって」
そういえば遠藤は掃除当番だった。教室の中を覗くと、笹倉さん

が鋭い眼光で遠藤を睨んでいた。
「いや、ごめん。俺が悪かった。そんな怒るなよ、美由紀。折角の可愛い顔が台無し」
遠藤はそう言うと、教室へと戻っていた。中からは笹倉さんの声が聞こえてきた。もう、何を言っているかは大体想像ができる。相変わらずなんだな、あの二人は。
「じゃあ、話が終わったら呼んで」
天月も教室の中へ戻ろうとする天月を呼び止め、説明する。
「わかったわ」
天月は頷いた。田上君が天月に色々と話しかける。天月はそれに対して淡々と答えた。
まあ、こっちは問題ないだろう。
「ごめん、待たせたね。じゃあ、職員室に行こうか」
「は、はい……」
小さな声で、内藤君が返事をした。

内藤君とヒーロー同好会　2

時間は六時。今日はにぎやかな活動だった。天月がいて、内藤君がいて、田上君がいて。いつもは僕と遠藤の二人だけだったから、なんか楽しかった。

内藤君は僕と同じくらいヒーロー物が好きで、部室にあったＤＶＤを殆ど知っていた。今度、家から別の、僕が見たことのないＤＶＤを持ってくる、と約束してくれた。

意外だったのは、天月が特撮が好きだった、という事だ。本物のヒーローなのに、なんというか、不思議で不思議でしかたが無い。

遠藤と田上くんはＤＶＤを観ている僕らの横で、トランプをしていた。途中、田上くんは何度も横まで天月を見ていた。

同好会の活動を終えた僕らは、部室の鍵を閉めて、校門へと向かう。

「じゃあな、アキラ。それに天月……って、なんで英志までそっちにいるんだよ」

帰り際に遠藤が言う。やっぱり、スルーしてはくれなかったか。

僕の家は遠藤と同じ方向だ。駅を使っている田上君とも一緒。けど僕はその反対側の、天月や内藤君と同じ方向に行こうとしていた。

「えっと、父さんと待ち合わせしてるんだ。今日は外食だから」

嘘だ。外食の予定なんてないし、父さんと待ち合わせなんかしてない。

「ふぅん、待ち合わせねぇ」

「何だよ」

「いや、二日連続で天月葵と一緒に帰るのは偶然なのかと思ってた

だけだよ。気にすんな」
「偶然だから。遠藤こそ気にしないで」
本当は偶然じゃないが、理由を説明するわけにはいかない。
さっき、天月に言われた。一ノ宮博士がもう少し僕の身体を調べたがっているそうだ。昨日の検査の続きだろうか。だから、僕はあの黒いキャンピングカーにいかなきゃならない。
「そうか。まあ、責任とらなきゃならなくなるような事はするなよ。じゃあな。帰ろうぜ、田上」
「ああ。久坂、信じてるからな」
田上君が僕を睨んだ。安心して。君達が思ってるようなことは絶対に起きないから。
じゃあね、と二人に告げてその直後。
「あ、そうだ。今日は俺もそっちから帰らなきゃいけないんだ」
と、遠藤が唐突に口を開いた。大人しく帰れよ、お前。
「だからさ、僕と天月さんはなんの関係もないって言ってるじゃん」
「いや、別にお前と天月の関係も興味はあるけど、違うんだよ。俺、アキラに用があるんだよ」
「僕、ですか？」
「内藤君に用って、今日会ったばかりなのに、何があるんだよ」
「うるせぇなあ。世の中にはな、お前には全く思いもしない超複雑なことが沢山あるんだよ。だから俺はアキラと一緒に帰らなきゃならないの。お前と天月のデートを邪魔する気はないから、安心しろよ」
「だから、父さんと待ち合わせをしてるだけだから」
天月もいるってのに、そんな事を言わないで欲しい。遠藤は恥ずかしくないかもしれないけど、僕は恥ずかしい。
「デート？私と、久坂君が？」
「はは、悪い冗談だぜ。久坂」
田上君までそんな事を言い出す。
「全部、遠藤の気のせいだから。気にないで」

少なくとも、僕と天月が一緒に帰るのはデートだからじゃない。遠藤だってわかっているくせに、騒ぎ立てるのは、ちょっと、いや、かなり止めて欲しい。

「ハハハ、満更でもないくせに。英志は照れてるんだな。ピュアな男はモテるぜ」

「黙れよ」

「……いや、悪かった。言い過ぎた。俺が全面的に悪い。謝るから許してくれ」

遠藤の口調はふざけている様だが、こう言うのは本当に反省している時だ。

僕らは田上君に別れを告げ、校門を離れた。

「それで、本当に遠藤はこっちから帰るの？」

「ああ。だから言ったろ。俺はアキラと一緒に帰らなきゃならないんだって」

天月は僕達を置いていくように先を歩く。歩みを合わせるといった思考は無いみたいだ。

「待ってくれよ、天月」

遠藤はそんな事を気にする様子は無く、天月と一緒に歩きはじめる。なにやら色々語りかけているみたいだが、天月はそっけない返事を返すだけだ。

「天月先輩って、なんか不思議ですね」

小さめの声で内藤君が僕に言う。

「うん。そうだね。たしかに不思議だ」

「先輩たちは、付き合ってるんですか？」

「は？」

何を言い出すんだ。この子は。

「いや、なんか遠藤先輩達の言ってる事を聞いてたら、そうなのかなって」

確かに、ＤＶＤを観ている途中でも遠藤と田上君は執拗なまでに天月との事を僕に聞いてきた。事情を知らない人が聞いていれば、

そう勘違いしてもおかしくは無いんじゃないか、という位には。
天月は意味がよくわかっていなかったみたいだけど。
「違う違う。そんなことないから」
「そうなんですか？」
「うん。アレは全部、遠藤の妄言だから。あいつ、中二の時に頭を強く打ったせいで、かなり強烈な妄想癖がついちゃったんだよ」
「おい。そんな出鱈目（でたらめ）を吹き込むなよ。中学生ってのは、何色にも簡単に染まっちまうんだから。聞かす言葉には責任を持たないとな」
いつの間にか、遠藤は僕らの所まで戻ってきていた。
「出鱈目って、大体あってるじゃないか」
中学二年生の時に頭が打った事が本当の原因かわからないが、遠藤が今のように騒がしくなったのは、確かその頃からだった。
それまでは、たまに変な事を言うけれど基本的にはいい奴だったのに、今ではたまにいい奴で基本的には変な事を言っている奴になってしまった。
「あのな、俺のこれは妄言なんかじゃないんだよ。いや、本当はそうかもしれないけど、俺がひたすら喋っているのには理由があるんだよ。それはもう、涙無しに聞かずにはいられないほどの、物凄い理由がな」
僕らは他愛の無い話をしながら歩く。
天月はそれに興味を示すような様子は無く、さらに僕らと天月の間の間隔はさらに広がっていた。
「それじゃあ、僕はここで」
喫茶店の近くにある横断歩道の前で、内藤君が言った。
「今日は楽しかったです。皆、優しかったし」
「よければ明日も来てよ。多分、僕と遠藤は明日も部室にいるからさ」
天月はどうかわからない。きっと、天月が来なかったら田上君も来ないだろう。
「はい。それじゃあ、さようなら」

「また明日だな。明日も学校で会おうぜ。絶対だ。約束だからな」
内藤君と一緒に、遠藤まで僕にそんな事を言ってきた。
「なんだよ、鳩が豆鉄砲食らったような顔しやがって。今時流行らないぜ」
「いや、本当に内藤君と帰るためにこっちに来てたのかな、って思って」
「そうだよ。何度も言ったじゃないか。まあ、いいや。その辺はどうだっていいんだ。お前もホラ、早く行けよ。大好きな天月さんが先に言っちまうぞ」
天月は僕らを気にすることなく、先に進んでいた。
規則正しく、決まったとおりの歩幅とテンポで歩いていく。
「じゃあな、英志。行こうぜ、アキラ」
二人は横断歩道を渡って、路地の中へと入っていった。
僕はそれを確かめて、小走りで天月を追いかけた。別に、離れたままでもよかったんだけど、天月に対する視線が気になってしょうがないんだけど、でもそれは天月を避けているみたいで、よくない事だと思った。

「彼、帰ったの？」
天月が口を開く。彼とは多分、遠藤の事だろう。やっぱり、天月は僕に気を使ってくれていたんだ。
「うん。本当に内藤君に用事があったみたい」
「そう」
相変わらず天月の返事は素っ気ない。まだ二日しか経っていないが、それが天月のいつもどおりなのだろうな、とわかる。よっぽどのことが無ければ感情を表に出さないし、長い言葉を喋ることも無い。

「そういえばさ、天月さんってヒーロー物とか特撮、好きなの？」
多分そうなんだろうけど、他に話題も無いので聞いてみた。だが、天月の返答は僕の予想とは違った。
「懐かしかったから」
「懐かしかった？」
「小さい頃、観てたから。ああいうの」
小さい頃と言うと、幼稚園くらいの頃だろうか。
七歳の時からは訓練を行っていたと聞いたから、多分その時からは普通の生活を送れていなかったんじゃないかと思う。
その頃に何があったか、聞いてはいない。聞いてはいけない事のような気がしていた。
「田上君は、なんで同好会に来ているの？」
「え、何で？」
天月からそんな質問が来るとは思っていなかったので、僕は疑問で返してしまった。
「彼、私の事を観察しているみたいだったから」
観察とは天月らしい言い方だ。本当はただ見とれていただけだと

思うけど。
「気のせいじゃない？」
「そう？あなたも観察されていたけれど」
それはきっと、僕と天月の関係が親密なものなんじゃないかと疑ってたからだろう。けれど天月にそんな事を言うのはちょっと恥ずかしい。
僕はもう一度、気のせいだよ、と言って誤魔化した。
僕らは無言のまま道を歩いていく。高級住宅街には何台もの外国の車が沢山駐車されていた。油断したら盗難とか起きそうだ。僕らは高級住宅街を通り抜け、川原へと着いた。
黒いキャンピングカーは昨日と同じ場所にあった。
それは薄暗くなった辺りと同化している。何も言われなければ、それがそこにあるとは気がつかないだろう。
天月は昨日と同じように黒いカードを通してパスワードを打ち込むパネルを出現させる。パネルを操作すると、小型のカメラを起動した。天月はそれに顔を近づける。昨日は気がつかなかったが、多分網膜認証をしているんだ。
小さい電子音が鳴り、キャンピングカーの後ろの方にある扉が開いた。天月は車内へ入っていき、僕もそれに続く。
「やあ、来てくれたんだね。久坂君」
その声の主は髭と髪を無造作に伸ばした、一ノ宮博士だ。昨日と比べて、目の下の隈がさらに目立っていた。あまり寝ていないのだろうか。
一ノ宮博士の口調は優しかった。昨日の、帰り際のあの吐き捨てるような言葉とは全然印象が違う。というか、昨日の帰り際がおかしかったのか。あの時だけは、僕を拒絶するような感じだった。
「検査、昨日で終わったんじゃなかったんですか？」
僕は疑問を口にする。血液と数本の髪の毛で解析は終わった、というようなことを昨日一ノ宮博士は言っていた。
「ああ、それ。嘘だよ。検査はもう必要ない」

「嘘？」
何でまた、そんな嘘を。
「一ノ宮博士、まさか本当に彼にヴァリアント・システムを使用させる気なのですか？」
天月が食って掛かるように言った。ヴァリアント・システムと言うのは、あのヒーローの姿へと変身するための腕輪をさしているんだと思う。
「さすが、頭の回転が速い。まあ、昨日も言っていた事なんだがね」
一ノ宮博士は不快そうだ。天月に言われた事が、そこまで彼の気分を害したんだろうか。
「君の身体はもう限界だろう。隠してもわかる。その身体は確実に人ではなくなっている。因子が君という情報を書き換えている。後任が必要なんじゃないのか？君がヴァリアント・システムを使用できなくなってからでは、遅いんだよ」
「ですが、彼を巻き込むわけにはいきません。彼まで人でなくなってしまう」
「ならばどうすればいい。ヴァリアント・システムを使用できるかどうかは先天的に決まっている。一種の才能だ。不完全な適正者でさえ、発見できる確立は低い。君のように、長い年月をかけてシステムに適応させよとしても、限界がある。だが、彼の適正は完璧だ。彼にヴァリアント・システムを使ってもらう以外、他にどんな選択肢があるというんだ？」
「だからと言って、彼が因子に侵食されるのを私は容認できません」
限界、後任、才能、因子、侵食。
何を言っているのだろう。僕にはわからなかった。二人は僕の知らないことを知っていて、僕の知らないそれで、僕の何かを決めようとしている。
彼らの言う事が理解できるようになれば、僕も仲間に入れるのだろうか。
一ノ宮博士にメールで呼び出されて、僕は内心、喜んでいた。天

月が居たからあまり表情には出さないようにしたけど、嬉しかった。
天月は僕をあまり変異種と関わらせたくないみたいだ。きっと天月は、僕が危険な目に合わないように、気を使ってくれている。心配してくれている。
でも僕はこの真実をもっと知りたい。もっと関わりたい。僕の知らなかった非日常を体験したくてたまらない。
天月には本当に悪いと思う。
けれど、僕は憧れていたんだ。ずっと、ヒーローに。そんなものは存在しないと諦めて、それでも諦めきれなくて、中途半端な思いをずっと抱いていた。けど、ヒーローはいた。正義の味方は存在した。僕の目の前に確かにそれはいたんだ。
だから、と僕は思う。
僕はその力になりたい。何でもいいから協力したい。それが結果として迷惑にしかならなかったとしても、僕はこの状況を手放したくなかった。
「あの」
そう、それが例えどんなことでも。僕はその力になれるのなら、どんな事だってやりたいんだ。
「僕、やります」
それをすれば、きっと僕はこの状況をもっと知ることができる。根拠も無いのに確信があった。
「待って、久坂君」
「よじ、じゃあ決まりだ」
二人がそう言った直後、一ノ宮博士の携帯電話が鳴った。
「失礼」
携帯電話を胸ポケットから取り出し、一ノ宮博士はそれを開いた。たどたどしい指使いで携帯電話のボタンを操作する。
「何？」
メールの文面を読んでいる内に、一ノ宮博士の眉間にシワが寄る。携帯で時間を確認し、さらに不快感を強めた。

「早過ぎる」
小さく呟いたその声は、十分すぎるほどに苛立ちが篭っていた。
一体何があったのだろうか。
一ノ宮博士は「まあいい」と吐き捨てると、白衣から注射器を取り出し、それを天月に投げた。
注射器の中には黒い液体が入っていた。天月はそれを受け取る。その動作に違和感は無かった。それがなんなのか、天月にはわかっているのだろう。
「変異種が出た。今すぐに君達を転送する」
君たち、ということは、僕もなのだろう。天月は少し困ったように言葉を詰まらせたが、「了解」と言い、キャンピングカーの外へと出る。
「ああ、そうだ。君にはこれを渡しておこう」
天月の後を追って外へと出ようとした僕に、一ノ宮博士が何かを渡してきた。
それは黒い色で重量感がある。それは天月が、黒いヒーローが使った、あの拳銃と同じものだった。
「えっと、これは」
「護身用だよ。反動が通常の物よりかなり軽減されているから、君でも問題なく扱える」
僕はそれのグリップを握った。引き金に指を当ててみる。初めて握った拳銃は全く現実味が無くて、まるで玩具のようだった。
「安全装置が付いたままだから、使う時は外すように」
一ノ宮博士はそう言って運転席の方へ、つまり黒いカーテンの向こう側へと姿を消した。
一人取り残された僕は外へと出る。まだ空はオレンジと青の入り混じった空をしているというのに、川原は高級住宅街の陰に隠れていて、薄暗かった。
その薄暗い中、天月が先程受け取った注射器の針を自らの腕に刺していた。ピストンを押し、黒い液体を体内に注入している。

「天月さん、それ、何なの？」
僕は気になって、つい聞いてしまった。
「私の身体を人に留めるための薬」
「え？」
身体を人に留めるための薬？
訳がわからなかった。天月は本当は人ではない、とでも言うつもりなのだろうか。
「ヴァリアント・システムを使用し続けると、その身体は少しずつ覚醒因子に侵食されていく。その症状を抑えるための、薬」
「覚醒因子？」
「『進化の系譜』を呼び覚ます因子の事」
「それって、変異種と同じものを持っているって事？」
「ヴァリアント・システムで影響を受けるのは、この腕輪に内蔵されているエニティレイターの因子だけだから、一概にそうだとは言えないけれど」
つまり、天月の身体はエニティレイターのそれと混ざりかけている、ということなのか。あの黒い液体は、その症状を緩和させる為の薬って事で。
「一ノ宮博士はあなたをエニティレイターにするつもりよ」
その言葉に僕の鼓動は少し強くなった。
エニティレイターとは、あの黒い装甲をしたヒーローの事だ。僕をそれにする？どうしてだ。
「けれど、私はそんな事はさせたくない。私は貴方には貴方のままでいてもらいたい」
天月は僕をじっと見つめ、淡々とそれを伝えてくる。
「だから、貴方は闘わないで。こんな、間違った正義なんて選ばないで」
「間違った正義？」
僕らの身体は白い光に包まれて、それがどういう意味なのか、聞くことはできなかった。

僕にも何かを守れるならば　1

僕達は喫茶店の前にいた。一ノ宮博士の元へと行く途中に通った場所だ。近くにはファミレスもある。もう少し先にいけば高級住宅街が見えてくる。

「今回の変異種は二体だ。その内の一体がかなりの速度で移動している。もう一体は反応がない。人間の姿に戻った可能性がある」

一ノ宮博士の声だ。それは誰もいないはずの空間から聞こえてくる。五次元的に近いからこそできる芸当、だったっけ。

「とりあえず、今は移動している変異種を追ってくれ」

「了解」

天月は右手首の黒い腕輪を操作する。

ヴァリアント・システム。変異種と闘う、エニティレイターへと姿を変えるための腕輪。

《解除コード認証。ヴァリアント・システム起動》

腕輪から電子音が聞こえてくる。同時に、天月の身体が別のものへと変わっていく。

黒の装甲。白のライン。背中にはバーニアがあり、腰には二丁の拳銃を装備している。両手首には超振動で敵を切り裂くナイフが収納してあった。

天月は瞬く間に漆黒のヒーローへと姿を変えた。ヒーロー、つまりエニティレイターの目が光った。薄暗い街にモーター音が響く。

「貴方は、私が守るから」

そして、天月は背中のバーニアを吹かして飛んだ。目標へ向かって一直線に進んでいく。すさまじい加速だ。

守るから、なんて言われてしまった。

彼女はヒーローなんだから合っている言えば合っている台詞なんだろうけど、僕も一応男だ。男として、女の子に守ると言われるのは、ちょっと情けない気分になる。

「さあ、君も行くんだ」

一ノ宮博士は当たり前のように言ってくる。けれどそんな事を言ったって、人間にはあれに追いつくだけの脚力は無い。もちろん、僕にだって。

「その辺に自転車があるだろう。それを使えばいいじゃないか。そっちの次元の物は誰のものでもないんだから」

「それもそうですね」

僕は適当な家の庭から一台の倒れている自転車を見つけた。

都合よく、チェーンも鍵も掛かっていなかった。スタンドが立っていない所を見ると、乗っている途中の物だったのだろうか。

それにしても、本当に仮想空間というのは生き物以外の全てを忠実に再現しているものらしい。こんな技術、僕は見たことも無ければ聞いたこともない。こんなにすごいのに。どうして世間で話題にならないんだろう。

「仮想空間とかヴァリアント・システムとか、どうやって造ったんですか？」

僕は自転車を起こしながら尋ねた。

「とあるお偉いさんがね、家族を変異種に殺されたんだ。変異種が憎くてしょうがなかったんだろうね。その復讐の為に僕ら、つまり対変異種実働部隊を秘密裏に設立した。世界最高峰の頭脳を集めた研究施設まで立ち上げた。一般人に変異種を知られずに対抗する術を手に入れるために。そこでヴァリアント・システムも仮想空間も造られたんだ。ちなみに、費用は全て税金から出てる」

「そ、そうなんですか」

なんかこう、嫌な一面を聞いてしまった。

確かにヴァリアント・システムを開発したり仮想空間を作り出すにはかなりの費用が掛かるだろう。

けど、それが全部父さん達が必死で働いた税金で賄われているなんて、必要な事なんだとわかっていても、いい感じはしない。

「一ノ宮博士も研究、やったんですか？」

博士と言うのだから、それくらいは当たり前のようにやっているんだろうか。

「僕も一応、開発には携わってたどね。ある科学者によって理論はすでに出来上がっていたんだ。その人は僕の尊敬している人物でもある」

意外だった。

一ノ宮博士にも、尊敬している人っているんだ。口には出さなかったけど、僕は内心でかなり驚いていた。

「その人はある日忽然と姿を消してしまって、ヴァリアントシステムと仮想空間の基本構成のメモと膨大な研究データが残った。僕らのやっている事はその人の後追いに過ぎない。だから正確には、僕は研究をやったとは言えない」

多分、謙遜と言う奴だ。一ノ宮博士がそんな事を言うとは、これまた意外だった。科学者としてのプライドみたいなのがあるんだろうか。

僕は自転車を漕ぐ。天月が向かった方向の大体の場所はわかる。伊達に長年この街で生きてきたわけじゃない。しばらく訪れていない場所だってどうやって行けばいいかわかるし、近道だって知っている。

黒のヒーローの姿が見えた。目が発光している。薄暗い空でそれは目立っていた。

追われているのは兎の様な変異種だった。子供用アニメに出てくるような、二足歩行をしている兎。

兎は住宅の屋根を飛び跳ね、移動している。別の言い方をすれば、逃げている。それはかなり速くて、エニティレイターが加速してもその差は僅かしか縮まらない。

僕にも何かを守れるならば　2

天月が腰のホルスターから銃を取り出した。細かく背中と足裏のバーニアの勢いを調整して身体を安定させ、銃口を兎の変異種へと向ける。

変異種はそれを察知してか、それまでのように長い距離を跳ねるのを止めた。代わりに細かく鋭く、左右に身体を振りながら跳ね始める。何度も方向転換をすることで狙いを定まらせないようにしているのだろう。

「なるべく変異種には見つからないようにしてくれよ。エニティレイターと同じ銃を持っているが、君の身体はただの人だ。襲われたらひとたまりも無い」

一ノ宮博士が忠告してくる。

確かに、今みたいに十字路のど真ん中で突っ立ってたら、簡単に変異種に見つかってしまう。

僕はブロック塀の影に隠れた。自転車をそこに立て掛け、また天月と変異種の闘いを食い入るように見る。

何発もの銃声が響いていた。だがそれは、殆ど命中していない。流れ弾がアスファルトの地面に着弾している。

変異種が左右に身体を振りながら逃げているとは言え、ここまで当たらないものなのだろうか。

昨日、天月は瓦礫の下から変異種の足を正確に狙い射った。その天月が、まだ一発も変異種に弾痕を付けていない。

調子が悪いのだろうか。それとも敵が素早いのだろうか。ここからだと闘いが見えづらい。どちらなのか、把握できない。

銃声が止んだ。多分、弾丸を命中させることは難しいと判断したんだろう。

「ああ、そうだ。忘れていた。これ、君に渡しておくよ」

数秒後、僕の目の前にノートぐらいの大きさのモニターが表れた。

「目視だと見づらいだろう。それ、使っていいから。記録用に撮ってある映像そのままだけど」

僕はそれを手に取る。画面では、天月がナイフを手に取っていた。もう一方の手には銃を握ったままだった。隙があれば、再び引き金を引くつもりなんだ。

天月がバーニアを吹かす。銃口を定まらせる必要がなくなり、身体のブレを気にせずに一気に加速する。

だが、それでも両者の速度の差はそこまでない。気のせいかもしれないが、天月の速さはさっきよりも若干落ちている気がする。やっぱり、調子が悪いのかもしれない。

けど、変異種と天月の距離は少しずつ縮まっていた。

変異種は屋根の上から飛び降り、路地へと着地した。そしてアスファルトとブロック塀を不規則に跳ねる。

天月もそれに続いた。かなりの速さで路地を跳び跳ねる変異種との差を、みるみるうちに詰めていく。

変異種は速い。銃で撃たれないために余計な動きをしているって言うのにそれを追う天月と対して変わらない。むしろ、天月の方が遅いくらいだ。

なのに、天月は差を縮めていく。普通に考えたらありえない早さで。

方向転換にも振り回される事なく――。

「あ、そうか」

そこまで考えて僕は気がついた。天月は変異種の動きを予測しているんだ。変異種の次の動きが判るから、最短距離で動く事ができる。最短距離で無駄なロスなく追っているから、同じくらいの速さでも距離が縮まっていく。経験という奴なんだろうか。

二人の間の距離が殆ど無くなる。手を伸ばせばお互いに届くほどの距離。

天月が手に持つナイフが振動を始めた。超振動ナイフ。何かで聞いたことがある。確か、超振動によって対象との摩擦を減らし、切

れ味を極端に上げる事ができるナイフだ。
天月がそれを振りかざした。吸い寄せられるように変異種の背中へとそれが向かっていく。
だが。
ナイフの刃が突き立てられようとしたその時、天月の身体が横へと吹っ飛ばされた。蹴り飛ばされたのだ。
突然現れた、もう一体の変異種によって。

僕にも何かを守れるならば　3

そいつは銀色の毛で全身を覆われていた。その眼光はまさに獲物を狙う獣だ。顔は犬と似ていて、しかしそれよりも鋭い。

不意に現れたそれは、狼のようだった。銀色の毛並みをした、狼の変異種。

二対一となってしまった。そして、天月は不調だ。

さっきの動きは凄かった。でも、その前に天月が的はずれな場所へと銃を撃っていた事を僕は知っている。変異種が避けられたからではなく、照準が狂っていた。

狼の変異種が兎の変異種へと視線を向けた。何かを喋っているわけではない。だが、何かを伝えようとしている。

天月が立ち上がる。そして、自分を蹴り飛ばした相手に視線を送る。その手に握られているナイフは振動を続けていた。

兎の変異種が大きく跳ぶ。同時に、狼の変異種が地面を蹴る。天月はそれに対し、迎え撃つために前に出る。

兎の変異種はビル五階ほどの高さへ跳んだ。そして、逃げた。

「え？」

僕は思わず声を上げてしまう。わざわざ二体一の有利な状況を作ったのに、どうして逃げたんだろう。あの狼の変異種は兎の変異種を助ける為に出てきたはずで、協力して闘うんじゃなかったのか？

天月がナイフを振るった。それを狼の変異種は紙一重でかわす。そして天月の手首を掴み、握りつぶそうとする。天月から微かに苦痛の声が漏れた。

変異種が天月を振り上げ、そして地面へ振り下ろす。その動きは速い。

天月は空中でバーニアを吹かして体勢を整え、地面へ着地する。天月の腕から何かが飛び出した。それは凄まじい速さで変異種の手首に突き刺さる。そのままの勢いでそれは変異種の手首を切断した。

絶叫が薄暗い街に響く。天月を掴む手は力を無くし、落ちた。変異種の手首からは赤い血が吹き出している。

変異種も赤い血をしているんだ。

僕はそんな事を思っていた。

考えれば当たり前の事だ。ヒトも狼も、血は赤いんだから、変異種の血は赤いはずだ。

天月は苦しんでいる変異種に蹴りを叩き込んだ。変異主の身体は先程の天月のように、吹き飛ばされる。

天月は追撃をかけようと、地面を蹴り、背中と足の裏の推進剤を燃焼させる。すさまじい速度で変異種との間を詰めいてく。

その時、変異種が身体を回転させた。宙に浮く足で、丁度間合いに入ってきた天月に踵落しを喰らわせる。

天月は反応できず、地面に叩きつけられた。反動で少し、地面から浮く。変異種は天月を浮かすように上へと蹴り、隙だらけの腹を殴った。天月が再び吹き飛ばされる。

変異種はすぐに天月に攻撃を仕掛けると言う事はしなかった。自らの身体を見て、修復状況を確認している。

切断された右手首から先は、手の甲あたりまで再生していた。傷口には、ミミズのような肉が這い、折り重なって新たな肉となっている。

その間に天月が起き上がった。銃を構える手は震えていた。苦しみながら、それでも力を振り絞って構えている。

「ようやく効いてきたか」

一ノ宮博士の、とても小さい、呟きと言う事すら躊躇われるような声が聞こえてくる。

それは僕に話しかけている訳じゃない。誰にも聞かせるつもりのない独り言が偶然僕に聞こえてた。そんな感じだ。

ようやく効いてきた。

それは一体どういう意味なんだろうか。

天月の調子が悪いのは僕の気のせいなんかじゃなくて、しかも一

ノ宮博士はそれの原因について何かを知っている。だったらそれは何なんだ？

銃声が鳴る。だが、それは変異種へと命中することなく、ブロック塀へと直撃する。変異種が避けたからではない。照準が合っていなかったからだ。

一ノ宮博士の発言に、心当たりが一つだけある。あの、天月が闘う前に打ってたあの薬だ。

しかし、あれは覚醒因子とかいうものの侵食を抑える為のものだと言ってた。そのせいで天月が苦しむとは思えない。そもそも、一ノ宮博士が天月を苦しませる意味なんてあるのか？

そんなことあるか、と僕は自分の考えを打ち消した。

何かが崩れる音が聞こえてきた。そこに目をやると、エニティレイター、つまり天月が倒れていた。その周囲にはいくつものブロック塀が欠片となって飛び散っている。

「どうやら因子の侵食が限界に達しているようだ」

「侵食が、限界？」

「変異種とエニティレイターの原理は一緒なんだ。人工的に創られた『進化の系譜』を、言わば起動装置で呼び覚ます事で、エニティレイターとなることができる。その起動装置を覚醒因子と言うんだが、これがまた面倒な代物なんだ。何度も起動を繰り返す事で、その人物の身体と『進化の系譜』に刻まれている生物の境界線をなくしていく」

「それって」

「彼女の身体は今、人でなくなろうとしている。これまでは何も無い素振りをしていたが、本当は覚醒因子の侵食に苦しんでいたはずだ。その影響が、もう抑えきれないほどになっている」

狼の変異種が天月の首を掴んだ。天月はそれに対し、ナイフで抵抗しようとするが、それは敵わない。ナイフを握る手が緩み、ナイフは地面へと転がった。

覚醒因子の影響。ひたすら闘い続けてきたその代償。

天月は僕たちの為に闘ってくれているんだ。僕らが変異種という、危険な存在を知らなくても言いように闘ってくれているんだ。

それなのに、どうして天月がそんな目に会わなくちゃならない？

天月が吊り上げられた。首を締められながら、変異種は天月をブロック塀へと叩きつける。

「仕方が無い。政府に連絡して、軍隊を派遣してもらう。軍隊の準備が整うまで仮想空間は維持しておくから、君はあいつに見つからないように逃げるんだ」

でも、それは。

「天月を見捨てるってことですか？」

僕に逃げろと言ったということは、多分、僕や天月を元の世界に戻せないと言う事なんじゃないか。

事情はわからない。ただ技術的に無理なのかもしれない。天月は覚醒因子とか言うもののせいで苦しんでる。狼の変異種に抵抗する力も残されていない。

それなのに、こんな状況を維持していたら、天月は――。

「仕方がないんだ。今、天月と変異種はかなり接近しているから、転送の際に不具合を生じかねない。天月と変異種の身体が混ざりあって、滅茶苦茶になってしまうかもしれない。君一人を転送するのだって長時間、仮想空間を維持する事を考えると、どうしてもできないんだ。転送と仮想空間の維持には、莫大な量の電力を必要とするから」

天月の身体がエニティレイターから元の人間の姿へと戻る。その顔は苦痛に歪んでいた。それでも首に回されている手を振り解こうともがく。だがその手は緩まない。手が離される様子も無い。

「さあ、早く。彼女が時間を稼いでるうちに」

目の前では天月が苦しんでいる。僕はそれを前にしてただ見ているだけ。さらには天月を犠牲にして逃げる。

そんな事、あっていいはずが無い。

変異種が天月の右手から腕輪を奪い取る。

狼の変異種はほんの少しの間、腕輪を手に取りを眺め、道路へと放り投げた。黒の腕輪が地面に転がる。

このままだと、天月が、死ぬ。

そう考えた途端、どくん、と心臓が強く鼓動する。

僕は「嫌だ」と、呟いていた。何か具体的な理由が頭に浮かんだ

わけじゃない。けれど僕は、どうしても天月が死ぬのが嫌だったんだ。

だから僕はポケットから銃を取り出した。グリップを握り、引き金に指を置く。

さっき手に取った時は玩具のように感じしかしなかったのに、今は本物のそれを握っているという感覚があった。

「何をしているんだ。早く逃げろ」

僕はそれに対し、安全装置を外しながら答える。

「嫌です」

理由は後からこみ上げてくる。僕の無謀な感情と行動に、思考が追いついてくる。

僕はヒーローに憧れていた。目の前に本物のヒーローが現れたときは、本当に嬉しかったんだ。誰かの為に闘っているヒーローを、身を削って闘う天月を、僕は本当にすごい、と思ったんだ。

だから、死なせたくない。

だから、引き金を引く。

だから、僕は。

ブロック塀の影から僕は飛び出し、走った。

人差し指に力を込めた。銃声と共に弾が吐き出され、その反動が僕の手に伝わる。

弾丸は変異種の肩を掠めた。

変異種が僕へと視線を向ける。そして天月の首から手を離した。

天月の身体が地面に落ちる。全ての力を失っていた彼女は、地面に引き込まれるように倒れた。

「こっちだ！」

僕は再び銃を撃つ。。

「何をするんだ。止めろ。そんなことに意味は無い」

弾は変異種から僅かに逸れる。撃てば撃つほど、変異種から離れた所へ飛んでいく。

手が震えていた。足も同じだ。心臓の鼓動が早くなり、嫌な汗が

吹き出てくる。
恐怖の感情が無いと言ったら嘘になる。物語のようにカッコよくいられない。でも、最低の生き方を選ぶなんて嫌だ。誰かを見捨てて生き延びたとして、そんな僕は嫌なんだ。
――そうだ。僕はヒーローに憧れていたんだ。だったら、ヒーローになれなくたって、何か、できることをやらなきゃいけないんだ。
変異種が僕へとゆっくりと歩み寄ってくる。
怖い。
僕は怯えている。足は鋤くんで動かない。手は震えてまともに照準を合わせられない。
でも、何かが僕の背中を後押しする。それが何かはわからない。けれど心の奥底から沸き上がるそれは、確かに僕を鼓舞し、僕を奮い立たせていた。
僕は何度も銃を撃つ。天月には当たらないように、ぶれる照準で変異種を狙う。
だが、次の一瞬、いきなり、前触れもなく、唐突に変異種が吼えた。そして、強く地面を蹴り、僕へと一気に迫ってくる。
変異種の蹴りが僕の腹部へ衝撃を与えた。痛いなんてもんじゃない。身体が腹から裂けるかと思うほどだ。
僕の身体は宙を舞い、そして重力によって道路へと叩きつけられる。そして数秒後、変異種は僕の身体を持ち上げると、電柱へと投げつけた。再び衝撃が僕を襲う。痛さを通り越した痛みのせいで、呻き声すら出ない。僕の身体が地面へ倒れこむ。
変異種は地面に蹲る僕を見ると、敵に値しないとみなしたのか、背を向けた。
天月の方へと向かう。
やめろ。
僕は右手の銃を変異種に向けようとする。けど、僕の右手にそれはなかった。僕の三メートルほど先に、転がり落ちている。
僕は身体を這い、銃を手に取った。銃口を目標へ向け、そして引

き金に力を入れる。だが、弾は出てこなかった。壊れたのかもしれない。

僕がそんな事をしている間に、変異種は天月の元へとたどり着いていた。

天月を殺す気だ。

心臓の鼓動がさらに早く、強くなる。嫌な感覚が僕の全身を駆け抜ける。

自分の弱さが憎い。守りたい時に守ることができない。わずかばかりの抵抗をして、ただ惨めに地面を這い蹲るしかない。

このままじゃダメだ。どうしたらいい。

どうしたら、どうしたら、どうしたら！

その時だった。僕の目にそれが映ったのは。

「あれは……」

僕が見つけたのは腕輪だった。

天月がしていた腕輪。ヴァリアント・システムと呼ばれる腕輪。

エニティレイターという力を得るための腕輪。

仮想空間に転送される前、一ノ宮博士と天月が言い争っていた言葉が思い起こされる。

「彼にヴァリアント・システムを使用させる気なのですか？」

天月は確かにそう言っていた。

「後任が必要なんじゃないのか？」

つまり、新しいヴァリアント・システムの使用者。

「彼の適正は完璧だ」

適正がある。一ノ宮博士は確かにそう言った。

「一ノ宮博士はあなたをエニティレイターにするつもりよ」

そして、僕をエニティレイターにするつもりだった。

だったら、今、僕がこれを使えば。僕がエニティレイターへと変わる事ができれば。

あいつを倒して、天月を救えるかもしれない。

僕にも何かを守れるならば　5

僕は腕輪を掴んだ。そして、それを右手にはめる。すると、腕輪は自動的に太さを調節し、僕の腕にフィットした。

素朴な疑問が生まれる。どうしてあの変異種はこれを外すことができたんだ？

天月がはめていたときも、きっと腕にフィットしていたはずなのに。

腕輪にはいくつかのスイッチがある。天月がヴァリアント・システムを起動するときに押していたやつだ。

「解除コードってやつ、教えてください」

呟いたその声を、一ノ宮博士は聞いている。絶対にそうだ。根拠のない、確信があった。

「……止めた方がいい。まだ君用に最適化されているわけではないし、起動実験も済ませてない。今はとにかく生き延びる事を一番に考えるんだ」

やはり、一ノ宮博士は僕にヴァリアント・システムを使用させたかったんだ。だから僕を嘘の口実で呼び寄せた。

でも今は都合が悪いらしい。だから僕に逃げろと言っている。天月を見捨てて生き延びろ、と。

冗談じゃない。僕の手には力がある。二人とも生き延びる可能性があるんだ。それなのに僕だけ逃げるなんて、駄目だ。

少なくとも僕の憧れは、絶対にそうしない。

「どうでもいいですよ。そんなの。それに、あいつを倒せれば、一ノ宮博士だって都合がいいんでしょう？」

見栄だ。どうだっていいわけが無い。本当は無茶苦茶に怖い。あの化け物と闘うなんて、恐ろしくてしょうがない。

でもやらなきゃ、天月が死ぬ。僕は天月を死なせたくない。

変異種は天月へと、鋭い爪の生えた手を伸ばしていた。

一ノ宮博士が解除コードを口にした。僕はそれにそって、スイッチを順番に押す。

「ありがとうございます」

僕は礼を言った。一ノ宮博士の返事は聞こえない。

解除コードを入力し終えた。程なくして腕輪から電子音が聞こえてくる。

《解除コード認証。ヴァリアント・システム起動》

「死なないでくれよ」

一ノ宮博士が言った。それは僕を心配してくれているからなのだろうか。僕がヴァリアント・システムを使えるからなのだろうか。それともただ、変異種に腕輪を破壊されたくないからなのだろうか。

まあ、いいさ。そんなことはどうでも。

不思議な感覚が僕を包み込む。ずっと前から、産まれる前から知っていたような、そんな感覚。

僕の身体が光に包まれる。黒い装甲と白いラインを持つそれに、身体が変わっていく。

本音を言えば怖くて恐ろしくてたまらない。今すぐ逃げ出したくてたまらない。それでも、僕は守るんだ。守りたいんだ。

死なせるもんか。絶対にそんなこと、させるもんか。

光が次第に薄くなる。

そして僕は、ヒーローへと変身していた。

僕にも何かを守れるならば　6

僕の身体は、僕の身体ではなくなっていた。この状態を上手く形容する言葉が見つからない。判りにくくても簡潔に言うとしたら、僕はエニティレイターに「なった」。

僕の身体は黒の装甲に守られている。でもそれは「装着」されているもじゃない。僕の身体の一部なんだ。腕や足、胸や腰周りの装甲の表層で、僕は風を感じる。それはただの防護服や鎧では絶対にありえない感覚だ。黒の装甲や背中のスラスターを「装着」しているんじゃない。僕の身体が装甲やスラスターに「なった」んだ。

変な感じだ。自分の身体が、自分の身体じゃない。今までに無い感覚が全ての感覚を支配している。

僕は狼の変異種と対峙する。

鼓動が強くなるのを感じた。この身体でも、心臓はあるみたいだ。心臓がポンプする理由。それは、恐怖であり、焦りであり、興奮だ。

何て奴なんだろう、僕は。天月の命が掛かったこの状況で、ヒーローとなれた事に胸を高鳴らせている。

狼の変異種が僕に突っ込んできた。

速い。けれど今の僕はそれにちゃんと反応ができる。さっきは銃を撃つ事すらできなかったのに、狼の変異種の動きが見えていた。

僕は腰に装備されている銃を両手に取る。そして引き金を何度も引く。

反動をあまり感じない。今手にしている銃の性能がいいのか。それとも、このエニティレイターの身体の性能がいいからなのか。

恐らくは後者だ。一ノ宮博士は、僕がさっき使った銃とエニティ

レイターの使う銃は同じだと言っていた。
変異種は大量の弾丸を上へと跳ぶことで避けた。僕はそれを追って銃口を向けるが、狙いが定まらない。乱射を続けるうちに、銃の弾が尽きた。僕は太股あたりから代えのカートリッジを取り出し、両方の銃に装填する。
変異種が民家の屋根に逃げた。発砲するが、弾丸はそれてしまう。今の僕に正確な射撃を行う技術はなかった。
僕は一気に屋根へと跳躍する。力加減がわからなかったので思いっきり跳んだ。
僕の身体はビル三階分の高さまで持っていかれる。下を見ると、狼の変異種が僕を見上げていた。ここからなら、僕の腕でも狙えるかもしれない。
屋根の上の変異種にへと銃口を向ける。そして空中で発砲。
変異種は違う家の屋根へと飛び移り、それを避けた。民家の瓦がいくつもの鉛の直撃を喰らって、破壊される。
僕はそこに膝を曲げて衝撃を和らげながら、着地する。変異種が逃げる。僕はそれを追い、民家の屋根を走った。
一歩で楽々と五メートルくらい進む。足場の悪い、この状況で、だ。普段、こんなに速くこんなに高く動く事なんて、絶対にできない。
変異種が急にその足を止めた。そして、僕へと身体を向ける。
丁度その時、屋根から屋根へ飛び移るために跳躍をしていた僕は、変異種に無防備な姿を晒してしまう。
やばい！
腕を身体の前で交差させた。防御の姿勢をとり、衝撃に備える。
次の瞬間、変異種の握り拳が僕の腕へと叩き込まれた。
僕の身体は強烈な一撃を暗喰らい、アスファルトへと吸い込まれるように落ちていった。
「ぐあっ！」
背中に硬い壁が当たる。痛い。滅茶苦茶に痛い。勢いよく走って

いた所にあんなカウンターを受けたからだ。
僕は痛みをこらえ、起き上がった。
「大丈夫か、久坂君」
大丈夫じゃないですよ。怖いんです。逃げたしたいです――。
口が裂けても言っちゃいけない事だ。言ったとしても、実行に移しちゃいけないことだ。
僕が逃げれば、変異種の標的は天月となる。そしたら、苦しんでいる天月は一瞬で殺されてしまう。だから駄目だ。逃げちゃいけない。痛くて辛くて怖くても、逃げちゃいけないんだ。
一ノ宮博士の言葉に答えることなく、銃をホルスターに収める。口を開いたら、逃げの言葉を口にしそうな自分がいる。だから喋らなかった。
変異種が屋根の上から道路へと降りてきた。
僕を観察するかのような視線を送ってくる。きっと僕の状態を探っているんだ。まだ闘えるのかとか、もう限界なのかとか、そんな感じのことを。

僕にも何かを守れるならば　7

こっちはビビってて逃げ出したくてたまらないってのに、狼の変異種は冷静に状況を見極めている。

闇雲に突っ込んできてくれれば、まだどうにかなりそうな気はする。けど、僕の対処できないような手で攻められたら、どうしようもない。

なら、僕から仕掛けるしかない。やられるまえにやる。絶望的な状況に陥る前に、行動を起こす。目の前の敵に、自分から攻撃を仕掛ける。

でも、と躊躇する僕がいる。

それでも、と背中を押す僕がいる。

どっちの僕を選ぶべきか、そんなの決まっている。怖くてたまらなくても、やるしかない。

僕は変異種との間合いを詰めた。横へ弧を描くようにナイフを振るった。けれどそれはあっさりと避けられる。

懐に変異種が潜り込んでくる。その腕が振りかぶられた。再び拳を振るう気だ。

――させるか。

逆の腕からもう一方のナイフを取り出す。そしてそれを振動させ、変異種の拳を上から突き刺した。ナイフの刃が変異種の手の甲を貫通した。傷口から血が流れ出る。

一瞬動きが止まった。それでも拳は再び動きだし、僕を狙ってくる。

――だったら！

ナイフは前へと押し出した。手の甲を刃が切り裂き、腕の真ん中が骨ごと二つに裂けていく。力は特に必要なかった。それほどまでの切れ味があった。

変異種が絶叫する。

やった、のか。

安堵したその瞬間、腹部に蹴りが直撃した。全く予測していなかった反撃に、僕はよろめく。　腹の装甲がいくつか割れて無くなっている。何かが傷つき、抜け落ちた感覚があった。装甲の下の、白い身体が見えていた。装甲を皮膚だとしたら、それは肉や骨にあたる部分なのだろう。

焦りが頭の中をうめつくす。

昨日、一ノ宮博士が言っていた言葉を思い出した　変異種は、その身体を生命維持が不可能なほどまでに破壊しなければ、死なない。でも今の僕に、今さっき以上の事ができるとは思えない。

できないってことは負けるってことだ。負けるってことは、死ぬってことだ。死ぬってことは――。

変異種が動く。その血だらけの腕を押さえつけながら、跳んだ。

僕はナイフを構えた。それは格好だけのものだった。頭の中はパニックになっていて、どう行動すればいいかなんて事は全く思考の片隅にもない。

高く跳ぶ変異種が目に映る。僕は動かない。いや、動けない。断片的な思考は浮かぶんだけど、片っ端からそれらは消えていく。

変異種が頭の上を飛び越えた。それを目で追う。民家の屋根を失踪していく。血を撒き散らしながら、何所かへと向かっていく。

変異種はどこか遠くへ消えていった。変異種の走った方向は、天月の倒れている場所じゃない。ということは、僕の視界から消えて隙を突いてくるつもりなのだろうか。

しかし、数分が経過しても変異種は姿を見せなかった。

「え？」

間抜けな声が聞こえてくる。それが僕の発した言葉だと気がつくのに、少し時間が掛かった。

尻餅をついた。恐怖と緊張が一気に解けたせいで、足から力が抜けてしまった。心臓は五月蝿いくらい鼓動している。

僕にも何かを守れるならば　8

「逃げたな」
どこからか聞こえてくる声は、一ノ宮博士のものだ。
変異種が逃げた。それはつまり、僕達は生き残った、と言う事だ。
あまり実感がわかなかった。僕は立ち上がり、走った。天月が倒れていた場所へと向かう。
本当に、天月を守れたのだろうか。僕はそんな不安に刈られていた。
もしかしたら、変異種は天月を狙いに行ったのかもしれない。あの逃亡はカモフラージュだったら。そして、天月が襲われていたら。
敵は狼の変異種だけじゃなく、兎の奴もいた。もしかしたら、僕は体よく誘い込まれただけなのかもしれない。もしそうだったら。
僕の考えなしの行動のせいで、天月が死んでいたら。
そう思うと、走らずにはいられなかった。
路地を曲がった。天月の倒れていた場所は大体わかる。昔、何度か通った事のあった場所だ。もう一つさきの路地を左に行けば、そこにたどり着く。
「正直、最適化の済んでいないヴァリアント・システムでここまでやってくれるとは思わなかったよ」
声は聞こえていた。何を言っているかもわかっている。けど、僕はそれに答える余裕は無かった。本当に天月を守れたのか、一刻も早くこの目で確かめたかった。
「君には才能がある。ヴァリアント・システムを扱う才能が」
僕は走る。無事でいてくれ、と願いながら。あの路地を曲がれば、天月が見えるはずだ。
「変異種を倒す事はできなかったが、犠牲者も出さなかった。上出来すぎる」
路地を曲がったそこに、天月はいた。顔を辛苦に歪めていたが、

確かにそこにいた。
「久坂……君？」
エニティレイターとなった僕を見た天月は、悲しそうな声で呟いた。
その声の意味する事は大体わかる。天月は僕を巻き込みたくなかったんだ。僕を巻き込まないために、一ノ宮博士に反論して、自分の体調を偽って闘っていたんだ。
でも僕はそれを無下にして自分から危険な状況に飛び込んだ。自分で選んでしまった。天月からすればそれは理解できないことだと思う。憧れを現実に感じたいからなんて、僕から見たって馬鹿馬鹿しい。
天月の元へと駆け寄る。痛みも緊張も一切を忘れていた。ただひとつの思いが僕を支配していた。
僕は天月を抱き抱える。そうしたかった。そこに天月がいるんだと言う、実感がほしかった。
「久坂君？」
僕の行動に驚く天月を無視して、身体を抱きしめた。そして心の奥底からわき出る、一つの感情を口にする。
「君を守れて、本当によかった――」
変異種に対する怖さも恐れも何もかも、この思いの前ではどうだってよかった。
死にそうな思いをしたことだって、この事実の前ではどうだってよかった。
僕は天月を守れたんだ。
「久坂君、君さえよければ僕らの力になってほしい。君のその才能で、人類を救う英雄になってほしい」
人を救う、ヒーロー。それは僕がなりたかったものだ。
今、わかった。言葉ではなく、気持ちで理解した。誰かを守りたいから、何かを守りたいから、だからヒーローは闘うんだ。
その手に感じる天月を、僕はさらに抱きしめる。

――ああ、君を守れて、本当によかった。
僕の初陣は、こうして幕を閉じた。

僕の日常と非日常　1

僕がエニティレイターとなったあの日から、一週間が経った。
結局、「ヒーロー同好会」の新しいメンバーは、天月と内藤君の二人だった。部員の数が五人になり、僕達の同好会は最悪の状況を回避できた。
活動内容では今までどおり。与えられた部屋で誰かが持ってきた特撮のビデオを観ている。
内藤君はそれを気に入ってくれたらしく、ほぼ毎日通ってくれた。たしか、来なかった日は六日前じゃなかったっけ。それ以外はいつも来てくれている。
あまり自分からは喋らないけど、楽しんでいるのは顔を見ていればわかる。
田上君は天月を見るために同好会に来ている。たまにテレビを見たかと思うと、すぐに視線を逸らしてしまう。
この間「久坂には悪いけど、ちょっと子供だましみたいだ」と言っていた。
意外だったのは、遠藤がヒーロー物の番組や映画を自分から観る様になっていた事だった。多分それは、特撮映画を僕に渡してきた辺りからだったと思う。
これまで僕がどんなに誘っても無理矢理みせても全く興味を示さなかったのに、一体どんな心境の変化なのだろうか。遠藤本人に聞いても「気が向いた」としか教えてくれない。
でも、そんな理由でヒーロー物の作品を観るようになったわけじゃないと思う。なんとなくだけど、そう思う。
それとは別で、もう一つ意外だった事がある。

天月はヒーロー物が好きだ、ということだ。
彼女はいつも、僕や内藤君の持ってきたＤＶＤをじっと観ている。観ているということは、好きなんだと思う。天月の場合は。
この一週間を同じクラスで過ごしていてわかったことなのだが、天月は興味の無いものに対してはあまり自分から関わろうとしない。話かけられたり頼まれたりしたら別だが、それ以外の場合は本当に関わろうとしない。
クラスの女子に対してもそれは同じで、自分から話しかけると言う事は全くといっていいほど無かった。
お陰で女子から嫌われつつあるらしい。
「クール、もとい無愛想で、美人。ほぼ無口だし、自分からは全然喋らない。女子からしてみれば、嫌味な女、ってしか見えないんだろうな。自分たちのことを見下してるんじゃないか、って思ってるんだろうぜ。まあ、天月はそんな奴じゃないんだろうけど」と、遠藤が言っていた。
ただ、笹倉さんは別のようで、天月を購買に誘ったり遊びに誘ったりしているらしい。これも遠藤から聞いたことだ。
「まあ、美由紀は面倒見がいいからな。ほっとけないんだろ。別に、天月自身は悪いやつじゃないしな。クールすぎるだけっつーか」これも、遠藤が言っていたことだ。
それ以外では特に変化は無かった。
学校の授業は問題なく進んでいるし、何か特別な事があったわけでもない。
まあ、ともかく僕の日常はいつも通りだった。
「ヴァリアント・システムの原理は基本的には変異種と同じだ。その腕輪に組み込まれた人工的な『進化の系譜』を、同じく腕輪に組み込まれた覚醒因子によって引き起こし、装着者の身体と一体化させる」
そして、これが僕の非日常。
ここは川原の近くにある廃工場の中だ。この付近を人が通る事は

あまり無い。ここなら、あまり人に見つかる心配は無い。
ヴァリアント・システムに解除コードを入力した。僕の身体が右手首を起点として変化していく。自分の身体が作り変えられていく。
僕の身体は黒をベースとし、白い線が掘り込まれている姿へと変わった。背中や足の裏にはスラスターがあって、腰には拳銃の入ったホルスターがある。腕の中にはナイフが内蔵され、太股の中には十数発の弾が装填できるカートリッジがある。
僕は軽く跳び、そしてそのまま飛んだ。足と背中のスラスターを吹かし、空中を移動する。
これは僕の身体のはずなのに、感覚がまるでちがう。自分の身体ではないのに、これは自分の身体。それに順応している自分が不思議で仕方がない。一週間、毎日訓練していたお陰だ。
「なかなか身体の扱いが上手くなったじゃないか。天月さんもそう思うだろう？」
一ノ宮博士の問いに彼女は無表情で答える。
「上達はしていると思います」
やっぱり、天月は僕が闘う事を嫌がっている。
でも、僕は天月の代わりに闘いたかった。
一ノ宮博士の話では、天月の身体はもう限界なんだそうだ。覚醒因子の侵食が限界まで進んでいて、彼女の身体はヒトでなくなりかけている。
ヴァリアント・システムは人工的な『進化の系譜』との一体化の過程で、自分の身体を別のものへと作り変える。そしてヴァリアント・システムを解除する時、元の身体との間に誤差が生じるらしい。
全く適正のない人間がヴァリアント・システムを使うと、自分の身体に戻れなくなる。例えば腕の一部が黒の装甲のままだったり、ひどい場合はまったく別の何かになってしまう。
天月は適正が高く、その症状を抑える薬を飲む事で人間の姿のままでいられた。でも、その薬は症状を完璧に押さえられるわけじゃなかった。度重なるヴァリアント・システムの使用は使用者の身体

を確実に蝕んでく。
それは天月も例外ではなく、彼女の身体は人のものから段々変わっていっていた。天月の高い運動能力も感情が表に出にくいのも、その影響らしい。
このまま闘い続ければ、天月は人でない何かになり、そして最悪の場合、死んでしまう。
「さすがだ。あの数値は間違いじゃなかった。一週間でここまでできるようになるなんてね。それに、特に身体に異常も無い。最高だよ、久坂君」
一ノ宮博士が言うには、僕には天月以上の適正があるらしい。エニティレイターの覚醒因子に侵食されにくいという、特異体質なんだそうだ。
なので、政府から後任の装着者が来るまでの助っ人ということで、僕が闘う事になった。
この街にいる変異種は残り三体。それを僕が倒す事になった。
まるで僕がヒーローになったみたいで、少しワクワクしている。
「じゃあ今日は、飛行とその身体にある装備を扱う練習だ」
僕はそれに従い、博士の指定したコースを飛行する。
工場の中は適度に広く、そしていくつかの作業用の機械が配置されていた。僕はパイプやベルトコンベアの間を縫って飛ぶ。自分の思ったように飛べる。一週間前には考えられなかった事だ。
この一週間、僕は同好会の活動が終わると、毎日のようにトレーニングをしていた。
僕の技術が皆無だ。ろくな闘い方ができない。
銃の扱い方一つをとってみても、照準はろくに定まらない、適当に撃っているだけ、残弾など全く考えないなど、例を上げればキリがない。
指定されたコースを飛び終えた。
「よし、じゃあ次は射撃だ」
一ノ宮博士の前に着地すした。腰から拳銃を取り出す。

三十メートルほど先に停止したベルトコンベアがある。その上に、十数個の植木鉢がある。それの内の一つ照準を合わせ、撃った。弾丸の命中した植木鉢は割れ、その破片は地面へと落ちていく。僕は別の植木鉢に狙いを定めて引き金を引く。植木鉢が割れた。そしてまた、別の植木鉢に狙いを定める。

全ての植木鉢を撃ち終わると、ベルトコンベアが動き出した。動く的を当てる訓練だ。遠くから植木鉢が流れてくる。

こんな風に、一週間訓練を行っていた。

その間、変異種が出てこなかったのは幸運なんだと思う。三日連続で変異種が現れていた事を考えてみれば、本当に幸運だ。

お陰で、訓練を行うことができた。天月の闘い方にはほど遠いが、一週間前よりは確実に強くなっているはずだ。

狙いを外す時もあるけど、自分の撃ちたい所に銃を撃てるようになったし、飛行の仕方だって覚えた。必殺のあの技だって、使えるようになった。

天月の代わりを完璧にこなせるとは思わないけど、後任の装着者が来るまで、僕も一緒に闘えると思う。力になれると思う。

それに、あの日、あの時、天月を守れた時。

僕はたまらなく嬉しかった。憧れだけで終わらなかったと言う事が。僕にでも、誰かを守れるんだって事が。

だから僕はエニティレイターになるんだ。

僕の日常と非日常　2

訓練が終わった。始めたのが六時で、終わったのは八時。二時間ほどやっていた事になる。

僕はいつものように、右手につけていた腕輪を一ノ宮博士に返そうとした。

「ああ、別にいいよ。君がそのまま持っていて。というか、そうしてくれないと困る。明日から変異種を本格的に探し始める。見つかり次第、君を仮想空間に転送する。その時は連絡をするよ。屋外にいてもらわないと、転送はできないから」

「実戦ってことですか」

「ああ。そうだよ。緊張してきたかい？」

「ええ、まあ」

一週間前にも一度闘ったけど、あの時は怖くて緊張して仕方が無かった。今回はちゃんと訓練をしているし、若干の自信のようなものがあるけれど、それでもやっぱり不安はあるし、恐れもある。

「僕に上手くできますかね」

「ああ、その辺は大丈夫だ。彼女にバックアップに回ってもらうから。もしもの時は、彼女が何とかしてくれる」

「天月が？」

彼女を見る。天月は不思議そうに僕を見てくる。何を疑問に思うのか、と。当たり前のことなんじゃないか、と。そう言っているような気がした。

確かにそうなんだろうけど。

天月が闘うのは当たり前と言えば当たり前の事だ。今までそうしてきたんだ。これからもそうする。たとえエニティレイターという

力が無くなったって、闘う事はできる。
でも生身で闘うって事は、もしも変異種に狙われたら、すぐにやられてしまうと言う事だ。
一週間前も赤い豚の時も、僕は生身では手も足も出なかった。天月が僕を助けてくれなかったら、僕がヴァリアント・システムを使わなかったら、あのまま死んでいただろう。
だから僕は、できれば天月に闘って欲しくなかった。
「もう時間も時間だし、早く帰った方がいい。何かあったら、君の携帯電話に連絡するから。いつでも電話に出れるようにしておいてくれよ」
「僕の携帯に、ですか？」
「ああ。もう知っているから、言う必要は無いよ」
「いつの間に、そんな」
一ノ宮博士に携帯の番号を教えた記憶は無い。
「まあ、知り合いから聞いたのさ。僕は顔が広いからね。こう見えても」
知り合い、と言って真っ先に思いついたのは天月だ。でも、僕は天月に携帯電話の番号もメールアドレスも教えていない。
他には誰も思いつかない。第一、僕が知る分には、一ノ宮博士はいつもキャンピングカーの中にいる。身体を洗うために銭湯くらいは行っていると思うけど、そこで僕との共通の知り合いができるとも思えない。
そこまで考えて、バカらしくなってきた。
一ノ宮博士は政府から変異種を倒すように言われているんだ。政府が後ろについているんだったら、個人情報が全部筒抜けってこともありえなくはない。そう言えば、初対面の時も僕の名前を知っていた。
「とにかく今日は帰ってよく寝る事だ。この一週間の訓練の疲れが溜まっていると思うから」
言われなくてもそうするつもりだった。

普段の僕は俗に言う運動不足で、だからこの数日の訓練はかなり応えていた。エニティレイターの身体で訓練をしているんだけど、多少は僕の本当の身体にも多少は影響があるみたいで、全身が筋肉痛になっていた。

あんなに激しく運動して、筋肉痛で済んでいるだけまだマシだ。

「それじゃあ、彼をよろしく頼むよ。僕はデータの検証をやるから」

天月にそういうと、一ノ宮博士は僕らを置いて、キャンピングカーへと向かった。

これも、一週間続けていた事だ。訓練が終わって、家に帰る。その時に何故か必ず、天月が僕を見送る。一ノ宮博士の指示で。

「もしかしたら、変異種に闇討ちされるかもしれない」

と、一ノ宮博士は言っていた。まあ、理屈はわかる。納得もできる。

でも、気まず事この上ない。僕が勝手に思っているだけだけど。話しかけるのに緊張するって訳じゃない。別にそれ自体は抵抗はない。ただ、天月と近くにいるのが気まずい。

問題はそう、一週間前だ。

――何で僕、あの時あんな事しちゃったんだろうなぁ……。

変異種を倒した後に、天月の元へと向かった時。

僕は思いっきり天月を抱きしめたんだ。それはもう、盛大に。あの時は気分がハイになっていたんだ。そうじゃなきゃ説明がつかない。

――抱きしめるって、そんな間柄じゃないじゃんか。全然さ……。

多分、天月は気にしていないと思う。僕が一方的に気まずく感じているだけなんだ。それはわかっているんだけど。

「はぁ……」

ため息が出てしまう。
「どうかしたの？」
天月は僕の考えている事なんて、絶対に理解できないだろう。それが何、とか言われそうだ。
わかっているんだ。わかっているけど、どうしても意識してしまう。僕一人の、勝手な空回りだ。
抱きしめた天月の身体の感触。天月の鼓動。天月の体温。鮮明に思い出せる。なんだこれ、まるで変態じゃないか。
こんな事を天月に言えない。適当に返事をして、誤魔化すくらいしかできない。
「身体に違和感があるなら、すぐに言って」
僕のことを心配してくれているんだ。それなのに、僕ときたら。
「大丈夫。何とも無いよ」
「……そう」
何かを言いたそうだった。それが僕に対する言及でないことを心の底から祈る。
上手く誤魔化せる自信が無かった。うっかり、変なことを口走ってしまいそうだった。
家に早く帰りたかった。最短ルートを早足で歩く。天月はそれに何も言わず、着いてくる。彼女は僕の事を気遣ってくれているだけなのに、ただそれだけなのに、僕は居心地の悪さを感じている。ああ、僕ってこんなやつだったのか？
「久坂君」
「は、はい」
突然の天月の言葉に、僕は足を止めた。
「貴方は何で、闘う事を決めたの？」
「何でって」
とりあえず、安心した。やっぱり天月は気にしてなかったんだ、と。
そして考える。僕が何で闘うのか。

一秒もしない内に頭に浮かんできた。簡単なことだ。ずっと、頭の中にあったことだから。

「正義の味方になりたかったから、かな」

もちろん、それだけじゃない。

天月を守りたかったから、というのもある。

でもやっぱり、僕は正義の味方になりたかったんだ。

「じゃあ、貴方思うの正義の味方って何？」

天月がそんな事を聞いてくるなんて、思いもしなかった。けど、これもあまり時間は掛からなかった。いつも思っていたことだから。

「誰かの為に闘えて、誰かの為に命を賭けて、誰かの為に平和を守るような人、かな」

自分のことよりも他人を心配できる。損得なんかで動かない。ありえないような、真っ直ぐな人間。

そんな生き方に憧れる。だからそんな生き方をしてみたい。だから僕はヒーローになりたいんだ。

「僕に守ることができるなら、守ってみたいんだ。皆を、この街を、全てを」

あのエニティレイターの力があれば、そうすることができる。僕にだって、誰かを守ることができる。正義のヒーローになることができる。

「僕も力になりたいんだ。平和を守りたい」

「……あなたには、無理よ」

「え？」

驚く僕を置いていくように、天月は歩き出した。

「待って。それ、どういう意味？」

「そのままの意味。貴方はエニティレイターとして闘えない」

意味がわからなかった。どうして、天月はそんな事を言うんだろう。僕の言ったことが気に入らなかったのか？

「貴方の正義は、人を殺せる？」

「なんでそんな話になるのさ。それに、倒すのは人じゃなくて変異

種じゃないか」

「変異種も元々は人間なの。それでも貴方は闘える？」

「闘えるよ。変異種は野放しにできない」

脳を本能に支配されていく変異種は、速やかに殲滅しなければならない。一ノ宮博士が言っていた事だ。

倒さないでいれば、被害が出る。誰かが死んでしまうかもしれない。あの時の、変異種と初めて遭遇した時の恐怖は、今でも明確に覚えている。

けれど天月は、僕の気持ちを折るように言ってくる。

「貴方にはできないわ。絶対に」

天月の言葉の真意がわからなかった。
僕の正義は、人を殺せるのか。
天月はそう言った。僕の思うヒーローを聞き、そう言ったんだ。
僕が誰かを殺す。
想像してみる。誰でもいい。誰でもいいんだ。　エニティレイターとなって、誰かを襲う。誰かを殴る。誰かを撃つ。誰かを切り刻む。想像できない。人を殺すなんて、僕にはできそうにない。
いや、違う。倒すのは変異種だ。危険な奴らだ。僕や天月の事を殺そうとしたやつらだ。放っておけば、犠牲者が出る。傷つけられて恐怖して、殺されてしまうかもしれない。
天月だって、そうしてきたんじゃないか。そのお陰で、僕らはこうして平和に暮らせてるんじゃないか。僕らを守ってくれていた天月は、もうエニティレイターとして闘えないんだ。
だったら、誰かが代わりをやらなきゃいけない。それが、僕だって構わないはずだ。
「英志君は黄昏の時期に突入しました、っと」
窓の外を見ていた僕に、遠藤が喋りかけてくる。
「天月さんと上手く行ってないのか？二週間経たないうちに破局か。大事なのはお互いを思いやる事だぜ。お前、一人で我が侭な考えに走ってないか？」
「僕は何も我が侭な事は言ってないよ」
僕がやらなかったら、天月が苦しむ。だから僕が代わりに闘う。
これって、我がままじゃないはずだ。多分。

「まあ、何があったかわからないけどよ、そうカリカリしない方がいいぞ。落ち着いて話せば理解し合う事もできるだろうよ。時間は有限だ。なるべく早く、仲直りしといた方がいいんじゃないか」
「遠藤には関係ないだろ」
「あるよ。大有りだ」
何を根拠に、こいつは。
「俺とお前は親友じゃないか。その親友が困っていたら、手を差し伸べる。当たり前だろ」
「遠藤……」
よくもまあ、そんな恥ずかしい事を堂々と。
なんか可笑しくて、笑ってしまった。
「感動したか？感動しただろう？俺は親友を第一に考える男だからな。感謝していいぞ」
「違うよ。遠藤の言っている事が狂ってて、苦笑いが出たんだよ」
「声上げて苦笑いかよ。素直じゃないんだから」
丁度その時、チャイムが無かった。
四時間目が終わって、これから昼休みだ。僕らは号令を済ませて昼飯を食べるを準備を始める。
天月は通学途中にコンビニで買ってきたであろう、弁当を食べていた。女の子らしくはないなあ、と思う。
「あーあ。んじゃまあ、俺は学食にでも行こうかな。英志も来たかったら一緒に来てもいいぞ。俺にジャンケンで勝ったら、カレーくらいは奢ってやってもいい」
「素直じゃないな。普通に、一緒に行こうって言えよ。あとカレーはいらない。弁当あるし」
学食は校舎とは別の建物の、二階にある。一階には体育館、二階に学食と購買、屋上にプール。よくわからない造りだ。
学食に行く途中で、内藤君と会う。何人かの中学生と一緒に廊下を歩いていた。
内藤君は僕らに気がつくと、軽く会釈をする。

「よう、アキラ。久しぶりだな。元気だったか？」
何も遠藤は迷うことなく内藤君に話しかけた。というか遠藤、お前は昨日も内藤君に会っているだろ。
「悪くないです。特に違和感もないし」
それに対しての内藤君も回答も変だ。なんだ、特に違和感が無いって。遠藤の影響を受けているのだろうか。あまりよくない傾向だ。
「そうか。良い事だな。健康第一だもんな。じゃあ、一緒に行こうぜ」
「はい」
そう返事をして、中学生に向かって少し、申し訳なさそうに言う。
「僕これから先輩と学食に行くから」
内藤君は中学生達に別れを告げると、僕らの方へやってきた。なんで？
「どうしたのさ、内藤君」
「遠藤先輩と約束してたので。今日、一緒に学食に行くって」
「そうそう。俺達は仲良しこよしだからな。学食で昼飯を食べるくらい、当たり前だろう？」
常識だろ、と言わんばかりの口調だ。
ここ数日で二人は仲はかなりよくなっていた。同好会が終わったあとも二人で何処かへ遊び行くことがあるし、日曜日には内藤君が遠藤の家に遊びに行ったみたいだ。
二人の趣味が底まで合うとは思えないけれど、どうしてそこまで仲がよくなったんだろう。
「まあ、ともかく飯喰いに行こうぜ。腹が減ってしょうがない」
遠藤は一人で学食へ向かっていった。内藤君がその後を追いかける。僕も二人を追いかけ、学食へ向かう。

僕の日常と非日常　4

僕は弁当。遠藤はカツカレーとかけうどん。内藤君は醤油ラーメン。まあ、なんというか、カツカレーとうどんっていうのはボリュームがありすぎると思う。

「本当はさ、カツカレーうどん定食ってのを喰ってみたいんだよ。でも、ここの学食にそれはないんだよな。残念な事に。だから妥協してるんだ。俺は」

遠藤は不満そうにカツカレーを頬張る。

「あのさ、カツカレーうどん定食ってのは初めて聞いたけど、カツカレーとうどんの定食のことなんだろ?だったら、それでいいじゃないか」

遠藤は「わかってないなあ」と言うと、水を飲みながら言った。

「カツカレーうどん定食は『カツカレー』と『うどん』の定食じゃないんだよ。『カツカレーうどん』と『ご飯』の定食なんだ」

「は?カツカレーうどん?」

そんなの、この世の誰が食ったことあるっていうんだ。

僕は想像する。多分、カツカレーうどんとはカレーうどんにカツが乗っているのだろう。そして悲しい気分になった。本当に遠藤はそんなものが食いたいのか、と。

カレーうどんの汁を吸って、カツの衣が湿気てしまうのは目に見えている。しかも、その湿ってカレーの味のしみこんでいるカツは、多分ご飯と一緒に食べるんだ。

だったらカツカレーでいいんじゃないか?カツの衣が湿って美味しいことなんて、まず、ありえない。僕はそう思う。

「先輩、それって美味しいんですか?」

内藤君も疑問に思っている。

「なあ、アキラ。俺が不味いものを好き好んで食う男だと思うか?」

「でも、見たことも聞いた事ないし」

「あのな、カレーうどんの汁がカツに染み込むだろ。そのカツを山盛りのご飯で食べるとな、なんとも言えない味が口の中に広がるんだ。しかもカレーうどんは素でうまい。こんな最高の組み合わせ、美味くなかったら嘘だろう……まあ、俺も話だけで喰った事無いんだけどね」

「なんだよ、出鱈目か。そもそもさ、湿った衣って不味いじゃないか」

「嘘じゃねえよ。カツカレーうどん定食、絶対美味いから。美味くなかったら俺は腹を切るね。そうそう、クリームシチューうどん定食というのも世の中にはあるらしいぞ」

「そっちはもっと不味そうだ」

「英志、それは偏見ってヤツだよ」

「僕もあんまり美味しくないと思います」

「アキラ……俺は悲しいよ……」

とまあ、そんなくだらないことを話しているうちに、僕らは昼ごはんを食べ終えた。なんだかんだ言いながら、遠藤はしっかりとカレーとうどんを食べている。

「ようし、これからどうする？まだ時間あるしな。グラウンドに行って、サッカーでもやるか？」

遠藤は、というかこの学校の生徒は、昼休みによくサッカーをやっている。昼休みにはサッカーしかやらない生徒もいる。授業の合間に弁当を食べておくんだ。ようするに、早弁というやつ。それほどサッカーをしたいってことだ。早弁するほどじゃないと思うけど、僕もサッカーは嫌いじゃない。

「アキラはどうする。お前も見に来てもいいぞ。なんなら、一緒にやってもいい」

「え、でも、先輩達の学年の人しかいないじゃないですか」

サッカーをやる時は、大体学年で固まっている。高一は高一、中二は中二だけでサッカーをしている。当たり前と言えば当たり前のことだ。

「別にいいんじゃないの。無理に誘わなくてもさ」
「だって俺、アキラとサッカーしたいし」
「いや、そういう問題じゃ」
僕は左ポケットから振動を感じた。携帯電話がメールの受信を告げているんだ。
「ちょっとごめん」
僕は携帯を取り出して、メールを開く。一ノ宮博士からだった。件名は無い。そのままだと何がなんだかわからないから、本文を開く。そのメールには、一言こう書いてあった。
変異種が出た、と。
「悪い、二人とも。僕ちょっと、用事ができた」
「用事？用事って一体なんだよ」
僕は遠藤の声を無視して、走り出した。上手い言い訳が思いつかなかった。本当のことを話すわけにもいかない。
「うーん、どうしたんだ英志のヤツ」
「すごく急いでましたね」
「そうだな。あんな急ぐ英志って、珍しいな……うーん、とりあえず、何処か行くか。なんかサッカーやる気、失せちまった。英志どっか行っちゃうし。そうだな、ちょっと学校探索でもするか」
「学校探索？」
「そう。探検と言い換えてもいいぞ。アキラはここに来てまだ二年目だろ。まだ知らない場所が沢山あるはずだ。それを紹介してやる。全部、俺に任せろ」

僕の日常と非日常　5

この時間帯の自転車置き場には誰もいない。自転車なんて、放課後にならなければ誰も使わない。

僕は自転車置き場の、一番人目似つかなそうな場所に向かった。そこには屋根が無い。教室からは死角になっていて、誰かに見られる事もない。仮想空間の転送には、最適の場所だ。

その場所に着くと、そこにはもう天月がいた。僕は急いできたって言うのに。

「ごめん、ちょっと送れちゃって」

「大丈夫。徴集されてから三分以内なら、問題ないから」

再び携帯が振動した。今度は着信だ。

「調子はどうだい。久坂君」

通話ボタンを押すと、一ノ宮博士の声が聞こえてきた。

「準備が整い次第、仮想空間に転送する。座標指定をするから、少し待っていてくれ」

そして通話が切れてしまった。一方的だ。

「もう少し待っててだって」

天月に伝えると、「そう」といつも通りのそっけない返事が返ってきた。それからお互いに何も喋らなくなる。昨日とは違う意味で気まずい。

この気まずさも、きっと僕一人が感じているものなんだ。空回りにもほどがある。アホらしいと思う。

別に喧嘩をしたとか、そういうわけじゃないんだ。昨日の、あの言葉のせいだ。「貴方にはできないわ。絶対に」というあの一言が、僕の中になにかを詰まらせている。

ヴァリアント・システムを使ってエニティレイターになって、天月を守った。変異種と闘う為に訓練をして、武器や身体の扱い方を覚えた。僕は闘える。ヒーローとなって、闘えるんだ。

でも天月は違うと言う。できないと言う。それがたまらなく悔しかった。

本当に空回りだ。自分ひとりだけの、馬鹿馬鹿しい空回り。わかってるのに、僕はヒーローになれるんだ、と自己主張を止めない。

――僕は敵と闘って、皆の平和を守るんだ。できないなんて事は無い。僕はヒーローになるんだ。正義の為に闘うんだ。絶対に、やり遂げてみせる。

その言葉は高揚感を伴って僕の頭の中に響く。とても気持ちがよかった。思考を止めて、身を任せてしまいたいと思うほどに。

ヒーローに、正義に、この状況に、僕は酔っているんだろう。それらはたまらない興奮と心地よさを僕にもたらしている。

ヒーローとなれることに、正義を貫く事に、僕の気持ちは最高に高まっている。

三度目の振動。携帯は一ノ宮博士からの着信を告げていた。僕は携帯を開く。通話を開始すると、間髪いれずに一ノ宮博士の声が聞こえてきた。

「今から君たちを仮想空間に転送する」

その直後、僕らの視界は白く変わった。

仮想空間へと転送される間の、この白い視界。

ここは、僕らの次元と仮想空間の次元の狭間だ。白く見えるのは、僕らの身体を被っている膜。これがなければ、僕らは次元と次元の間を永遠に彷徨う事になる。この膜が僕らを仮想空間へと導いてくれている。

膜が消える。僕らはグラウンドに立っていた。視線の先には校舎がある。近くにはいくつかのサッカーボールが転がっていた。時間はまだ昼休の途中だから、サッカーをしていたんだと思う。

僕らの他にはだれもいない。ここはそういう場所だ。

「今回は、この前の兎の変異種が一体だけ。逃げ足がすばやく、脚力もある。前回は大した攻撃をしてこなかったから攻撃能力はわからないが、一応蹴りには注意しておいてくれ」
「大丈夫ですよ。このためにトレーニングしてきたんですから」
僕は一ノ宮博士の声に答え、制服の袖をまくった。僕の右手首には腕輪がはめられている。ヴァリアント・システムと呼ばれるものだ。
腕輪のボタンに解除コードを打ち込むと、電子音が聞こえてきた。
《解除コード認証。ヴァリアント・システム起動》
僕の身体が変わっていく。人のものから、エニティレイターというヒーローへ。誰かを守る為の力を持った、敵と闘う姿へ。
「久坂君は敵を追ってくれ。なに、君の適合率なら相当の動きができるはずだ。あの変異種はすばやいが、問題ないだろう。天月さんはバックアップに回ってくれ。但し、できる限りは久坂君に闘わせてくれ。助っ人的な立場とは言え、実戦経験は多いに越した事はない」
「了解」
「それじゃあ、いきます！」
僕は背中と足のスラスターを全力で吹かす。
身体が浮かび、僕は飛行する。

僕の日常と非日常　6

僕の頭の中に、この町の地図が浮かんだ。その中の一つの点が、赤く光っている。

「変異種の座標を転送した。君の意志でイメージとして頭の中に呼び起こす事ができるから、うまく活用してくれ」

エニティレイターの姿だからこそできる事なんだろう。僕の意志に応じて、それは頭の中に浮かんだり消えたりする。

頭の中に浮かぶ点は、学校から離れるように、言い換えれば僕から離れるように動いている。

その方向を見た。

エニティレイターが人間より優れているのは、単純な身体能力だけじゃない。思考の高速化や反射神経の鋭敏化など、感覚も強化されている。もちろん視力だって。

高速で移動するそれを、僕の目は捉えていた。一キロほど先の変異種の後ろ姿は、驚くほど鮮明に見える。兎の変異種は、前回と同じように屋根の上を移動していた。

推進剤を上手く調節し、地面と水平になるような姿勢をとる。そして一気に目標へ向けて飛んだ。

変異種と僕の間は見る見るうちに縮まっていく。僕の真下では、道路や車、信号機や民家が瞬く間に通りすぎる。

一キロはあった変異種との距離が、二、三百メートルほどになっていた。

僕は両腰のホルスターから銃を取り出し、両手で握る。

不意に、変異種が後ろを見た。僕のことを視界に入れて、存在に気がついたのだろう。変異種は一気に加速した。縮まっていたはずの距離が、開き始める。速い。今のままだったら、追いつけない。

――逃がしてたまるか。

僕も速度を上げた。もう、加減をする必要は無かった。さっきま

ではあまりブースターを強く吹かしたくなかった。音で気が付かれてしまうかもしれなかったから。けれど、もうバレてしまった。だったらもう、ブースターから出てくる音を気にする必要は無い。そんなことに意味は無い。

開き始めた距離が、今度は縮まり始めた。

僕と変異種の差がどんどん短くなる。二百メートル、百メートル、五十メートル。よし。この距離なら、僕でも当てることができる。

二丁の銃を構える。身体は水平に保ったままで、引き金を引く。標的に向けて、何度も。

しかし、弾丸は一発も命中しなかった。大量のそれが民家や道路へ着弾する。

兎の変異種は横へと跳んでいたんだ。弾丸が命中する前に逃げていたあの時のように、左右にランダムに動きながら。

僕の技量では、弾丸を命中させる事はできない。

――だったら。

僕は体勢を変える。推進剤の量を調節し、減速。足の裏のブースターを使い、方向転換を行った。銃をホルスターへ収め、高度を落とす。屋根の上、数メートルを飛行する。

兎の変異種が振り向いた。接近している僕を確認すると、何故か立ち止まった。迷っているみたいだった。どうしたらいいのかわからなくて、何もできないみたいだった。

僕は体当たりをかます。変異種は避けなかった。避けれなかったと言った方が、正しいかもしれない。

吹っ飛んだ変異種の身体が民家の屋根に激突した。僕はそれに向けて接近する。左腕でからナイフを取り出した。超振動を起動させて、屋根の上で倒れている変異種に切りかかる。

「もらった！」

だがナイフが変異種の胴を捉えようとしていたその瞬間、変異種が動いた。

右足を高く上げてそこから振り下ろし、その力だけで上空へ跳ね

たのだ。ありえない跳躍の仕方だった。ナイフは目標を失い、民家の屋根に直撃した。

ナイフを引き抜き、僕は変異種を追った。変異種は二つ奥の民家へ着地している。

変異種は再び跳躍する。反撃の姿勢は見れなかった。ただ、逃げているだけ。

「順調だね。この調子なら、短時間で決着が付きそうだ」

一ノ宮博士の声が聞こえてくる。逃げられているだけの今が最高の状況とは言いがたいが、それでも反撃を受けてやられているわけではない。順調、ともいえるか。

「可能なら、変異種を殲滅するのは早いほうがいい。仮想空間を維持するのには電力が必要となるし」

仮想空間の維持。それはつまり、この世界を保ったままにする、ということ。

元々存在しないはずの次元である仮想空間は、その維持に大量のエネルギーを必要とする。「無いの物」を「存在させる」に。

変異種を倒すまで、この空間は保たれている。早く変異種を倒す事ができれば、それだけ仮想空間を保つ必要が無くなる。できるだけ消費電力は少ない方がいい。だから、なるだけ変異種は早く倒した方がいい。

――まあどっちにしろ、変異種は倒すんだから、関係ないか。

敵を倒す。平和を守る。それが、ヒーローのするべきこと。

一刻も早く敵を倒す。そこにどんな理由があろうと、関係ない。敵を倒し、正義を守り、皆が幸せに暮らせるようにできればいい。

僕は変異種を追っていた。空中を飛行し、時には民家の屋根の上を走りながら。素早く方向を変えながら逃げていく変異種に振り回されながらも、距離を確実に詰めることができていた。天月は相手の動きを予測して、差を詰めていたけれど、僕は適当に追っているだけで差を詰めれる。

一ノ宮博士が言うにはこれが適正の差、というのもらしい。僕は

ヴァリアント・システムの適正が高い。つまり、よりエニティレイターへとなれる、ということ。性能をその分、高く引き出せる。僕と天月のなるエニティレイターでは僕の方が速いし、僕の方が力も出せる。

単純に、僕の方が向いているんだ。エニティレイターとした闘う事に。

――ああ、そうだ。できない訳なんてあるもんか。僕は天月より強いんだ。

変異種が屋根の上から飛び降りた。道路を走り始める。入り組んだ十字路を変異種が爆走し、僕はその姿を見失った。けれど、大丈夫だ。僕の頭の中には、これがある。

脳裏に仮想空間の地図を表示させる。移動していく赤い点を、確認した。

「あそこか」

僕はホルスターから銃を取りだした。変異種の逃げる、大体のコースを予測する。道路から見ることのできないギリギリの高度をなべく音を立てないように飛行する。

途中、銃のカートリッジを新しいものと取替える。そして、道路からは見えないように、屋根の上へ隠れた。

変異種が僕の予想した地点に近づいてくる。速度は遅い。多分、歩いているのだろう。僕は屋根の影から視線と銃口が向けれるように、身を出した。

「久坂君、大丈夫？」

天月だ。その声は腕輪あたりから聞こえてくる。天月の持っているトランシーバーかなんかと回線が繋がっているんだ。

「うん、大丈夫。問題ないよ」

なるべく小さな声で腕輪に向けて声を発する。

「無理しないで。あなたできなくても、私が」

「できるよ。僕にだって」

天月の声を遮るように、僕は言った。

「僕だって、変異種を倒せるんだ。天月の補助が無くたって、できるよ」

僕はヒーローになったんだ。訓練だってやった。その成果はちゃんと出てる。

エニティレイターは変異種を殲滅する為の姿、と一ノ宮博士は言っていた。性能をちゃんと引き出せば変異種に負ける事はない、とも言っていた。僕は天月よりも上手くエニティレイターとして闘えるんだ。だったら、僕に変異種を倒せないわけが無いじゃないか。

「久坂君……」

何かを言いたげな口調。僕はそれに気が付いているから、言う。

「僕がやってみせるよ。君の代わりに闘って勝ってみせる」

天月は僕が変異種を倒せないと思っている。僕にできるわけが無いと思っている。自分の代わりができるはずがないと、僕は変異種を倒すだけの力がないと思っている。

だったら、証明してやる。変異種を倒して、天月を納得させて見せる。

「じゃあ、これからまた戦闘になるから」

「……わかったわ」

通信が切れた。僕は屋根の上から身を乗り出し、銃を構える。

――来た。

僕の視界に変異種が映る。兎の変異種は落ち着き無くあたりを見回していた。警戒しているのだろう。

息を殺しながら、変異種に銃口を定める。狙うは脚。一時的にでも機動力を奪って、一気に畳み掛ける。そして、殲滅してやる。

変異種に見つからないよう、視線の動きに気を配る。僕が完全に視界の外にいったときがチャンスだ。そのタイミングで撃てば、銃声が聞こえたとしても、変異種の動きは僅かに遅くなるはずだ。

息を殺し、その時を待つ。

グリップと引き金の感触を確かめながら、変異種の視線を観察する。

視線はせわしなく動いている。僕の隠れている民家にも視線が向けられた。けど、多分、大丈夫だ。見つからないと思う。冷静じゃなければ、隠れている何かを見つけるなんて、そうそうできるもんじゃない。

あの変異種は焦っている。この状況に困惑しているんだ。だから、さっき、いきなり立ち止まったんだ。混乱して、動けなくなってしまったんだ。

変異種は僕を見つけることができないまま、視線を逸らした。もう、別の場所へと意識を向けている。

変異種の身体が完全に僕に背を向けた。後頭部が見える。僕の位置は変異種から死角になる。

――今だ。

引き金を引いた。銃声が鳴る。変異種はそれに気がつき、僕の方を見た。直後、弾丸が変異種の脚を貫通する。

変異種が声のような、悲鳴のような、どちらとも付かない叫びを発した。脚からは血が流れている。

僕は跳び、そして飛んだ。高速で変異種へと接近し、殴りつける。皮膚に毛が触れる感触、そして拳が肉に抉りこむ感触。変異種の身体は吹っ飛ばされ、ブロック塀に叩きつけられた。

変異種の脚が地につく。膝こそ折らなかったが、ダメージはあったようだ。

「うあぁぁぁあ！！！」

僕はナイフを取り出し、それを変異種の右肩に突き刺す。そして、その肩を切り裂いた。

真っ赤な血飛沫と共に、変異種の右腕が地面に落ちた。さらなる絶叫が聞こえてくる。僕はそれを黙らせるように、腹部を殴った。

今度は左脚にナイフを向ける。けれど僕がナイフを突き刺そうとしたその時、轟音と共に、変異種の身体が僕へ向かってきた。

僕は正面から体当たりを食らう。ナイフは僕の手から離れてしまった。何が起こったのかわからないまま、身体がアスファルトに叩きつけられる。

視界には、脚から血を流しながら跳んで逃げていく、兎の変異種が見えている。

僕の日常と非日常　8

僕は起き上がる。目の前のブロック塀はくぼみ、ヒビが入っていた。兎の変異種が蹴った跡だ。ナイフを突き刺そうとした時、兎の変異種はブロック塀を蹴って、僕に体当たりをしてきたんだ。

変異種は血を流しながら民家の上を跳んでいた。少し前のまでの僕から逃げいていた時と比べて、格段に遅い。これなら、簡単に捉えることができる。

僕は脚の裏と背中で推進剤を吹かす。少し跳んで、身体を浮かした。そしてブースターを加速させる。

瞬く間に僕は変異種に追いついた。

僕は銃を取り出し、変異種に撃ち込んだ。命中する。変異種の身体が衝撃で仰け反る。

変異種は叫び声を上げながら、最後の力を振り絞るように、跳んだ。

高く高く、変異種の身体が空へと舞い上がる。

これは、チャンスだ。

あの変異種は、空中を移動する事はできない。攻撃を避けられる事は無い。

敵が弱って、動きが鈍くなって、隙が大量にできるようになったら。することは一つだ。必殺のあの技を、変異種に叩き込む。そして、殲滅する。

僕は右腕に力を込めた。自分の全身の力を、全てそこへと移動させる。そんな感覚。

右腕が発光を始めた。そこに力が集中していくのがわかる。

いける。やってみせるさ。天月じゃなくて、僕が、変異種を倒すんだ。

空中の変異種目掛け、一直線。全力を籠めた右拳を、叩き込む為に。

変異種が僕を振り向いた。けど、空中だったら関係ない。いくら僕を認識してたって、僕の攻撃がかわせる訳じゃない。

僕は加速をしながら、光る右腕を変異種へと振りかぶる。

この一撃を叩き込めば、変異種は光となり、消える。敵を倒すことができる。皆も平和も街も、守ることができる。僕だって一人でも闘えるんだと言う事を、天月に証明する事ができる。

この一撃さえ、当てる事ができれば。

そう、当てることができれば。

僕の拳は胴の一部を掠めただけだった。

――しまった！こんな状況で攻撃を外すって、どういうことだよ！

変異種は僕の拳が直撃するその瞬間、身体を捻らせたのだ。そのせいで僕の拳は胴を掠めただけとなってしまった。

力のやり場を失った拳は宿していた力を解放させた。全力をそのままとどめて置く事ができなかった。それは高エネルギーの球体となり、街へ向かおうとしている。

――やばい。こんなのが街に直撃したら！

この一撃は、変異種を光の粒子に変えるほどの力を持っている。物体に直撃したら、同じように消し去る事ができるだろう。民家一つ消えるくらいじゃ、済まない。

「くっ！」

僕は腕の方向を変えた。街の方向を向いている拳を振り上げ、街に直撃しないようにする。

エネルギー体が僕の手から飛び出し、上空へと放たれる。腕から力が抜けていくような感覚。それはそうだ。さっきの技には、僕の全身の力を込めていたんだから。

エネルギー体は上昇していく。そして、破裂した。

「うわっ！」

突風が僕の身体を襲う。周囲では、ガラス戸が揺れ、割れていた。

僕はバーニアを全力で吹かし、なんとかそれに耐えた。しかし空を飛べない兎の変異種は突風に耐えれるはずが無く、風に流され、

そのまま地面に落ちていく。
民家の屋根が剥がれた。瓦が吹っ飛ぶ。歩道に倒れていた自転車が車に激突して、その窓を破壊していた。電柱がゆれ、中には折れてしまうものもあった。
なんて威力だ。
「無事か、久坂君」
突風の中、かき消されそうな一ノ宮博士の声を、僕は何とか聞き取る。
「ええ、一応」
風が少しずつ止んでいた。
あれが街に直撃したら本当に危なかった。上空で爆発して、あの威力なんだ。仮想空間での出来事は多少、僕らの住んでいる次元に反映されるらしい。もし街に直撃していたら、僕ら住んでいるの次元で、何かしらの被害を被っていたかもしれない。
「そうか。ならいいんだ」
エネルギー体の爆発の衝撃がほぼ完全に収まった。生き物の気配をろくに感じない世界は、何事も無かったかのように静けさを取り戻す。
不意に、身体に妙な倦怠感を感じた。だるさと疲れが僕の身体に押し寄せる。あの技を使ったせいだ。全力を籠めたから、その分の疲れが僕の身体に出てきたんだ。
僕は変異種を探す。突風に押し切られて、地面に落下したはずだ。周囲を見回したが、しかしそれらしい影は見えなかった。かわりに、血の跡、というより血の線が見える。
その線は十字路を曲がっていて、この位置からでは目で変異種を確認する事はできなかった。
だるさを必死に訴える身体を無視して、僕はそこへと向かう。左腕からナイフを取り出し、握った。あの技はもう使えそうに無い。だったら、変異種の急所とやらを潰すしかなさそうだ。
血の線をたどり、変異種を探す。二つほど道を曲がった所に、そ

いつはいた。道路を這い、移動していた。脚がおかしな方向に曲がっていた。着地に失敗したのだろうか。

僕は変異種の正面に立った。獣と人の織り交ざった顔が見える。

急所って、多分、心臓とか頭だよな……

僕はナイフを振動させた。そして、這っている変異種の身体を押さえつける。変異種の身体は震えていた。恐怖に怯えているのだろうか。

でも、見過ごすわけにはいかなかった。ここで僕が変異種を倒さなければ、誰かが犠牲になるかもしれない。変異種の中の本能がいつ暴走して、誰が傷いてしまうのうか、全く予想できない。

だからやらなきゃいけない。僕がここでやらなきゃいけないんだ。

それがヒーローで、それが正義というもの。誰かの為に、僕は闘うんだだから――。

その時だった。変異種の身体が、違うものへと変わっていったのは。

いや、変わったんじゃない。戻ったんだ。発光を行いながら、変異種が人の姿へと戻っていく。脚や胴体、そして頭が変異種のそれから人のそれへと戻っていく。

「え……？」

僕は目の前の光景が信じられなかった。

いや、変異種が人へと戻った事が信じられなかったんじゃない。確かにいきなり人へと戻った事に少なからず戸惑いはあった。けれど、目の前の出来事に比べれば、そんなことはどうでもよかった。

僕の手は華奢（きゃしゃ）な少年の身体を押さえつけていた。

運動をしているわけではないとすぐにわかる身体。細く、お世辞にも太いとは言えない身体。喧嘩をしたら、骨が折れてしまいそうな身体。

僕はそれを知っていた。一週間前に、知ったばかりだった。怯え、涙を流しながら助けを請うその少年の顔を僕は知っている。

「やめて……殺さないで……お願いします……」

恐怖に怯えたその声。それはまるで、僕とはじめてあった時のような声だった。

いや、今の方が酷い。完全に怯えきって、その顔は真っ青になっていた。

鼻水と涙と涎が垂れ流しになっている。幼さを残したその顔は、ぐしゃぐしゃに歪んでいた。

その少年を僕は知っている。

それは紛れも無く、内藤君だった。

どうして、君が。どうして、君は。

なんで、内藤君が。

内藤君の身体は右肩から先が切断され、足からは血を流していた。

どうして、こんな。

本当はわかっていた。けど、わかりたくなかった。そんな事、信じたくなかった。

内藤君が変異種？　そんなこと、あるわけないじゃないか。

ナイフが手から落ちる。内藤君を押さえつけている手から力が抜ける。

僕と内藤君は昼を一緒に食べたんだ。そこには遠藤もいた。下らない話をして、学食で昼休を過ごして、その後サッカーをするとかしないとか、そんな話をしていたんだ。

その子は地面を這って僕から遠ざかろうとしていた。

信じたくなかった。あり得ないと思った。でも、その少年は間違いなく内藤君だった。

細い身体。幼さを残している姿。僕の知っている内藤君だった。

制服を着ていて、白いワイシャツに血が染みている。よく見ると茶色のシミがあった。昼に食べていた、醤油ラーメンのスープだ。

片腕と無事な片方の足で、なんとかアスファルトの地面を這っている。しかし、血がひたすら流れ出ていた。背中にもいくつもの傷跡がある。さっき、僕が何発も弾丸を撃ち込んだからだ。

嘘だ。

僕は声を出す事ができない。思考するのが精一杯だった。

どうして内藤君なんだ。あの子は僕らの同好会に入ってくれて、楽しそうな顔を見せてくれた。僕らと一緒にいたはずなんだ。遠藤

となぜか仲良くなっていて、僕も仲良くなって、最初は僕らに怯えていたけど、そんなこともなくなっていたのに。いい子だったんだ。変異種なんて、関係ない子のはずだったのに。

「久坂君、どうしたんだ？はやく、変異種を殲滅するんだ」

当たり前のように一ノ宮博士は僕を促す。いや、一ノ宮博士にとっては当たり前のことなんだ。

でも、僕にはできない。

殲滅するって言う事はつまり、僕が、内藤君を――

殲滅と言えば、違う意味に聞こえてしまう。当然の事に聞こえてしまう。何も間違っていない、正しい事のように聞こえてしまう。それだけで自分を肯定するには十分なほどに。

でも違う。違うんだ。殲滅と言い換えているだけで、僕がやろうとしてたことは、一ノ宮博士が言っていることは――「殺す」って事なんだ。

僕の身体は震えていた。恐怖じゃない。怯えているわけじゃない。ただ、震えていた。

ヒーローだとか正義だとか、そんな考えは頭の中から消し飛んでいた。あんなにも僕を高揚させていた言葉は、この状況になんら意味を持たなかった。

目の前で起こっていることをわかりたくなかった。目を逸らしたかった。けれど、僕の視線は内藤君に吸い込まれてしまう。

「はっ……くっ……」

苦痛の声を上げながら、内藤君は僕から逃げる。片腕で地面を這って、生き延びようと僕から遠ざかる。

僕の身体は小刻みに震えていた。何に震えているのか、僕にはわからない。意思とは関係のない何かが僕の身体を震えさせといた。

「嫌だ、死にたくない……」

今にも消え入りそうな声が聞こえてくる。

「死にたくないよ、先輩……」

内藤君の傷は修復が始まっていた。肉が傷を高速で被い、出血を

止ようとしている。弾丸を打ち込まれた場所も、腕を切断されたところも、少しずつ再生している。生きようとしているんだ。人間の身体でも、変異種の本能が内藤君を生かそうとしている。

僕がこのまま何もしなければ、内藤君は生き残る事ができるんじゃないか？

僕は希望を無理矢理見いだすように、思考する。

このまま、何もせず終わってしまえば、そして仮想空間を解除されてしまえばいいんだ。一ノ宮博士だって、ずっと仮想空間を維持させるなんてできないはずだ。それだけ電力を喰うんだから、なるべく無駄に仮想空間を維持するのは避けたいことのはずだ。僕が闘わなければ、仮想空間を維持することに意味はなくなる。

そうだ。僕が何もしなければいいんだ。そうすれば内藤君は生き残って――

僕の背後から、乾いた音が聞こえた。

銃声だった。

直後、内藤君の頭の一部が弾けた。血と共に、肉片が空中に飛び散る。内藤君は一瞬、たった一言だけ、「あ」と声を上げた。そして、頭から大量の血が噴出す。

飛び散ったそれらは道路に撒き散らされた。肉と骨。そして目玉と髪の毛。

頭の一部を失いつつも、数秒間、内藤君は動いていた。生き延びようとしていた。

しかし程なく力を失う。身体は動きを止め、地面にすべてを委ねた。身体の再生もとまり、血を垂れ流すだけだった。

内藤君が、死んだ。

僕は背後を振り向く。そこには、銃を握っている天月がいた。

天月が撃ったんだ。

そして内藤君は頭部に弾丸を受け、死んだ。

それが目の前で起こったことだった。

「どうして！」

僕は立ち上がり、天月に詰め寄る。身体が勝手に動いていた。考える前に言葉が出ていた。

「どうして内藤君を！」

天月は悲しい眼差しで僕を見つめている。とても深く暗い、憂いを込めて。

「内藤君は死にたくないって言ってたんだ！死ぬのが嫌だったんだ！生きたかったんだ！それなのに、どうして君は！」

止まらない。言葉があふれでる。

「なんで撃ったんだ！内藤君は普通の中学生だったじゃないか！僕らと同じ人間だったじゃないか！どうして、君は、君は！」

答えなんて、聞かなくてもわかっていた。

そう、変異種は殲滅しなければならない。

天月はこれまでそういう世界で生きていたんだ。これまでそうして生きてきたんだ。だから、今回もそうした。それだけのこと。

そして、内藤君を撃ったのは僕の代わりにやったことなんだ。僕が内藤君を殺せないから、代わりに天月がやった。やらなければならなかったから。

ああ、わかってるさ。天月は僕の代わりにやったんだって。僕が内藤君を殺さなくてもいいようにしてくれんだって。

でも、言葉は溢れてしまう。

「内藤君は一緒に笑ってくれて、喜んでくれて、楽しんでくれて！」

僕は膝を地面についた。

「内藤君は、僕らの後輩で、仲間で、友達だったのに……」

涙はでなかった。僕がエニティレイターだから。代わりに震えていた。ずっと、ずっと。

「これが、変異種と闘うということ」

天月の言葉が聞こえてくる。

「変異種は人間なの。偶然に、覚醒因子が目覚めてしまっただけの、私達と同じ人間。けれど、時が経つにつれて思考が本能に支配されていくから、いつ暴れてしまうかわからないから、私達は変異種を

殺している」

そうだ。僕もそうしようとした。迷わず、大義を掲げて、そうしようとしたんだ。それが正義だと言って、それがヒーローのすべきことだと思い込んで。

「私達は人殺しよ。どんな理由をつけても、それは覆らない。危険だからと、なんの罪もない、偶然にそうなってしまっただけの人間を殺している」

人殺し。

ひとごろし。

ヒトゴロシ。

頭の中で言葉が響く。何度も何度も響いている。現実味のわかない言葉。なのに、重く、僕の心を押さえつけてくる。

「貴方の正義は幼い。だからこそ、純粋で真っ直ぐで歪みのない正義でいれる」

天月は言葉を続ける。こうなってしまったことを、後悔するように。

「貴方はエニティレイターになるべきではなかった」

僕はそれを、ただ黙って聞いている。

僕の足元に、血が流れてきていた。誰の血かは、考えなくてもわかる。

それは少し、温かみを帯びていた。それは、ほんの少し前まで内藤君が生きていたから。

「あ、ああ……」

涙は出ない。エニティレイターは泣けないから。

悲しみと苦しみが津波のように押し寄せてくる。一気に僕の心を埋め尽くす。それ以外の感情を消し去っていく。

「あああああああああああああ！！！」

僕は叫んだ。

感情を押さえられなかった。押さえられるわけがなかった。

僕の絶叫は、静かな世界に響いていく。

内藤君は死んだ。
死んだんだ。
「あああああああああああああああああ！！！！」
僕はただ叫んだ。
そうすることしか、できなかった。

僕はただの人殺し　1

正義って、なんだ。

僕は真っ暗な部屋でテレビを観ていた。カーテンの隙間からは、僅かに光が見えていた。いつの間にか、朝になっていたみたいだ。

布団の上にはいくつものＤＶＤのケースがある。この三日間で観終わったものだ。内藤君が死んだあの日から、僕はずっとこの部屋でＤＶＤを観ていた。

テレビの画面では、悪の怪人が人質を取っていた。ヒーローを脅し、変身を解くように迫っている。ヒーローは仕方なくそれに応じる。ヒーローの身体が人間のそれへと戻っていく。悪の怪人は部下を使って、人間となったヒーローを襲わせた。

内藤君の姿が、声が、頭から離れない。考えないようにしても、それを拒んでも、脳裏で再生されていく。

地面を這う内藤君。生き延びようと必死だった内藤君。そして、撃たれて死んだ内藤君。その声。息づかい。表情。

僕は内藤君を殺そうとしていたんだ。ヒーローだから、正義を守るために、という理由で。

殲滅という言葉を使って自分が何かを殺そうとしている実感もなく、彼を撃って、彼を切った。それが正しい事だと思い込んで。

何が正義だ。僕がやろうとしてたことは、ただの人殺しじゃないか。

悪の手下がヒーローに襲い掛かるその瞬間、もう一人のヒーローが現れた。そいつは悪の手下を瞬く間に倒し、不意を突かれてあせる怪人から、人質を開放した。襲われそうになってたヒーローの手を取り、起き上がらせる。二人のヒーローを前に、悪の怪人は後ずさりしていた。

天月はこうなる事をわかっていたんだ。だから彼女は僕をエニティレイターにさせないように一ノ宮博士に反論して、僕を説得しようとしていた。

彼女は言っていたんだ。変異種も人なんだって。僕はそれをちゃんと聞いていたし、わかっていたつもりだった。けれど、心のどこかで思っていたんだ。変異種は悪の怪人だから、倒さなくちゃいけないって。変異種は人間ではなく、ただの危険な存在なんだって。

最悪だ。僕は。

正義という言葉の前に思考を停止させ、ヒーローになれるという状況に酔いしれて、僕は大事な事を忘れていたんだ。

ヒーローが悪の怪人に対し、必殺の蹴りを喰らわせる。胴に直撃したそれは、怪人の身体を爆発させた。怪人の身体がバラバラに飛び散る。二人のヒーローは手を組んだ。お互いを褒め称えるように、熱く手を握り合う。「二人の闘いは続く。悪を倒し、正義を守るために、二人は闘い続ける！」ナレーションが入り、エンディングに入った。スタッフロールが画面に表れ、エンディングテーマが聴こえてくる。

ヒーローは正義を守る為に、悪の怪人を殺した。画面の中のヒーロー達は、その事に何の抵抗もないのだろうか。

正義を守るためだったら、悪は殺しても構わないという事なんだろうか。それとも、怪人だったらいいのだろうか。怪人だって意思を持っているはずなのに。怪人だって、生きているのに。

フィクション（つくりもの）は卑怯だ。都合のいい展開に、都合のいい出来事。もし、自分たちの戦うべき相手が、自分の大切で守りたい人たちならば、ヒーロー達はどうするんだろう。

僕の観ている映像はその答えをくれない。敵は敵で、倒すべき相手。最初からヒーロー達に迷いはなく、その敵を倒している。どのヒーローもそうだった。

正義を守るってことは、正しい道を生きるって事なんじゃないのか。僕の知るヒーローは、いつも悪を倒している。別の言い方をす

れば、殺している。
「お前さ、そいつがヒーローだと思えるの？」
いつだったか、遠藤は僕にそう聞いてきた。
「そいつはさ、お前を助けるために怪物を倒したんだろ？　怪物だって生きてるんだぜ。もしかしたらさ、怪物にだって何か事情があったかもしれないじゃないか。それでも、お前の言うヒーローはそいつを殺したんだ。それでもお前、そのヒーローが正しいって言えるの？」
僕はこの質問をされた時、迷うことなく肯定的な回答をする事ができた。
けれど、今は違う。
「正義の味方なんかじゃないわ」
あの時の帰り道、天月は言っていた。
「変異種になったとしても、人は人よ。だから私は……人殺しだわ」
それに対して僕は考えもせず、自然とかける言葉が見つかっていた。
けれど、今は見つからない。
「貴方の正義は、人を殺せる？」
これも、天月が言っていた事だ。
「変異種も元々は人間なの。それでも貴方は闘える？」
闘える、と僕は答えた。変異種は野放しにできない、と。でもそれは人を殺せる、という意味じゃなくて、変異種を倒す、という意味だったんだ。人殺しの理屈も覚悟も道理も、僕にはなかったんだ。
結局の所、僕の正義は、何も知らなかったんだ。フィクションのカッコいいそれに、憧れているだけだったんだ。
誰かの為に闘えて？
誰かの為に命を賭けて？
誰かの為に平和を守る？
それって、誰かの為に誰かを殺すって事じゃないか。僕が内藤君を殺そうとしたように。変異種だから、という、それだけの理由で。

内藤君は変異種になりたくてなったわけじゃない。偶然、そうなってしまったんだ。ある日突然前触れもなく、覚醒因子が『進化の系譜』を呼び覚まし、内藤君をあの姿へと変えてしまったんだ。

それだけなのに僕は内藤君を殺そうとしていた。

一体、内藤君が何をしたというのだろう。何もしてない。ただ、彼は、生き残るのに必死で――

僕はＤＶＤデッキの中身を取り替えた。新しい映像が流れ始める。けれど、もうそれに、何の魅力も感じれなかった。ただ流しているだけだった。

こんな事に意味はない。何も変わらない。内藤君は戻ってこないし、僕のやった事は、覆らない。けど、僕は期待していた。僕の信じていたヒーロー達が、今の僕に答えをくれる、ということを。

そんなこと、あるわけないとわかっているのに。

僕はただの人殺し　2

敵を倒す事に迷いがないからヒーローはヒーローになれているんだ。自分の正義に迷いがないからそれを貫く事ができるんだ。

だったら、僕の正義って、なんだ？

わからない。あんなにも明確だったはずのものが、今では霞んで、薄れて、消えかけている。それを読み取る事もできず、僕は途方にくれている。

映像は動いている。敵が現れ、悪事を行い、そしてヒーローがそれを阻止する。敵は悪で、ヒーローは正義。そう決まっている。そうできている。

だからヒーローが敵を倒して殺したとしても、正しい事として僕らの頭の中に認識される。でも、ヒーロー達は確実に誰かを殺しているんだ。

でもヒーロー達に迷いはない。敵が悪だからだ。悪を倒さなければ平和が崩れる。悪が蔓延れば世界は壊れる。だからヒーロー達は、自分の守りたいものの為に精一杯闘う。

僕だって、そのつもりだった。

平和を変異種の手から守っているつもりだった。街の皆を人知れず救っているつもりだった。いや、実際にそうだったのかもしれない。少なくとも、敵を一人殺したんだから。

けどその敵は悪なんかじゃなかった。僕らと同じ、普通の人間だったんだ。僕らと同じように生きていて、僕らと同じような生活をしていて、そして僕らと同じように死に怯えていた。

その敵を、僕は殺した。正確には僕じゃなくて、天月が引き金を引いた。それでも僕が敵を、内藤君を殺そうとしていた事実は変わらない。

内藤君はなにも悪くなかったんだ。それなのに、僕は何も考えないで変異種は悪だと決めつけ、殺そうとした。

そんな僕に正義なんてない。あるのは、人を殺したという、ただそれだけ。

頬を何かが触れた。シーツには雫が落ちていた。

僕は泣いていた。涙が溢れていた。視界は歪んで、光が水に反射する。画面が見えなくなっていた。それでも僕は、視線を外さない。

僕の憧れていたヒーローはこんなにも不完全で。僕の信じていた正義はこんなにも不確かなもので。だけど僕にとっては、それが全てだったんだ。そのために僕は守ろうとして、闘って、内藤君を――

ヒーローは敵を倒して、殺している。そして自らの正義を貫いている。何かを守る為に、何かを犠牲にしなければいけないのか？

そうかもしれない。そういうことなのかもしれない。けどそれは、絶対に正義なんかじゃない。犠牲の上に成り立つ正義なんて、あっていいはずが無い。

天月は、僕の正義を幼いと言った。だから僕はこんなにも悩んでいるのだろうか。

だったら、幼くない正義ってなんだ？大人の正義って、なんだ？

この画面の向こう側のヒーローのように、迷うことなく敵を倒し、殺すって事なのか？それは、何かを犠牲にする覚悟を持って闘うって事なのか？

違う、そんなの正義じゃない。そんなの、正しくなんてない。

そう思うこと事態が、幼いって事なのかもしれない。でも僕は認められないんだ。誰かが傷つかなきゃならない、正義なんて。

あんなにも信じていたものは、所詮ただの幻想だったんじゃないか。正しい事も守ることも、本当の非現実の前では儚く脆い。貫く事のできない、あっけない正義だ。

「ごめん……」

謝った所で、何も変わらない。どうしようもなく、現実だけが突きつけられる。

僕は内藤君を殺した。からっぽの正義を振りかざして内藤君を殺したんだ。

正義が何か、僕はもうわからない。
そんなもの、本当にあるのだろうか。作り物じゃない、本当に正しさを貫ける正義なんて、この世にあるのだろうか。
そんな事はわからない。けれどただ一つだけ、わかるっていることがある。
僕のやったことは、正義なんかじゃない――
暗がりの中僕は、泣いている。涙が零れ落ちていく。
それは止まらない。止まる様子もない。止めようとも、思わなかった。

着信と留守番電話

何かを叩く音が、ドアの方から聞こえてくる。程なくして、父さんの声が聞こえた。

「開けるぞ」

僕は何も言わなかった。どっちでもよかった。父さんが入ってこようが来なかろうが、どうでもいい。

画面の中では、肉親を殺されたヒーローが悪の怪人に復讐を誓っていた。

これもそうだ。同じように怪人を殺す。悪だから、敵だから、その行為に違和感を感じる事はない。

「何か食べたか？」

ドアを開けた父さんは、部屋の入り口で立ち止まり、僕に問いかけた。

「食べたよ」

嘘だった。本当は三日前から何も食べてない。そんな気にはなれなかった。ちょっと、水を飲んだくらいだ。

最後に水を飲んだのはいつだったっけ。

少し考えて、止めた。まあ、どうだっていいや。

「そうか……」

多分父さんは、僕の言ったことが嘘だってわかってる。当然だ。台所は綺麗なままだし、生ゴミなんてどこにもない。僕の様子を見て、料理をしなくてもいいように父さんはカップラーメンをいくつか買ってきたくれていたみたいだけど、もちろんそれは一つも開封

されていない。
僕の記憶が正しければ、今日、というかカーテンの隙間が光が出るようになってから、僕はこの部屋から出ていない。尿意や便意も特に感じていなかったから。
「なあ、英志。晩御飯は何を食べたい？」
その言葉で今が大体七時くらいなんだとわかる。いつも晩御飯を食べている時間だったから。
「いらない。お腹いっぱいだから」
僕はまた嘘をつく。お腹は空いている。何も食べてないから。
暫く、父さんは何も喋らなかった。その間、僕はずっと画面を見ている、いや、最初からずっとそうだった。
復讐を誓ったヒーローは、仲間の制止を振り切って、怪人のアジトへと乗り込んだ。下っ端の怪人を蹴散らし、複数の悪の幹部を相手に、圧倒的な強さを見せ付けている。
「辛い事があるなら、全部話してもいいんだ。父さんは、何だって聞くし、どんな相談にでも乗る。お前が何かを抱えているなら、すぐに話してくれ。一人で抱え込んでも、それはきっと、解決しない事だと思うから」
父さんの声は優しい。だから言えない。だってそうだろう？父さんは僕を一人で頑張って育ててくれたのに、僕は人殺しになったんだ。
言えるわけがない。もし言ったら、父さんは悲しむ。そんなのは嫌だ。正義なんてない、間違った僕でも、父さんは悲しませたくなかった。
「大丈夫。なんでもないから。そういう気分なだけだよ」
父さんはきっと、納得しないだろう。でもそれでいい。本当のことは言えない。けど、だからと言ってなにかこれといった言い訳があるわけでもない。
「英志、お前は……」
父さんが何かを言っていた。けどその声は歯切れが悪く、尻すぼ

みに小さくなっていく。テレビの音声に飲み込まれて、何を言っているかわからない。

ヒーローは悪の首領と闘っていた。そのほかの怪人は殆ど全て倒していた。息があるのか、それとも無いのか。詳しくはわからない。でも、多分、後者だ。

「僕は大丈夫だから」

そんな風には絶対に見えないだろう。でもいいんだ。口だけでも、大丈夫なフリをしたかった。

「大丈夫なんだ」

嘘をつく。それでいい。父さんに本当の事を話さなさ無くてすむ。それ以外に、僕は術を知らない。

いつもどおりの生活が送れれば、僕はこんな状況を作らずにすんだんだろう。

朝起きたら学校に行って、授業を聞いて、同好会の活動をして、そして帰ってきて、適当に勉強して、ＤＶＤを観て。

でもそんなこと、できない。僕はどんな顔で遠藤に会えばいいんだ。どんな顔をして毎日を生活すればいいんだ。

だって、僕は内藤君を殺したんだ。いつもどおりなんて、できない。そんな事は不可能だ。ここで、父さんを顔を見ずに、説得力のない嘘をつくのが精一杯なんだ。

「……腹が減ったら、いつでも言ってくれ。英志の食いたい物、なんでも作るからな」

「うん。ありがとう」

悪の首領の秘密兵器が登場し、少しずつ押されていくヒーロー。とどめの一撃を刺されようとしたその時、ヒーローの仲間が現れた。仲間と協力し、ヒーローは憎しみではなく。絆という力で悪の首領を倒す。ありふれた、だからこそ誰もが好む展開だ。僕だってそうだった。

「あまり、遅くなるなよ。じゃあな」

父さんが部屋から出て行った。ドアが閉められ、僕の部屋は、テ

レビの光だけが灯っている。
父さん、僕にはわからないんだ。
僕は心の中で呟く。口には出せなかった。
本当は聞きたいことがあった。尋ねたい事があった。でも、言えない。話を聞く父さんの表情を想像すると、そんな事はとてもじゃないが聞けはしない。
僕はさ、人を殺そうとしたんだ。学校の後輩を、この手で。そしてその子は死んじゃったんだ。僕が殺したのも、一緒なんだ。
でも聞いてよ、父さん。倒さなきゃいけなかったんだよ。だって、その子は変異種っていうヤツで、いつか暴れて人を殺すかもしれないんだ。だから、僕は闘ったんだ。平和を守る為に。正義を守る為に。ヒーローとして。
ねえ、父さん。正義って何なのかな？
どんなに考えても、答えが出ないんだ。倒さなきゃいけない敵を倒したはずなのに、みんなの平和を守ったはずなのに、僕はどうしてもそれが正義だとは思えないんだ。
教えてよ。僕には正義が何か、わからない。わからないんだ。
心の中の、僕だけにしかわからない言葉だ。
ぐるぐるぐるぐる僕の中を駆け巡る。答えを求めて彷徨っている。それを見つけたいから、僕は画面をみつめる。答えがないと知っているのに。
絆の力を得たヒーローは、自分の仲間の大切さを知る。悪を滅ぼし、平和になった世界で生きようと決意を固める。
悪を滅ぼした事に、ヒーロー達はなんの負い目もないだろう。当たり前だ。だって、悪は倒すべき相手なんだから。悪がいるから、世界は脅威に晒されているんだから。
そう考えれば、変異種だって立派な敵だ。悪だ。変異種はいつ暴走するかわからない。
虎の変異種を思い出す。あの、狂ってしまった男を。
もしもあいつが街中で変異種になっていたら、きっと何人もの犠

牲者が出た。人が死んでいた。だから、天月はあいつを倒したんだ。殺したんだ。人々の平和を守る為に。

それは立派な正義と思えて、変異種は倒すべき相手なんじゃないかって気がする。

けど、内藤君だって、変異種だ。僕らと一緒に笑っていた、彼だってそうなんだ。

いつかは内藤君も、あの虎の変異種のようになっていたのかもしれない。けど、内藤君は生きていたんだ。普通の人間と、同じように。それは人ってことなんじゃないのか？だったら、人を殺す事に正義はあるのか？

いくら考えても僕の答えは一緒だ。けど、世界はそれを正義と呼ぶ。僕の正義と世界の正義はズレている。

世界の正義を受け容れてしまえばいいのだろうか。僕もこのヒーロー達の様に、世界を守る為に何かを犠牲にして――そうすれば、きっと楽になれる。

そんなの、ダメだ。世界が許しても、僕の心が許さない。正義を見つけられないまま、僕は暗闇の中で、答えを求め続ける。

映像が止まった。ＤＶＤが終わったんだ。これで、僕は自分の持っているＤＶＤを全て見た事になる。答えは見つかってない。僕の求めていたヒーローは、僕に正義を教えてくれなかった。

「ハ……ハハハ……」

意識しないうちに、僕は小さく笑っていた。

「ハハ、なんだよ、ヒーローってさ……」

どうして僕は、ヒーローに憧れていたんだろう。わからない。それすらもわからなくなっていく。

カッコいいから？何かを守れる人間になりたかったから？だから僕はヒーローに憧れていたのか？

そうだ。この前まで、僕の心は世界の正義を受け容れていたんだ。なのに、何で今、僕はそれを拒もうとする？

わからない、わからない、ワカラナイ……

音が聞こえてきた。今度はドアを叩く音じゃない。なにか、振動している音だ。暗闇の中で、何かが光っていた。机の上の、そこから振動音が聞こえている。

携帯だ。僕の携帯が、振動していたんだ。ベットから降りて、それを手に取る。着信を告げる画面には、「一ノ宮博士」と記されていた。

通話ボタンを押そうとする指が、止まる。

一ノ宮博士は知っている。僕が変異種と闘っていた事を。それを否定的に捉えている事は絶対にないだろう。でも、僕が内藤君を殺そうとしたと知っている人と、関わりたくはなかった。

振動が止まった。不在着信として処理されたんだ。画面には着信ありのマークが出てきた。

僕は安心していた。一ノ宮博士と、話さなくても済むことに。

もう一度、携帯が振動を始めた。着信かと思ったが、違う。不在着信の保留メッセージを告げるアイコンが現れた。わざわざ留守電に入れたってことだ。

僕は気になって、そのアイコンにカーソルを合わせ、ボタンを押す。携帯を耳に当てた。留守番のメッセージが再生される。

「久坂君、大変だ」

一ノ宮博士の声は、焦っているようだった。一体何が、と思った僕は、次の言葉で一ノ宮博士の焦りの意味を理解する。

「天月が、変異種にさらわれた。もしかしたら殺されているかもしれない。これを聞いたら、すぐに僕のところに来てくれ。君にも協力してもらいたい事がある。僕は、いつもの場所にいるから――」

一ノ宮博士の声が、真っ暗な部屋で聞こえていた。

薄暗い廃工場の中で　1

自転車を漕ぐ。力がろくに入らない。けど、それでも自転車を漕ぐ。

――天月がさらわれた？変異種に？しかも、殺されているかもしれない？

ないはずの力を振り絞る。川原へと一直線に向かう。

頭はふらついていた。視界も若干霞んでいる。生ぬるい風が僕の顔に当たる。それすらも辛い。

僕は何も食べず、父さんに何も言わず、家を出てきた。だあから、三日間、まともに何も食べていないことになる。体調が最悪なのはそのせいだ。こんな僕が、一ノ宮博士の所に行ったとして、何かをできるとは思えない。

でも、僕はペダルを踏む。息が切れる。心臓は限界を訴えている。血液が酸素を全身に供給する為に動き回る。それが辛い。まるで、身体の内側から殴られているかのよう。

学校を通り過ぎ、喫茶店やファミレスを通り越し、高級住宅街を抜ける。川原まで、もうすぐだ。

「久坂君！」

僕は呼び止められた。その声の主は、一ノ宮博士だ。

ブレーキをかけ、自転車を停止させる。今にも倒れそうになる身体に鞭打って、なんとか自転車から降りた。

街頭の下に、一ノ宮博士はいた。僕のほうへ走ってくる。無造作な髪も、髭も、白衣も、四日前から何も変わってはいない。

「天月は生きてるんですか？」

息を切らしながら、何とか僕は言葉をひねり出す。どうしても聞きたかった。確かめたかった。果たして、天月は生きているのか？

「詳しい事は僕の車の中で説明する。歩けるかい？相当、顔色悪いけど」

「……大丈夫ですよ」

本当は大丈夫じゃなかったけれど、それ以外に言葉が見つからなかった。

頭がふらつく。このまま倒れてしまいたかった。それでも何とか歩き、僕と一ノ宮博士は川原にたどり着く。

一ノ宮博士は川原の坂を先に下っていった。僕も自転車を止め、その後に続く。坂道を下っていく。

途中、脚を踏み外した。バランスを崩してしまう。態勢を立て直そうとしたが、できなかった。身体を自由に動かせなかった。僕はそのまま、坂を転げ落ちる。

僕はソファーの上で寝ていた。視界に映る光景に見覚えがあった。ここは、あのキャンピングカーの中だ。

「起きたかい？」

だるい身体をなんとか起した僕に、一ノ宮博士がコップを差し出した。それを受け取り、礼を言う。

「まさか、坂で転んで気絶するとは思わなかったよ。君、寝てないのかい？」

僕は気絶していたのか。

確信がもてない。ただ、僕の身体にはいくつかすりむいた跡があった。服には泥が付いている。

「それ、飲むといいよ。僕の特製栄養ドリンクだから」

言われるがままに、僕はそれに口をつけた。
不味い。
それしか感じなかった。かと言って、そのせいでを吐き気を催すとか、吹き出してしまうとか、そんなことはなかった。
喉を久しぶりにまともな物が通った感覚があった。水ばかりだった僕の身体に、その不味いながらも栄養を含んだそれが染み込んで行く。
「ありがとうございます」
僕は二度目の礼を言った。少し、身体がまともになった気がした。
「そうか。ならよかった。それじゃあ、本題に入ろうか」
一ノ宮博士はノートパソコンを机の上に置く。画面には地図が表示されている。
何処かで見た事があるような地図だった。そうだ、アレにている。エニティレイターとなった僕の頭の中に送り込まれてきた、あの時の地図に。ただ、僕の頭の中にあった地図とは違い、赤い点ではなく、代わりに緑色の点があった。
「これが、天月のいる場所。正確には、ヴァリアント・システムの所在地だ。これは三時間前から全く動いていない。僕に連絡もせず、天月一人でこの場所にとどまり続けている、とは考えられない」
いや、ちょっと待て。ヴァリアント・システムのある場所が天月のいる場所ってことは。
「天月が、ヴァリアント・システムを持ってるってことですか？」
「当然だろう？君が天月にヴァリアント・システムを渡していたんじゃないか。だから今、エニティレイターは彼女だ」
そうか、と僕は当たり前のことに気が付く。
四日前、内藤君が死んだあの時、僕はもう、エニティレイターにはなれないと思った。闘えないと思った。天月もそう言っていたし、僕は自分のしでかした事で頭がいっぱいで、それでもとにかく、ヴァリアント・システムを手放したかった。
何も考えていなかった。僕が闘わないってことは、天月が闘うっ

てことなんだ。覚醒因子が暴走してしまうほどの身体を抱えて、それでも天月は闘うだろう。これまでそうしてきたんだろうから。

「数分ほどだったが、このヴァリアント・システムの反応とほぼ同じ座標に変異種の反応があった。天月はその変異種に捕獲、または殺害された可能性が高い。だが、恐らく生きているはずだ。ヴァリアント・システムは体温を感じ取っている。パスワードを入力するか、こちらから遠隔操作をしない限りはあの腕輪は取り外す事はできないし、装着する事もできないから、変異種の体温を感じ取っているという可能性は低い」

「天月は、生きてるんですね？」

「多分ね。確証はないけれど」

僕はほっと、胸を撫で下ろす。

よかった。天月は死んでない。生きてるんだ。

「だが、安心できる状態ではない。変異種の目的がわからない以上、彼女をこのままにしておくわけにもいかない……そこで、君に頼みがある」

「頼み、ですか」

どんな事かは、大体想像がついている。

「君にはヴァリアント・システムを回収し、それを使って変異種を殲滅して欲しい。できる限りのバックアップはこちらでも行う」

やっぱりそうだ。わかっていた。わざわざ僕を呼びつけたんだ。それ以外の理由はない。

僕は無言になってしまう。答えられなかった。少し前までの僕ならば、すぐに確実に了解していただろう。

天月を助けたい。その気持ちはある。でもそれだけじゃない。僕が変異種を倒すってことは、誰かを殺すってことなんだ。内藤くんが死んでしまった時のように。

「どうして、迷っているんだ？」

多分、一ノ宮博士には理解できない事だと思う。だって、一ノ宮博士はずっとそうしてきたんだから。変異種という敵を倒し、人の

平和を守ってきた。言うなれば、世界の正義で動いてる。
僕はそれがどうしても受け容れられない。誰かを犠牲に、誰かの全てを奪って、平和を守るってことが、どうしても納得がいかない。幼い僕の正義は、それに拘っている。
「変異種を倒す事が、そんなにも嫌なのか？」
「……はい」
「変異種を殲滅しなければ、どれだけの被害が出ると思う？　街中で暴れでもしたら、十数人は確実に、下手をすれば百人単位の人間が命を落とすだろう。変異種を殲滅しないでいることはできないんだ。そして、そうすることで人の平和は守られる。君もわかっているだろう？」
それはわかってる。でも、理屈じゃないんだ。
「でも、変異種だって、僕らと一緒で、生きてるんですよ」
内藤くんがそうだった。他の変異種だってそうだろう。僕らと変異種となった彼らに、何の違いがあるんだ？　危険だといったら、僕らだって対して変わらない。毎日のように世界のどこかで、時には故意に、時には偶然に、誰かは誰かを殺している。
被害が出るって言うのはわかる。それを防がなきゃいけないってのもわかる。けど、偶然そうなってしまっただけの人を、殺していいのか？
「この街の人間が皆殺しにされてもいいって言うのかい？」
「それは……」
「君が言っているのはそういう事だ。いいかい？　変異種を殺さなければ、人が死ぬんだ。確かに変異種は生きている。僕らと同じようにね。けれども、やつらはもはや人間ではない。別の生き物だ。虎やライオンや熊が僕らと共存できると思うか？　僕らと同じ場所で、檻もなく自由に動き回る猛獣たちは、そのうち人を殺すだろう。それと同じだ。変異種は人じゃない。化け物なんだ。放置しておけば人を殺す。君も殺されそうになっただろう？　だったらどうする。
答えは二つある。檻に閉じ込めるか、殺すか。だが変異種には檻

なんて意味はない。檻に閉じ込められないなら、殺すしかない」

僕は何も言い返せない。

そうなんだ。変異種は殺さなくちゃいけない。大切なものを守りたいのなら、そうしなくちゃいけない。

要するに、僕は正義という言葉に固執しているだけなんだ。自分の行動を正当化しておきたいだけなんだ。

守りたいものがあるのなら、何も考えず、何も思わず、それを守る事だけを考えていればいいんだ。

わかってるさ、そんなことは。

「君がやらなければ、人が死ぬ。どれだけの被害になるかは想像がつかない。まあ、確実に天月は死ぬだろうね」

この街の全ての命が消えていくかもしれない。

父さんも、遠藤も、田上君も、笹倉さんも、学校の皆も、一ノ宮博士も、そして、天月も。

わかってる。僕が闘わないってことは、そういうことなんだって。それを防ぎたいなら、答えは一つしかない。

「……わかりました。やりますよ」

そう言うしかないんだ。僕は。

薄暗い廃工場の中で　2

僕は真っ暗な土手を歩く。たった一人で、息を殺しながら。

ヴァリアント・システムの反応は、廃工場の中にあった。僕が特訓に使っていた、所の近くだ。この街で人目につかないところといったら、あそこくらいなものだ。だから廃工場に変異種は天月を連れ去ったんだろう。あの廃工場は人目につかないという、それを知っているという事は、変異種はこの街に長く住んでいるってことだ。

僕はこの街を守る為に、この街の誰かと闘おうとしている。この街の誰かを殺そうとしている。そんなこと、正義じゃない。

けれど、僕の正義に一体どんな価値があるというのだろう。世間とズレている僕の正義は、一ノ宮博士に対し、何も言い返せなかった。

廃工場に向かうのは僕一人だ。一ノ宮博士に「構成員を十人ほど囮に使ってもいい」と言われたが、断った。

一人で歩く。心臓の鼓動は強くなっていく。

怖がっているのか、僕は。

多分、そうだ。たった一人でヴァリアント・システムを奪還するという、そのことに僕は恐怖を感じている。無性に自分が嫌になった。僕は、内藤君にそれ以上の恐怖を与えていたじゃないか。

無性に腹が立った。あんな事をしておいて、一丁前にビビっている僕に、僕自身がとても苛立っている。

暗闇を進みながら僕は思う。

果たして僕は、変異種と闘えるのか？

やります、と言ったのはそうしなければ天月が死んでしまうからだ。それは嫌だった。だからやると言った。でも、僕が闘うという

事は、僕は変異種を倒すという事で、つまり誰かを殺すという事でもある。

誰かを助ける為に、誰かを殺す。僕はそんな事、したくない。内藤君の時と同じ事をするってことだから。あの声。表情。息遣い。脳裏に焼きついて離れない。三日たった今でも、目の前で起こっている事のように、脳内で再現される。

答えが出ないまま、覚悟の無いまま、僕は歩く。

正義を見つける事ができれば、正義という、信じる絶対の「何か」があれば、僕はこんな、覚悟も何も無い、ただ悩んで答えが出ないだけの現状から抜け出せるかもしれない。

けど、探しているものが正義なんだ。信じたいものがわからないんだ。

僕は天月を守りたい。誰も死なせたくない。けど、そのためには誰かを死なせなくちゃならない。

矛盾している。そんなものを信じれるわけが無い。そんな事に、覚悟なんてもてない。それが僕のわがままだって事はわかる。わかってるんだ。

僕が素直に闘う事を受け容れてしまえば、全ては解決する。僕がやらなくても、誰かがやる。変異種を殺すのは誰だっていい。それが僕でも、一緒だ。

わかっているのに、心が受け容れない。そんな事してはいけないと、拒んでいる。

目的の廃工場についた。内部ではほんの少しだけ、灯りがついていた。僕は足音を立てないように気を使いながら、その灯りへと向かう。

変異種はそこにいるだろう。僕の倒さなければならない相手は、そこで待ち構えているはずだ。覚悟も結論も、まだ出てない。ただ、天月を死なせたくないとだけ、それだけははっきりしている。

薄暗い廃工場を、僕は進んでいく。

人影が見えた。一つは何かに座っていて、もう一つは倒れている

方は長い髪。天月だ。
天月は動かない。眠らされているのかもしれない。身体は鎖で拘束されている。でも、拘束されているって事は、生きてるって事だ。
僕は安堵する。
天月の倒れている近くには、腕輪が転がっていた。一ノ宮博士がロックを解除したからだ。変異種に気づかれないようにそれを回収するには、とりあえず変異種の死角から回り込むしかない。
僕は座っている方の人物に目をやった。そいつがどんな風に、どんな所へ視線を向けているか、わからなければ動けないと思ったから。
――は？
物陰から見えたその顔は、ありえるわけが無かった。
「ん、ああ、遅かったじゃねぇか」
そいつは僕に気がついた。完璧に目が合った。間違いない。そいつを、僕は知っている。
「そんなとこに隠れてないで、こっちに来いよ。お前、この腕輪が欲しいんだろ？」
そいつは天月の近くに転がっているそれを拾い、掲げた。
「どうして」
僕は呟いていた。
ふらふらと、自分の意思とは関係なく、脚が進んでいく。心のどこかに、近くで確かめたいと、そんな事があるわけないと、そんな気持ちがあったのかもしれない。
「どうして、お前が！」
薄い灯りの中に、見える顔。
知ってる。間違いない。信じたくない。
「ま、俺には俺なりの考えがあるってね。まあいいや、ともかくさ、闘おうぜ。そのために、そのためだけにここまでのお膳立てしたんだからよ」
いつものように、軽い調子で、そんな事を言う。

そいつは、遠藤だった。

「何言ってるんだよ。大体、なんでこんな所にお前がいるだよ」
どうして、遠藤が。ここにいるのは変異種のはずだ。天月をさらったやつが、ここにいるはずなのに。お前は、関係ないじゃないか。
「闘おうぜ、って言ったんだ。ヴァリアント・システム、だったか？　大層な名前だよな。要するに、変身ブレスレット、だろ」
遠藤が僕へ腕輪を投げてくる。足元にそれは転がった。
どうしてヴァリアント・システムを知ってるんだ。僕は、この腕輪の事を遠藤に言ってない。
「そいつで変身しろよ。俺と闘え」
「なんで僕がお前と戦わなくちゃいけないんだ！」
そうだ、僕と遠藤が闘うことなんてない。意味なんてない。なんで僕が遠藤と闘わなくちゃいけないんだ。遠藤は関係ない。関係ないんだ。
「何でって、お前だってわかってるんだろ？」
遠藤の腕が変化していく。銀色の毛。鋭い爪。見覚えのあるそれは、あの時の、僕が始めて闘った、狼の変異種のもの。それが、遠藤の腕となり、僕の目の前にある。
は？なんで？おかしい。おかしいだろ。どうして、遠藤の手がそんな風になってるんだ？嘘だろ。やめてくれ。どうかしてる。
「こいつが、俺の正体だよ」
「何言ってんだよ」
タチの悪い冗談だ。
「これまで大変だったんだぜ。我慢するのさ。頭の中で声が響いてんだよ。滅茶苦茶うるさいんだぜ。殺せだの喰らえだの、喚き散らしててよ。必死に聞こえないフリしてた」
「適当な事言うなよ」
「でもな、それも今日で終わりだ。我慢して耐える日は、今日で終

わるんだ。思いっきり暴れられる。最高の気分だ」
「やめてくれよ、遠藤」
「俺の正体は、お前らが変異種って呼んでいるヤツだ。天月をさらったのも俺だ。お前をここにおびき寄せるためにな」
「嘘だ」
「本当に苦労したよ。お前をさ、えっと、なんだっけ。そうだ、エニティレイターってヤツに仕立て上げるのはさ。あの日、ジャストのタイミングでお前を電話で呼び出したり、天月の変身が解けるまでの時間鍵の為に、逃げ足の速いアキラ使ったりよ。腕輪をわざわざお前の前に転がしてみたりもしたな。他にも色々やったんだぜ。全部は、この時のためだ」
「嘘だって言ってくれ」
けど、遠藤は僕の声に答えてくれない。
「俺と闘え。英志。俺とお前で殺しあおう。俺とお前、変異種とエニティレイター、悪の怪人と正義のヒーロー、どっちが生き残るか、確かめようぜ」
くだらない遊びに誘ってくる時のようだ。しかし、遠藤の表情は真剣そのもの。真剣な表情をしている時遠藤は、本気で物を言っているんだと、僕は知っている。遠藤と過ごしてきた経験が、それを告げいている。
遠藤の身体が少しずつだが変異していく。僕の知っている遠藤から、銀色の毛をした、狼の変異種へ。僕が始めて闘った、あの変異種へ。
決定的だ。もう、疑う余地なんてない。
そう、遠藤は、変異種なんだ。
「お前も変身しろよ。さっさと始めようぜ。お前、敵を倒す為にここに来たんだろ？　だったら、早くしろよ」
僕は動かない。動けない。足元にあるヴァリアント・システムに視線を落としているだけ。
変異種となってしまった遠藤のその姿を見たくなかったから、視

線を腕輪に向けている。だって、遠藤が変異種って事は、僕は、遠藤と闘わなくちゃいけないってことで、闘うって事は、僕は、遠藤を――

無理だ。僕にはできない。

「英志、お前、何の為にここに来たんだ？　悪の怪人にさらわれたお姫様を助け出す為だろう？　悪の怪人を倒さなきゃお姫様は助けられない。だったら、答えは一つしかないじゃねぇか」

わかってる。かわってるさ。でも、僕は。

「お前とは、闘えない」

「は？　何言ってんだ？」

「僕は闘いたくないんだ。もう、誰とも」

本当はこんな、廃工場になんて来たくなかった。天月を助け出すのだって、ヴァリアント・システムを扱えるのが僕だけじゃなければ、きっと断っていた。

怖いんだ。この手で、また誰かを殺すと言う事が。おこがましい事はわかってる。でも、怖い。

今まで生きていたその命を、僕の手で奪う。

それが何の為か、僕は明確な決意も理由も、何も持ってない。平和の為とか守る為とか、そんなのは人殺しの理由になりはしない。僕はそう思ってる。

何も意志がないって事は、ただの行動として殺すって事なんだ。意味もなく殺しているのと一緒だ。いや、意味はあるかもしれない。けれど、それは人の命を奪うのに十分なものではない。

そう、これは僕のエゴだ。わがままなんだ。

変異種を殺すということは、やらなきゃいけないことなのかもしれない。でも僕は、嫌なんだ。

「殺したくないんだ。無理なんだ。僕には」

「はぁ？　お前、アキラ殺してるだろ。気取るのもいい加減にしろっての」

「だから！」

そう、僕は内藤君を殺した。だから僕は。
「もう、嫌なんだ。無理なんだよ、僕には。理由もなしに、誰かを殺すなんて」
闘えない。殺せない。そんの無理だ。
それに。
「僕は、お前を殺したくない。だってお前は、僕の、僕の……」
――親友じゃないか。
「理由なら、あるだろ？」
狼の変異種が、遠藤が、言う。
「俺は悪の怪人で、お前は正義のヒーローだ。これ以上に、どんな理由が必要なんだ？　こいつこそがお前が憧れてた現実なんじゃないのか？　だったら迷うなよ。闘え。それがヒーローだろ？　お前の憧れてた、カッコいい、正義の味方だろ？」
違う。違うんだ。僕の求めていた正義は、本当は僕にとって、正義じゃなかったんだ。
世界にとっては正義だったかもしれない。でも僕はそれを認めない。心が拒む。エゴが拒む。
「情けねえヤツだな。本当、お前は少年漫画や熱血アニメなら間違いなく主人公にならないタイプだ」
それは、僕を内藤君に紹介する時に口にした言葉。
「だったら、お前が闘うに足りる理由を作ってやる」
狼の変異種となった遠藤は、天月を縛っている鎖をその手で鎖を握った。
それを引き上げ、天月の身体を宙に浮かす。そして、鋭い爪を、天月の首に突きつける。
「お前が闘わないなら、コイツを殺す」

闘う理由を作ってやる？どうして、遠藤はそこまでして闘いたがる？闘うって事は、どういうことなのか、遠藤にだってわかってるはずだ。

殺しあおう。

そう、遠藤は言った。まさに言葉の通りの事を、遠藤は僕と行おうとしている。

「やめろよ……やめてくれ……」

僕のその声は、消え入るような声だった。

「そういえばよ、お前に貸したＤＶＤの中に、こうやって人質捕られているシーンがあったよな。あのＤＶＤだと、変身を解け、だったっけな」

こんな状況で、遠藤はそんな事を言い出す。まるで、いつもの会話のように。

けれど、遠藤のやろうとしていることは、いつもの、あの平穏な毎日と遠くかけ離れた、非日常。僕が憧れていた、正義と悪の非日常。人質とられて闘いを強制されて、まさにその通りなんじゃないか。

遠藤の言うとおり、僕はこんな状況に憧れていた。でもそれは、何もしならないからだったんだ。それがどんな結果を招き、どんな罪深い事なのか、全く考えていなかった。

だって、闘えば、殺しあえば、どちらかは死ぬんだ。

「あのシーンの逆バージョンだ。こいつの命が惜しかったら、変身しろ。そして、俺と闘え。わかりやすくて、シンプルだろ？」

遠藤の爪が、天月へと僅かに刺さる。ほんの少しだけ、天月の首筋から血がにじみ出た。その気になれば、その爪は容易に天月の喉を突き破る事ができるだろう。そして、それを防ぎたいのなら、僕にエニティレイターになれと、遠藤は言ってくる。

僕に闘えと。殺し合えと。遠藤は僕に迫ってくる。
「早くしろよ。さもないと、このお姫様は喉掻っ捌かれて、オダブツだぜ？」
遠藤の爪が、少しずつ天月の首へ突き刺さっていく。
天月が、死ぬ。そんなのは嫌だ。
だったら遠藤と闘うのか。そんな事は無理だ。
「もう、やめれくれ」
僕はそんな言葉を吐き続けるだけ。けれど遠藤はそれを聞き入れない。ゆっくりと確実に、その爪を喉へ食い込ませていく。
「さあ、早くしないと、天月が死んじまうぜ？」
そう、このままだったら天月は死ぬ。遠藤に殺される。
だったらどうすればいい？答えは一つだ。その、たった一つの答えを僕は受け容れたくない。たった一つしかない答えが、最悪の回答だから。
それなのに、僕は腕輪を拾っていた。ヴァリアント・システムを手にとっていた。
遠藤は本気だ。変異種となって、表情が読み取れなくたって、わかる。僕が闘わなければ、こいつは、僕の親友は、本気で天月を殺すだろう。
「そうだ。それでいい」
爪が止まる。これきっと、天月は助かるんだ。そう、助かるんだ。けれど。だけど。
「迷うな。英志」
遠藤のその声は、何故か、とても優しくて。
ふざけるなよ。なんでそんな風に喋るんだ。僕は、お前と闘おうとしているのに。お前もそうしろって言ってきたのに。なのに。なんで。
「お前に守りたいものがあるのなら、それをどうしても守りたいのなら、迷うな。迷って何も動かなければ、全てが無くなっていく。目の前で消されていくだけだ。だから迷うな。お前の守りたいもの

のために、闘え」
そんな事を遠藤は言うんだ。変異種の姿で、けれど優しい声で。
今まで聴いたこと無いような声で。
おかしいだろ。何なんだよお前。ちくしょう。わからないことばっかりだ。この状況をどうすればいいのか。どうしたら僕の望む答えが出るのか。どうすれば遠藤も天月も死なないですむのか。わからない。だから僕は言われるがままのことをしてしまう。それは、自分の意志で選択しているのと一緒なんだ。
《コード認証。ヴァリアント・システム機動》
僕の身体が変わっていく。右手首から少しずつ、漆黒の鎧を身に纏ったヒーローへ。
「そうだ！迷うな！お前はお前の守りたいものの為に闘え！」
遠藤が天月を縛る鎖を手放した。天月の身体が地面に落ちる。
それと同時に、遠藤は前傾姿勢となり、僕に突撃してきた。

薄暗い廃工場の中で　5

「さあ、始めようぜ！俺とお前の闘いを！殺し合いを！」
鋭利な爪が迫ってくる。
――ちくしょう！
僕は左腕に内蔵されているナイフを宙に射出させる。それを右手で握った。
「ハッ！」
遠藤の爪と、僕のナイフが拮抗する。まるで金属同士がぶつかったような、そんな音が薄暗い廃工場の中に響いた。
変異種がどんなものなのか、僕は知っている。
突然変異で生み出された覚醒因子。それによって、『進化の系譜』を呼び覚ました人間。それが、変異種。突然変異は本人の意思によって起こるものではない。偶然に起こってしまう。ある朝起きたら、風邪を引いているように。ある日、前触れも無く、その人間の中で覚醒因子が目覚めている。
そして、覚醒因子によって呼び覚まされた『進化の系譜』の「人間がなりえた可能性」と、その人間の身体は交わっていく。脳はその生物のものと交じり合っていき、次第に、人間の理性は野生の本能に奪われていく。飲み込まれていく。
いつ、理性をなくして暴走するかわからない、危険な存在。例え今日までは人間と同じ生活を送れても、明日には理性の欠片もなくなっているかもしれない存在。それが、変異種。
もしも誰かを守りたいのなら、変異種を殺すしかない。
「おいおい、手加減なんてしてんじゃねぇよ」
拮抗していたナイフと爪が、そのバランスを崩していく。ナイフ

が爪に押されていく。
「迷うなっていったろう？　このナイフの切れ味は、こんなもんじゃ無いはずだ。出せよ。全力を。そうじゃなきゃ、お前、死ぬぜ。そしたら天月だって死ぬんだ。お前はそれでいいのか？」
そう、僕はナイフを振動させていない。もしそれを起動させれば、遠藤の爪は容易く両断されるだろう。だから、使えない。
闘おうとして、変身して、そして今、闘っているのに。
僕は遠藤を傷つけるのが、怖い。
「覚悟を決めろ。英志」
遠藤の、狼の変異種の顔が、僕の目と鼻の先にある。
「覚悟？覚悟って何だよ。ふざけんなよ。お前ばっかり、知った風な口きいて。なんでこんなことするんだ？こんなことする必要なんて無いじゃないか！どうして僕とお前が闘わなくちゃいけないんだ！」
「お前がそんなヤツだからだよ」
遠藤は静かに言い放つ。
「普通に闘えって言っても、お前は絶対に断るだろ？」
「当たり前だ！」
「だからだよ。俺はお前と闘いたい。いや、闘わなくちゃならないんだ。絶対に、何があってもそうしなきゃいけない。だからお前が闘わざるを得ない状況を作った。そして闘ってる」
「闘わなくちゃいけない？何でだよ。わけわかんないんだよ！」
僕らは毎日顔をあわせていた。遠藤がくだらないことで絡んできて、鬱陶しく思うこともあったけど、でも、僕はそんな遠藤が嫌いじゃなかった。嫌々ながらも、なんだかんだでヒーロー同好会に毎日付き合ってくれていたし、なんだかんだで同好会の存続の為に、色々と考えてくれていた。
僕みたいな、ヒーローに憧れているガキみたいなヤツを、遠藤は受け容れて、認めて、仲良くしてくれていたんだ。小学校の頃から、ずっと。

同じ私立の中学に入って、腐れ縁が続いて、僕らは何年も一緒に過ごしてきた。
遠藤は僕の親友なんだ。遠藤もきっと、そう思ってくれているはずだ。
なのに、何で僕達が闘う必要がある?
「お前はヒーローにならなきゃならないんだ」
そんな事を、遠藤は口にする。
「お前にしかできないんだ。お前じゃなきゃ駄目なんだ。お前がやらなきゃいけないんだ。お前は全ての変異種を倒して、平和を勝ち取らなきゃならない」
「なんで僕なんだよ。どうして僕なんだよ。わからないよ。お前は、何考えてるんだよ!」
「お前は選択しなきゃいけないんだ」
遠藤がナイフを弾いた。その腕が、僕の首筋を掴む。喉が締め付けられる。爪が僕の喉元の装甲にめり込む。
「お前はきっと、全部を守ろうとするだろう。けれどお前は神様じゃない。全部を守る事なんてできない。だから選択しなくちゃならない。そうしなければ、守りたいものは何も守れない。たった一つもだ」
遠藤の爪がさらにめり込む。僕は宙に吊り上げられた。僕の脚が地面から浮く。
「選択しろ。覚悟を決めろ。今、お前が本当に守りたいものは何だ?本当に守るべきものは何だ?変異種の俺と闘わず、人間の天月を見殺しにするのか?俺を生かせばどうなるか、変異種を野放しにしておけばどうなるか、お前はわかっているよな?だったらお前はどっちを選ぶ。どちらかだ。両方は選べない」
それが覚悟だってのか。ふざけんなよ。僕にとって、お前も、天月も、両方大切なんだ。どっちかなんて選べるわけ無いだろ。どっちも死んでほしくないんだ。
「選べないか?それなら、お前は全部を失うぜ。一瞬迷えば、それ

でお終いだ。その一瞬でお前は大切なものを無くす。天月も、お前の父さんも、学校のやつらも、俺はそのうち、全てを殺し始めるだろう。俺の意志とは関係無しにな。それが変異種だ。進化に行き詰った人類が、突然変異という形で得た新たな進化だ」

遠藤が僕を壁に向かって投げつけた。

「が……っ」

僕の身体がコンクリートの壁にぶち当たり、そして床に倒れた。地面に突っ伏した。

なんなんだよ、ちくしょう。ふざけんなよ。なんで、僕にそんな事を選ばせるんだよ。

僕の理性は、とっくに答えを導き出していた。

そう、僕は変異種を、遠藤を殺さなければならない。そうしなければ、天月が死ぬ。天月だけじゃない。下手をすれば、この街の人全てが死ぬかもしれない。変異種ってのは、そういうものなんだ。

遠藤はまだ理性と言うものが残っている。けれど、いつあの虎の変異種のように、赤い豚の変異種のように、暴れてしまうかはわからない。それが十年後なのか、もしかしたら、今すぐなのか。

どちらにせよ、僕が皆を殺させたくないのなら、遠藤を殺す以外の方法は無い。

うるさい。わかってる。わかってるんだ。でも、そんなの、選べるわけ無いじゃないか！

遠藤をこの手で殺す。内藤君の時と同じように、殺す。生きている命をこの手で奪う。自分と誰かの為に、誰かの息の根を止める。

遠藤は、僕がヒーローにならなければならないと言った。もしそうだったとして、そんなものが、犠牲を払わなければ平和を掴み取れないやつが、本当にヒーローなのか？

嫌だ。遠藤を殺したくない。でも、どうしたらいい？どうしたら、殺さなくて済む？

身体を起した。立ち上がる。視線は狼の変異種である、遠藤に向けて。でも意識は全く別のところを向いていた。

「……一ノ宮博士」

僕は弱々しく、その名前を口にする。

恐らく、一ノ宮博士は僕のこの声を聞いているはずだ。エニティレイターの腕輪には、通信機の機能も含まれている。一ノ宮博士が聞いていないはずがない。

「仮想空間に転送してください」

仮想空間に行ってしまえば、もしかしたら、遠藤を説得できるかもしれない。

その結果、どうなるかは全然わからない。ただの思いつきだ。でも、もしかしたら、遠藤を止める事ができれば。僕が必死に一ノ宮博士に頼み込めば。もしかしたら遠藤の覚醒因子の侵食を抑える薬を、一ノ宮博士から貰えるかもしれない。

ヴァリアント・システムに使用されている覚醒因子に利く薬があったんだ。変異種の覚醒因子に利く薬があったって、不思議じゃない。

けれど、声は返されない。

「一ノ宮博士。聞いてるんでしょう？返事くらい、してくださいよ……」

声は一向に聞こえてこない。僕の声だけが、弱々しく空しく廃工場に木魂する。

「無駄だ。いくら呼びかけたって、あの場所にはいけないぜ」

「どうして何も言ってくれないんですか……？」

「だから無駄だって言ってるだろ。仮想空間なんて所に俺たちを転

送したら、そんなこととしたら、人質の意味がなくなっちまう。そんな事を、あのいかれたオヤジが許すと思うか？」

遠藤は何を言ってるんだ。

「あのクソオヤジはな、お前の事をヒーローにしたくてしたくてしょうがないんだよ。お前を正義の味方に仕立て上げる為にな、こんな手の込んだシナリオまで用意してよ。全く、大人ってのはくだらない事ばっかりに無意味に思考を費やしているよな」

遠藤の言っている事は無茶苦茶だ。

「全部、あのオヤジが仕組んだことだ。この場面を作り出すために。エニティレイターとなったお前。人質となった天月。そして、俺を殺さなければならないこの状況。全てはこの時、この為に仕組まれた事なんだ」

一ノ宮博士の声は聞こえてこない。

だから遠藤の言葉が、聞きたくも無いのに耳に入ってくる。

「だからお前は覚悟して闘って選択して、平和を掴み取らなくちゃいけない。それしか方法は無いんだ。それ以外、無理なんだよ。お前ができないと思っていても、それでもやるしかないんだよ」

なんなんだよ、それ。

「さあ、これで選択肢は二つしかなくなった」

遠藤が僕に歩み寄ってくる。

ゆっくりと、確実に。

「このまま俺に殺されて、そして全てが死んでいくか」

答えはもう決まっている。そんなもの、既に理性がたたき出している。

「それとも俺を殺して、そして全てを守るのか」

遠藤と僕は親友なんだ。遠藤がそう思っているのか、もうわからない。けれど、僕は今でもこの瞬間でも、遠藤の事を親友だと思っている。

「選択しろ。覚悟を決めろ。そして、平和を掴み取れ」

なんなんだよ。お前は何でも知ったように言うけれど、僕は何に

もわからないんだ。
お前が敵だって、変異種だって事だけで、僕は頭の中がいっぱいになりそうなのに、それだけじゃなくて闘えだとか選択しろだとか覚悟を決めろだとか、なんでそんな事を要求するんだよ。
「できるわけ、ないじゃないか……」
だって、お前は、お前は、僕の――
「お前なら、できるさ」
遠藤が僕の目の前で立ち止まる。そして、言うんだ。こんな事を。
「だってお前は、俺の親友だろう?」
――ああ、そうか。
その一言で、僕は悟った。遠藤は僕の為に闘おうとしているんだ。僕に決意をさせる為に、僕に選択をさせる為に、僕に覚悟をさせる為に。
遠藤は、僕を迷わせないようにしようとしている。僕の道を、確固たるものにさせようとしている。それが正しい道なのか間違った道なのか、それはわからない。けれど、人を守る為の道だ。僕が選びたくて、でも選べない、道だ。
変異種を殺せない僕に対して、変異種を殺さなければならない状況を作り、そしてその道を進むように、選ばせようとしている。
自らが、死ぬ事によって。
「……遠藤」
「仕切りなおしだ。武器を手に取れ。俺と闘え。俺を殺せ。そして、お前はヒーローになるんだ」
遠藤の思いを知って。
遠藤の決意を知って。
遠藤の覚悟を知って。
僕にはそれを知らないふりは、できなかった。
選びたくなかった。他の道を選択したかった。でも、遠藤はこの道の為に、覚悟をしている。変異種を殺せない僕を、自らの命を糧にすることで、変えようとしている。そしてそれは、僕のためなん

だ。僕が殺せないから、遠藤は、自分が犠牲になる事で――
僕は拳銃を握った。それを遠藤に向ける。重かった。引き金はそれ以上に重い。
けれど、遠藤は死ぬ覚悟で、僕の為に闘おうとしている。
だったら、だったら僕は。
「……お前は、僕の親友だ」
「俺だってそう思ってるさ」
「本当は殺したくなんて無い」
「知ってるさ。お前は、そういうヤツだ」
遠藤は優しく、そう言ってくれる。
「でも、それしか道が無いんだったら」
そう、無いんだ。僕の理性と、遠藤の死ぬ気の決断が、それを物語っている。
だから、だから僕は。
それが正しいのか間違っているのか、わからない。だけど少なくとも、「人」は救える。
だから、僕は。
「僕はお前を、殺す」
「そうだ。それでいい」
僕は引き金を引いた。銃声が廃工場に響く。
それが、僕と遠藤が殺し合う、始まりの合図だった。

薄暗い廃工場の中で　7

跳躍し弾丸を避けた遠藤は、ベルトコンベアに跳び移っていた。
僕は両手に銃を構え、走る。接近しながら遠藤を狙う。
遠藤が再び跳んだ。錆びた機械や所々にヒビの入った壁、埃まみれの床を蹴り、細かく方向転換を繰り返す。弾丸が当たらないように。内藤君の使った、あの戦法だ。
障害物の多いこの場所で、弾丸は何度も遮られる。何度もはじかれる。そうでなかったとしても、細かく方向転換を繰り返す遠藤に、弾丸は当たらない。
だったら、どうすればいいのか。
僕はまだ遠藤のいない場所に弾丸を放った。遠藤の動きを予測したんだ。あいつの動きは、なんとなくわかる。僕を誘導しているような、そんな動き。
遠藤の右肩を、銃弾が貫いた。血が噴き出る。遠藤は失速し、動きが鈍る。
――迷うな。英志。
僕は弾が尽きるまで、二丁の銃を乱射する。遠藤を大量の弾丸が襲った。それらは障害物に遮られ、時には的外れな場所に向かっていきながらも、残りの数発が遠藤の身体に命中した。
血が宙を舞う。遠藤からかすかなうめき声が洩れる。
僕は片方ずつ新しいカートリッジを装填しながら、遠藤の元へ走る。接近する。
遠藤は全身から血を噴出しながらも、動いていた。動きは遅くなっている。けれど、確実に、動いていた。僕と闘う為に。

全身の血は少しずつだが出血量が収まってきている。傷口が修復されているんだ。だから、致命傷が決定的な傷にならない。変異種を殺したいのなら、あの技を使うか、急所を完全に破壊するか。人間の状態なら、それに加えて、頭部を吹っ飛ばすか。

――それ、お前が観たいって言ってた特撮の映画のヤツだよ。たまたま見つけたから、落しといた。

遠藤が地面を蹴り、僕に突撃してきた。両手の爪で僕を切り裂こうと、腕を大きく振るう。僕はそれを銃身で受ける。重い一撃。銃がはじかれた。それでもなんとか一撃目を防いだが、すぐに二撃目がやってくる。僕はそれをまともに喰らった。胴に五つの直線が、斜めに刻まれる。熱を帯びた痛みが、僕の装甲を襲った。

苦痛で動きが止まった僕を、遠藤の拳が襲った。僕の胴体を何度も何度も殴ってくる。僕は後退し、吹っ飛ばされながら、それを喰らっていた。僕の背中がタンクに激突する。遠藤が差を詰めてくる。僕の腹に、十分に加速をつけた遠藤の一撃が、叩き込まれる。

――覚悟を決めろ。

僕は苦痛にもだえながらも、銃口を限りなく接近している遠藤に向けた。ほぼ真横から、遠藤の胴体を撃ち貫く。遠藤の身体が一瞬、跳ねた。その隙に僕は遠藤を蹴り飛ばす。

遠藤の身体は赤い液体を撒き散らしながら、床に衝突した。身体が地面で一回跳ねる。

僕はそれ目掛け、トリガーを引く。遠藤の身体がさらに跳ねた。開きっぱなしの蛇口のように、血が流れでている。

――お前は、ヒーローにならなきゃならないんだ。

銃を撃ちつくす。弾丸を全て遠藤に叩き込む。身体が反れ、絶叫にも似た雄叫びが廃工場の中に響いた。

それでも、僕はやらなくちゃいけない。

僕は弾薬の尽きた銃をしまい、ナイフを手に取った。超振動を起動させる。どんなものでも簡単に切り裂く事のできる、刃物。遠藤の身体だって。それを手にして遠藤へ跳ぶ。背中と足の裏のバーニ

アを吹かしながら、加速する。
遠藤は起き上がり、僕を迎え撃っていた。
僕は遠藤の右腕を切断する。噴出す遠藤の血を、全身に被った。真っ赤な血だ。僕らと同じ、赤い血。それが地面に流れ落ちていく。
遠藤の残りの腕が、僕の首を掴んだ。投げられ、叩きつけられ、地面と僕の背中がぶつかる。さらに遠藤は僕を蹴り飛ばした。僕の身体は血まみれの床を転がり、何かの機材に当たって止まった。
――お前は選択しなきゃいけないんだ。
僕は立ち上がる。遠藤が僕に襲い掛かってきた。残りの腕を僕に振るう。鋭い研ぎ澄まされた爪が、僕を切り刻む為に、迫ってくる。
反応できなかった。僕は殴られ、機械に激突する。めり込むような形になる。遠藤の爪が、幾重にも僕の全身を切り裂いた。黒の装甲は削られていく。痛みが広がっていく。
押し寄せる、苦痛。苦痛。苦痛。逃げ出したくなるほどの痛み。腹部を今、全力で殴られた。機械を破壊しながら、僕の身体は廃工場のコンクリートの壁にぶつかる。
痛みで力が入らなかった。飛行することもままならず、僕の身体は重力に逆らえず、落ちる。全身を床に打ち付けた。辛苦の声が吐き出される。
遠藤が迫ってくるのがわかる。痛くて痛くてしょうがなかった。だけど、立たなきゃならない。そうしなければ、この闘いが、遠藤の決意が、遠藤の覚悟が、無駄になってしまう。
足の裏と背中のバーニアを吹かす。初速度０から、一気に加速する。遠藤の腕をかわし、交錯する際にもう一本の腕もナイフで切り裂いた。
灰色の毛をした獣のような腕が、落ちていく。遠藤の血は止まらない。もう、致死量になるほどには出血しているはずだ。それでも遠藤は立っている。何のために？　僕に、選ばせる為にだ。
身体をくの字に曲げる。足を前方に向け、バーニアの勢いで方向転換。

遠藤は両腕を失いながらも、僕に向かってくる。
――だったらお前はどっちを選ぶ。どちらかだ。両方は選べない。
遠藤に向かって、進む。迎え撃つ。右手には、どんなものでも切り裂く事のできる、超振動ナイフ。遠藤は丸腰。負けるわけが無い。やるしかない。殺すしかない。遠藤を。
――お前なら、できるさ。
僕は遠藤の胴体を、真っ二つに切り裂いた。腰を一閃し、上半身と下半身を切り離す。
遠藤の上半身が、床を転がった。遠藤の下半身が、ベルコトンベアの上に乗った。それらが人の姿に戻っていく。血を噴出しながら、それでも生きようと、肉を再生しようとしている。
僕は、やらなくちゃいけない。
人へと戻った遠藤の表情は、酷く歪んでいた。それでも、平静を装うとしているのがわかる。何故そんな事をするのかは、考えるまでも無い。
人となった変異種を、完全に殺す為には。
――やめて……殺さないで……お願いします……。
僕は迷わない。
――嫌だ、死にたくない……。
覚悟を決めるんだ。
――これが、変異種と闘うということ。
天月のやったように、頭を吹き飛ばせばいい。
僕は遠藤に歩み寄りながら、銃を取りだす。カートリッジを装填する。右手にそれを持ち、銃口を遠藤に向ける。
「そうだ。それでいい」
遠藤は顔をさらに歪めた。もしかしたらそれは、笑おうとしていたのかもしれない。
「俺の最後の頼み、聞いてくれるか」
血を垂れ流して、遠藤の顔は蒼白になっていた。血が足りないんだ。それでも生きているのは、遠藤が変異種だからなんだろう。

僕は無言で頷く。喋ったら、感情が流れ出てきそうだった。
サンキューな、と遠藤は口にする。
「父さんと母さんと美由紀を、守ってくれ。死なせないでくれ。必ずだ」
頷く。
「それとな、英志。お前、死ぬなよ。お前には生きていて欲しいんだ。頼むぜ、本当。絶対に、何があっても、生き残ってくれ」
身体が震えていた。何で震えているか、わかる。エニティレイターは泣けないんだ。だから震える。行き場の無くなった悲しみが、全身を震わせる。
「お前ならヒーローになれるさ。人を守って人を救って、平和な世界を勝ち取る事ができる。お前は神様じゃないから全部は救えないかもしれないけれど、それでも、お前のお陰で誰かが生きることができるんだ。それだけでも十分、上等な正義だと俺は思う」
僕は何もいえなかった。震えて、頷くだけだった。
ここで僕が止まれば、全てが無駄になる。内藤君の死も、遠藤の決意も、そしてこれから起きる遠藤の死だって。
――また明日な。
だから止まれない。遠藤は僕に理由をくれたんだ。人殺しの理由を。それに足りる動機を。他人にとっては、ただの言い訳にしか聞こえないかもしれない。けれど、僕にとっては重く十分すぎるほどの、理由だ。
「わりぃな。お前にこんな、辛い事押し付けちまって」
止めろよ。そんなこと言うなよ。口にはできないから、心の奥底で、呟く。
僕は引き金に置いた指に力を込めた。あと数ミリ。たった数ミリ押し込めば、目の前の命は消える。
「じゃあな、親友」
遠藤は笑っていた。苦痛に歪むことなく、綺麗に、すがすがしいほどに。本当は怖くて仕方が無いはずなのに。死にたくないはずな

のに。

だから僕は、引き金を引いた。

真実と迷いと真っ黒な感情　1

遠藤の葬式には、僕らの学校の生徒が何人も出席していた。僕らのクラス全員と、そして遠藤と交友があった人たち。高三や中学生、大学生までいた。遠藤のことを知っていた近所の大人たちもいる。

棺には遠藤の死体があった。頭を強打して脳内出血で死んでいる事になっていた遠藤の死体は、とても安らかな顔をしていた。葬式屋が、そういう風にしたのだと、皆が思っている。

けれど、僕は知っている。

遠藤を殺したのは、僕だ。

その死体は、作り物の偽者なんだ。

遠藤の両親が泣いていた。田上君が辛い表情をしていた。僕の隣で、佐藤くんが鼻を啜っていた。山崎先生は、目を真っ赤にしている。近所のおばさんがハンカチを口元に当てている。おじいさんが悲しそうな眼差しで棺を見ている。父さんもそうだった。天月だって、悲しそうだ。

僕だけだった。この中で、悲しみの感情を持っていないのは。

殺したのは僕なんだ。脳内出血なんかで死んだんじゃない。僕があいつを切り裂いて、あいつの頭を撃ったから、死んだんだ。こんな偽者の形だけの葬式なんて、僕は何も感じない。

棺を前に、笹倉さんが泣いていた。遠藤が死んだと知ったその瞬間から、ずっとそうだった。泣いている。悲しみが溢れている。笹倉さんは遠藤の事が好きだったんだ。だから、悲しい。

――それに、人はいつ死ぬかわからないんだ。もしその時彼女がいたら、可愛そうだろう？　だから俺は彼女はつくらん。

そういえば、前に遠藤がそんな事を言っていた。あれは、こうなる事をわかっていたからなのか。

僕は確信する。笹倉さんが遠藤のことを好きだったように、遠藤も笹倉さんの事が好きだったんだ。

皆、僕が泣いていないのは、遠藤の死んだという現実を受け止められていないからだと思っている。けど、違うんだ。何も思えないんだ。こんな葬式、世間の目を欺く為だけのものだから。

この葬儀屋にはもう話が通っているらしい。というか、今日のこの葬儀屋にいる職員は全員、政府の工作員なんだそうだ。だから、遠藤の死体に疑問を持たない。

――ああ、こんな事に意味なんて無い。

十分、上等な正義。遠藤はそう言った。

僕は神様じゃない。全部を救うなんて、無理なのかもしれない。いや、多分、確実に、不可能なんだ。だから僕は誰かを犠牲にする覚悟を持たなくちゃいけなくて、だから遠藤はその後押しをした。

遠藤を殺した僕は、もう、引き返せない。

それは一ノ宮博士が仕組んだ事だ。遠藤はそう言っていた。けれど、遠藤が僕の為にたった一つしかない命を使って、やってくれた事でもある。

けど、それは僕の中から、ぽっかりと「何か」を奪っていった。それが何かはわからない。でも、「何か」が無いと感じる。欠落していると直感する。

笹倉さんは女子たちに慰められながら、なんとか棺から離れていった。

もし、遠藤を殺したのが僕なんだと彼女が知ったら、一体どんな反応をするのだろう。

怒るだろうか。もっと悲しむのだろうか。それとも、僕の事を憎むのだろうか。もしかしたら、僕の事を殺しに来るかもしれない。

「おい、久坂」

田上君だ。右隣に座っていた彼は、僕の顔を見つめながら言う。

「何？」
「お前、大丈夫なのか？」
「何が？」
「何がって、なんか、変に笑ってるからさ」
田上君に言われて、僕は気が付く。
「……本当だ。何でだろう」
どうしてだが、自分でもわからない。けど僕の口元は確実に笑みを作っていた。
「久坂、お前」
「大丈夫だよ。何でもないから。全然、大丈夫だから」
僕はそう言いながら、席を立った。
「おい、どこ行くんだ」
「帰るよ。僕」
もうこの場にいても、どうしようもないと思った。
無意味だ。時間の無駄だ。全く価値が無い行為だ。
「久坂……」
田上君は僕の事を引きとめるような素振りを見せたが、僕はそれを無視して、葬儀場から出た。

「久坂君」
僕が一人で道を歩いていると、背後から声が聞こえてきた。天月の声だった。
「戻った方がいいよ。まだ、葬式終わってないだろ？」
けれど彼女は首を横に振る。
「僕だったら勝手に向こうが勘違いしてくれるからどうにでもなるけどさ、君は違うだろ？だから早く、戻った方がいいって」

けれど天月は首を横に振るだけだ。
「一人でいたいんだ。面倒くさいんだ。誰かと一緒にいるの」
悲しみの感情を顕にしている人といるのは、疲れる。嘘の死で泣いているのを見ると、何故だから苛立ってくる。あの人たちは何も悪くは無いのに、無性に腹が立ってる。そのくせ心の中は何も思わない。苛立ちながら、心は何も感じていない。苛立ちに疲れるだけだった。
天月だって、悲しんでいる。今までの彼女では考えられないくらい、遠藤の死に動揺している。これまで何人もの命を葬ってきたはずの彼女が、遠藤の死を受け容れがたく思っている。
それを見ていてて、疲れる。
「貴方を一人にはさせない」
天月はそんな事を口にする。
「約束、だから」
「約束?誰との?」
「遠藤君が、彼が言ったの。貴方を支えてくれって」
遠藤は天月にそんな事を言っていたのか。
あいつ、とんでもないお節介焼きだ。だからあいつは、僕にこの道を選ばせてくれたんだ。選ぶだけの理由をくれたんだ。そして、自分が死んだ後のことまで気にしてくれている。
「彼はずっと貴方のことを心配していて、だから私に、貴方の事をよろしく頼むって言って。貴方を巻き込んでしまったのは、私なのに」
「違うよ」
わかる。あいつは、いいやつだ。最高の親友だ。
きっと、僕が現実に押しつぶされてしまわないように、だから天月に頼んだんだ。僕の事をどこまでも心配してくれていたんだ。あいつは。
「あいつが、僕のために決めた事なんだ。だから君のせいなんかじゃない。それに、僕一人でも大丈夫だから」

けど、今はただ、遠藤の気持ちも天月の善意も鬱陶しいだけだった。悪いとは思うけれど。

「ごめん。今は一人でいたいんだ」

僕は踵を返し、天月を振り返らず、歩く。

一ノ宮博士の所に行こうかと思った。聞きたい事は山ほどあった。一ノ宮博士は遠藤が変異種だって事を、多分知っていた。二人は協力していたんだと思う。それを確かめたかった。

それに、一ノ宮博士は遠藤の死を、なんとも思っちゃいない。全く気に留めていない。

家じゃ駄目だ。父さんが帰ってくる。近所の家の人は皆、遠藤のことを知っている。僕に気を使って、腫れ物を障るように扱ってきて、そして僕は苛立ってしまう。

一人になりたかった。もしくは、苛立たない場所に行きたかった。それは廃工場だっていいし、あの真っ黒なキャンピングカーでも構わない。どこだっていい。とにかく、苛立たない場所ならば。

天月の足音は聞こえてこなかった。

僕は歩く。道を曲がって横断歩道を渡る。学校の傍を通る。グランドでは、体育着を着た生徒がサッカーをしていた。体育の授業なんだろう。今日は平日だ。僕らだって、本当は葬式なんかやってないで、つまらなくて退屈で、けれど平和な授業を過ごしているはずだった。遠藤だってそうだ。

僕が遠藤を殺したから、それが行われていないだけで。

遠藤のことを知らない人間にとっては、当たり前の毎日が続いているだけだ。朝礼で何か、担任の先生に一言いわれ、ゴシップのネタが増える。それくらいだろう。

川原にたどり着く。

「おーい、久坂くーん」

黒いキャンピングカーの側に、一ノ宮博士が立っていた。いつもどおり、変わらない格好で。髭と髪は相当伸びている。外見を気にするような人だとは思わないけれど、邪魔だと思わないのだろうか。

僕は坂を下りて、一ノ宮博士の下へと行く。
「君が何でここに着たのか、大体のことは察しがついているよ」
そうだろう。この人は多分、僕がどんな性格をしていて、どんな行動をするかどうか、考えた上で遠藤を協力させたんだろうから。
「中に入りなよ。立ち話もなんだし」

真実と迷いと真っ黒な感情　2

キャンピングカーのドアを開け、一ノ宮博士は言った。僕の返事を待たずに中に入ると、ソファーに座り、ノートパソコンを開いた。きっと拒否権なんてのは無いんだろう。どっちにしろ、僕は中に入るけれど。

「さあ、さて。何から話そうか。何から知りたい？今、僕はとても気分がいいんだ。なんだって答えてあげるよ」

僕は向かいのソファーに座る。

「最初から、僕が天月と出会って、僕がエニティレイターになって、内藤君が死んで、遠藤が死んで、それって全部、一ノ宮博士は知っていたんですか？」

遠藤は言った。全ては一ノ宮博士が仕組んだ事だと。

最初から全部、この人は知っていたんだ。僕にエニティレイターとしての適正があることを。遠藤が変異種だって事を。内藤君が変異種だって事を。そして、僕が彼らを殺せば、どんな感情を抱き、どんな選択をするのかを。

「ああ、そうだよ。君が仮想空間に始めて転送されたことがあっただろう？あの時点から既に、計画は始まっていた。君をヒーローに変えるための計画がね」

「僕をヒーローにする？」

「そうさ。君は人類の救世主となるんだ。君にしかできない、君がやらなければならない事なんだ。掛替えの無い友人をその手で殺めた君は、引き返す事などできなくなる。だから、彼にはその犠牲となってもらった。平和の為の、正義の為の犠牲にね」

やっぱりそうだ。思った通りだ。

「君が仮想空間に転送されたのはシステムの誤作動なんかじゃない。僕がそうしたからだ。君をヒーローにするために、僕らの世界を知っておく必要があったからだ。天月の覚醒因子があのタイミングで

暴走したのも偶然じゃない。彼女が戦いの前に打ち込んだ薬は、因子の侵食を加速させるものだったからだ。内藤光という少年を仮想空間に転送できたのは、君の友人の協力があったからだ」

目の前のこの男は、全てを思うがままに動かしていたんだ。

僕は自分で選んでいるつもりでいた。でもちがう。何もかも、この男の思惑通りに選択を繰り返していただけだったんだ。

「そして、君が彼を殺したのは、僕がそうなるように仕向けたからだ」

僕はソファーから立ち上がる。身体が勝手に一ノ宮博士の胸倉を掴んでいた。

「君はもう引き返せない。引き返せるような人間ではないだろう？君の一番の友人が、そう言っていたよ。君は本当にいい友人を持ったね。僕の思い通りにならければ君の事を消すと言ったら、彼は快く協力してくれた」

「あんたは……」

僕の右手は、握り拳を作っていた。

そのくせ、心は空っぽだった。この男が憎い。憎くて憎くてたまらない。それなのに、この状況を冷めた視点でとらえている僕がいる。

「僕を殴るかい？それもいいんじゃないか。僕は今、最高に気分がいいんだ。それくらいなら笑って許す事ができる。しかし、君は引き返せない。戻る事はできない。君は知ってしまったんだ。変異種を倒さなければならないと言う事を。君はやらなければならないんだ。変異種を殲滅し、人類を救うと言う事を」

胸倉を掴んだまま、拳を握ったまま、僕は一ノ宮博士の声を聞いている。

「それが君の宿命なんだ。君はそのために産まれてきたんだ。大変異から人々を救い、特異種を殲滅し、世界に、人類に平和をもたらす、ヒーローとなるために」

「あんたは、何を言って……」

「僕が何を言っても、君は心の底からは信じないだろう。だったら、君が父親だと思っている人物に訊けばいい。あの人に訊けば、君は全てを知ることになる。自分が何のために産まれてきたか、何のために存在しているか。そして君は手に入れる事になるだろう。進化の力を。限りない、究極の力を」

「あんたは、僕に何をさせようとしてるんだ」

僕の宿命？父さんが全てを知っている？何のために存在しているか？進化の力？限りない究極の力？

この男は僕を導こうとしている。けれど、それがどんな結果なのか、僕にはわからない。

「さっきも言っただろう。君に正義の味方になって欲しいのさ。人類を守る、ヒーローにね」

飄々と、さも当然のように、そんな事を言う。

「何が正義だ。何がヒーローだ。ふざけんな。あんたの言ってる事は、ただの人殺しじゃないか！」

例えその結果、誰かを救う事ができたとしても、その事実だけは変わらない。

誰かを守る為に内藤君を殺し、誰かを救う為に遠藤を殺した。それが正義だなって、やっぱり僕は思えないんだ。

求める正義がわらなくなって、信じたい正義がわからなくなって、それでもわかる事がある。

今の僕には、正義なんかない。

なあ、遠藤。僕はやっぱりガキなんだよ。お前が言ってくれた言葉、誰でも救えるわけが無いって言葉、僕にはどうしても、正義だとは思えないんだ。全部を救いたいんだ。できない事だって、わかっているけれど。

「どうして君たちはそうも、奇麗事に縛れるんだい？変異種を殺さなければ、どうなるか、わかっているはずなのに。殺さずにはいられないだろうに。そのくせ、奇麗事に苦しめられている。馬鹿らしくて、笑えてくるよ」

そんなことはわかっている。知っている。僕の考えなんて、所詮は奇麗事だ。それを割り切らせる為に遠藤は死を決意したんだし、僕はそれを消し去る為の覚悟を決めたはずなんだ。

人殺しの選択をした。変異種を殺す覚悟はある。人のために、人を殺すのはもう、迷っちゃいけない。

けれど、割り切れない。割り切れないんだ。

「どっちにしろ、君はもうヒーローになるしかない。君自身でその道を選ぶだろう。あとは全てを知るだけだ。君が本物のヒーローになるために」

「……ヒーローって、なんなんですか」

「人類を救う、英雄の事だよ。変異種という敵から、全ての人類を守る、絶対の救世主（メシア）。それがヒーロー。それが君。全ては陣内博士――いや、君の父親が知っているよ。訊いてみれば、全てがわかる」

目の前のこの男は笑っていた。笑っていたんだ。

――こいつ！

けれど、僕は殴らなかった。一ノ宮博士の胸倉を、僕は手放していた。

「ふぅん。意外だったよ。君はてっきり、殴ってくるものかと思っていた」

「あんたなんか殴っても、何も変わらない」

もしこの男を殴って全てが解決するのなら、何度だって殴ってる。でも、殴ったって何も意味が無いんだ。

「帰ります」

一人になりたい。けれど僕は、家に帰って父さんに訊いているだろう。知らなければならない。命令されている訳じゃない。けれど、知りたい。

僕の宿命を、父さんの知っていることを、進化の力を、僕は知りたい。

クソ。ちくしょう。結局僕は、こいつの思い通りにされようとしている。

「全てを知れば、君は必ずヒーローとなる道を選ぶ。確実にだ。君はそういう人間のはずだからね」
「それも、遠藤が言っていたんですか」
「ああ。そうだよ」
だったら僕の結果は、もう既に決まっているのかもしれない。

真実と迷いと真っ黒な感情　3

家に帰ると、鍵が開いていた。父さんはもう帰ってきているみたいだ。
玄関で靴を脱ぐ。廊下を進み、リビングのドアを開ける。
父さんがいた。ソファーに座って、僕に背を向けている。
「おかえり。英志」
振り向いた父さんの顔は、とても悲しそうだった。
父さんは全部、知ってたんだ。
僕はそう、直感する。父さんは全部知っていたから、だから多分、僕が始めて仮想空間に飛ばされたあの日、「すまない」と言ってきたんだ。
「僕の宿命って、何？僕の存在意義って、何？進化の力って、何？」
知りたい。知りたくてしょうがない。
「全部、教えてよ」
僕は父さんに訊く。父さんはわかるはずだ。全てを知っているから。
例えそれを訊いた結果があの男の思い通りとなろうとも、僕は知らなければならない。そんな、核心に近いものがあった。
「……わかった」
父さんは本当に辛そうに、頷いた。

「お前は、試験管の中で産まれたんだ」
静かに、けれどしっかりと父さんは口を開く。まるで、自分自身に言い聞かせるように。
――試験管の中、ね。
つまり、僕は何かの目的で作り出されたってことだ。それの目的が僕の存在意義。あの男は、そう言いたかったんだろう。
なんだろう。変な気分だ。結構な衝撃的な事のはずなのに、僕の心は特に何も感じていない。
「変異種の中でも特別な、特異種の遺伝子を元に創られた存在。それがお前だ。政府が、俺達が、対変異種の決戦用兵器として生み出したのが、お前だ。相手が並みの変異種ならば造作も無く、相手が特異種ならば互角以上に闘う為に」
「特異種って、何？」
「特異種と言うのは、全ての『進化の系譜』を自由に引き出す事のできる変異種のことだ。同時にいくつもの『進化の系譜』を覚醒させ、その身体を無限に変異させる事ができる。三十年ほど前に捕獲した特異種の研究データと遺伝子を元に、お前が産まれた。他にも百体の実験体を生み出したが、結局は特異種の因子に適合できず、死んでいった」
父さんは淡々と語る。僕は事実だけを受け止める。それだけで十分だと思った。
「お前がエニティレイターの適正があったのは、特異種の因子を引き継いでいるからだ。通常の人間には無い、特別な因子を持っているからだ」
ああ、だから一ノ宮博士は僕をエニティレイターにさせようとしていたのか。
「だったら、どうして僕は研究施設みたいなところにいないの？」
「俺が、お前を連れて政府の施設を脱走したからだ」
「脱走？」

「お前が産み出されて一年後、事故が起こった。仮想空間の起動テストで、俺は大切な人と親友を失った」

父さんは言葉を続ける。

「五次元的に限りなく隣接した場所に、仮想空間を作り出す。それは、一歩間違えば俺たちの暮らしているこの空間に、さらに別の空間を上書きする事になる。その結果、次元に歪が生じ、空間はかき消される。そこにあるものは全て消失する。仮想空間が本物の空間となってしまう。親友は俺を庇って死に、そしてあの人は身体の半分以上を失った。その人が死ぬ間際に、俺は言われたんだ。『誰も悲しまない世界を掴んでくれ』と。だから俺は、お前を連れて、施設を脱走した。あの場所では掴めないと思った。自分の探究心を満たす為だけに、で何百、何千の命を犠牲にしてもなんとも思っていなかった自分を変えなければ、そんなものは掴めないと思った」

過去に、父さんが何をしていたか。話を聞かなくても、大体見当は付いた。僕が試験管ベイビーならば、僕以外の死んだと言う九十九人だってそうだろう。そして、それ以上の『実験体』がいるはずだ。

「次元の狭間で、あの人は、可能性の世界を見たんだそうだ。誰も悲しまない世界を。だから、いつか、掴んでくれと、あの人は言ったんだ……」

「あの人って」

「久坂翔子。いつもお前に見せている、写真の人だ」

「母さんってこと？」

「そうだ」

僕は思い出す。いつも、母親だと言われていた写真を。数少ない、写真を。そういえば、僕と一母さんが緒に映っている写真は一枚もなかった。一切の頃の話らしいから、もちろん記憶にすらない。

「おこがましい事は理解している。許されない罪を背負っている事はわかっている。だが、あの人は俺に気づかせてくれたんだ。命の価値など全く考えず、わずかなデータの為に大量の命を奪うことが、

間違っているという事を。親友が俺を庇ってくれたんだ。その命を投げ出して。それを知って、間違ったまま生きることが、俺にはできなかったんだ」

苦しそうに、喋る。思い出すことすら、きっと辛いんだろう。

「俺はお前ともう一人、亡くなった親友の娘を知り合いに預け、各地を動き回った。整形を繰り返し、いくつも名前変えて、ようやく政府の目をごまかす事ができた。お前が母親だと思っていたのは、俺の昔の友人だ。お前はあの、俺の親友の娘と仲がよかったらしい。よく、一緒にヒーロー番組を観ていたそうだ。だが、政府の目を撒いた俺が、お前達を引き取るために友人の家を訪れると、親友の娘はいなくなっていた。さらわれたらしい。犯人は、政府の連中だ。研究の為に、外国を含めた各地で子供を拉致し、人体実験やヴァリアント・システムの起動実験を繰り返していたようだ。確かあの子がいなくなったのは、お前が七歳の頃だったか」

「父さん、ちょっとまって」

僕の頭の中に、ある一つの考えが浮かぶ。

父さんの親友の娘。つまり女の子であり、僕が七歳の頃に政府の機関にさらわれていた。ヴァリアント・システムを扱う為の、訓練を受けている。

「その子の名前は？」

「天月葵だ」

そういうことだったのか。

これでまた、謎が一つ解けた。

「あの子がこの街に来たことを知ったときは、素直に嬉しかったよ。生きていてくれてな。けれど、あの子は知らなくてもいい世界を知ってしまった。本来ならば、あたりまえの女の子でいられるはずだったのに。知らなくてもいい世界で、彼女は闘っていた。あの子をそんな世界から救いたかった。けど、あの子にはあのまま、闘っていて欲しかったよ」

「それ、どういう意味？」

「一ノ宮がお前をエニティレイターとして闘わせる為に、この街に来たことは知っていた。だから、あの子を犠牲にしてでも、お前を巻き込みたくないと思った。あの子が闘ったままでいれば、お前が闘わなくてもいいから。なあ、英志。俺はお前の事を本当の息子だと持っているんだよ。おこがましいだろう？　俺の都合で勝手に産み出したお前を、本当に大切に思っているんだ」

知ってるよ。父さん。父さんが、僕の事を大切に思ってくれてることなんて。

「お前に闘って欲しくなかった。だがお前は、闘ってしまった。あの遠藤という子は、お前の為に決断をしてしまった。お前はもう引き返さないだろう。俺が親友を死なせ、あの人を死なせ、政府の施設から脱走したように、お前はあの子の死を背負って、闘うだろう？」

そうだ。その通りだ。僕はもう決めた。絶対に引き返さない。そんな選択肢、存在しない。

父さんは父さんなりに、追い求めるものがある。僕には僕なりの、求めるものがある。

「……ありがとう。話してくれて」

辛かったと思う。思い出したくも無かった事だったんだろう。それでも、話してくれた。過去の思い出したくもない事を引き起こして、僕に話してくれた。

「あ、ああ……」

父さんはまだ何か口を開こうとしていたが、黙って俯いた。それから暫く、無言が続く。

何かを喋る気にはなれなかった。それは多分、父さんも一緒だ。

静けさを破ったのは、携帯電話の着信音だった。僕のポケットから、音が響いている。

僕は無言で、携帯を開く。一ノ宮博士からだった。僕は通話ボタンを押す。

「久坂君！聞いてくれ！」

とてつもなく大きな声が、僕の耳に響く。
一体どうしたんですか、そう言う前に、一ノ宮博士が叫ぶ。
「君の家に変異種が向かっている！移動速度が早すぎて、仮想空間に転送できない！すまないが、迎撃して動きを――」
直後、目の前の窓ガラスの割れ、何かが家の中に突っ込んできた。

真実と迷いと真っ黒な感情　4

僕は何かに体当たりをされていた。身体が壁に激突して、背中に衝撃が走る。

「が……っ」

僕の目の前には、大きな翼を背中に生やした生き物がいた。人のような身体に、巨大な翼。両腕は太く、巨大な爪を持っていた。

――変異種！

多分、鳥の変異種だ。そいつが僕の身体を壁に押し込んでいる。骨の軋む音が聞こえた。

「大丈夫か、英志！」

父さんが叫んだ。一瞬、変異種の意識がそちらに向く。僕を圧迫する力が緩む。僕はなんとか腕輪を操作して、解除コードを打ち込んだ。

《コード認証。ヴァリアント・システム起動》

エニティレイターとなった僕は、鳥の変異種を蹴り上げた。巨大な翼を持ったそれが、天井に激突する。

僕はナイフを握り、跳躍する。変異種に向かって、ナイフを振りかざす。

翼が動いたのが見えた。変異種の身体にナイフを衝きたてた瞬間、真横から叩かれる。僕の身体は一秒もしない内に壁に当たり、そして床に落下した。

「クソッ！」

僕は起き上がり、拳銃を手にした。銃口を変異種へ向ける。

だがすぐに引き金を引けなかった。

――あれだって、人だ。

引き金を引く指が重く感じた。けれど。

――それでも、覚悟を決めたんだ！

拳銃から弾が吐き出される。数発の弾丸が、変異種へと直進する。

変異種はそれを受けながら、僕へ突っ込んできた。弾丸は変異種の肉を抉り、貫通する。血を噴出しながらも、変異種は僕に向かってくる。

変異種の身体が僕に直撃した。また、壁と変異種にはさまれる。かすかなうめき声が、僕の口から漏れる。

「英志！」

父さんの声が聞こえる。

「ここから離れてて、父さん！」

僕は変異種の身体を押し込みながら、叫ぶ。

その時だった。

「お前も、俺と同じ気持ちを味わえよ」

変異種が、そういった。

――は？こいつ、何を言って……

変異種のいった言葉が一体何のことなのか理解する前に、変異種の身体が僕からどいた。

そして。

変異種は父さんへ、向かっていった。

まさか、変異種は、父さんを……！

「やめろ……」

銃を撃った。弾丸が変異種の背中に命中する。だが、そいつはとまらない。真っ直ぐに父さん目掛けて。

――なんなんだよそれ、ふざけんな！

僕はバーニアを吹かした。変異種へ手を伸ばす。父さんの腹を切り裂こうとする変異種に。

「やめろ！！」

叫んだと同時に、血飛沫が舞った。僕の手が変異種を掴む。僕の身体に血が降りかかる。

変異種の手が、父さんの身体を裂いていた。腹には深すぎる傷。血を噴出しながら、父さんは倒れた。鈍い音が聞こえてくる。

僕の手はだらり、と力を失う。足は僕を支えれなかった。膝をつ

いた床には、真っ赤な血が広がっている。
なんなんだよ、これ。
変異種が僕を蹴り飛ばした。僕の身体はイスや机にぶち当たる。
天井が見えた。そこから血の滴が僕の顔に落ちてくる。
「嘘だろ……？」
僕は起き上がった。目の前には、鳥の変異種がいた。その向こうで、父さんが倒れていた。血を流して、僅かに身体を呼吸させながら。
――選択しろ。覚悟を決めろ。今、お前が本当に守りたいものは何だ？本当に守るべきものは何だ？
遠藤の言葉が頭の中で反芻される。
決めたはずだったのに。守りたいものの為に、変異種を殺すって決めたはずだったのに。
――一瞬迷えば、それでお終いだ。その一瞬でお前は大切なものを無くす。
僕は迷ってしまった。引き金を引く事を一瞬、躊躇った。もしも迷わなければ、変異種の手は、父さんを傷つけなかったかもしれないのに。
「何、驚いてんだ」
鳥の変異種が口を開く。
「お前だって、同じことをやってるだろ？」
僕は腹を殴られた。膝が折れ曲がる。抵抗する気力が起きなかった。
父さんの身体からは内臓が見えていた。グロテスクなそれが、傷口からこぼれ出ていた。父さんの目は僕を見ている。エニティレイターとなった僕を、悲しそうな目で見ている。
変異種がその大きな手で、僕の腕を掴んだ。僕は吊り上げられる。
「お前はここで――」
そう言いかけた変異種は、何かに向けて舌打ちをした。
「――わかったよ」

変異種は僕の身体を地面に叩き付けた。そして、ガラスの割れた窓へと向かい、そして飛び去っていく。

真実と迷いと真っ黒な感情　5

「……英志、いるのか……」

今にも消えてしまいそうな声が、僕の耳に届いた。僕はヴァリアント・システムを解除し、父さんの元へと、歩く。

「いるよ。ここにいる」

父さんから流れでる血は、止まりそうに無い。傷口は深すぎて、内臓も傷ついている。たいして医学の知識の無い僕だって、父さんが助かりそうに無いって事はわかる。

「お前に、渡すものがある」

父さんはそういうと、ポケットから腕輪を取り出した。それはヴァリアント・システムとよく似ていて、けれど決定的に何かが違っていた。漠然とした、具体的には説明できないけれど、気配のようなものを、その腕輪からは感じる。

「これは、エヴォルヴ・システム……特異種のデータを元に創り上げた、お前にしか扱えないものだ……」

父さんの口からは血が流れ出ていた。それでも、最後の力を振り絞って、僕に語りかけている。

僕は腕輪を、エヴォルヴ・システムと呼ばれるそれを受け取った。

「この力の使い道は、お前が選べ」

「僕が、選ぶ」

「そうだ。他人の言う何かの為じゃなく、お前の思う何かの為に、この力を使え。それが例えどんな事でも、それが、お前にとっての正義となる。俺は、そう信じている」

「僕にとっての正義……？」

「結局、全ては自分の意志で決めるしかない……勝手なことを言っているのはわかっている。だが、お前にはそうして欲しい」

父さんの身体から力がなくなっていく。僕はそれを見ていることしかできない。

どうして。僕は守る為に、決めたんじゃないのか？そのために遠藤を殺したんじゃないのか？それなのに、どうして父さんが死のうとしているんだ？

おかしい。間違ってる。こんなの、絶対に狂ってる。

「……すまない。お前に、辛い事ばかり押し付けて……できればお前には、普通の生き方を……して……欲しかっ……」

その目から、光が消えた。力を失った腕が血の水溜りに落ちて、音を立てた。

父さんが、死んだ。

何も聞こえない。静かだった。

人が死ぬと言うのは、こんなにも静かなものなんだ。そこにあったはずの命が、消える。けれど、世界はそれに対して嘆きも悲しみもしない。ただ、命が消えた、その事実を突きつけるだけ。

「父さん……」

僕は結局、守れなかった。決めたはずなのに。覚悟をしたはずなのに。それでも僕は、大切なものを守れなかった。

涙はでなかった。虚無感だけが、僕の身体を支配する。

何も、守れなかったんだ。守りたかったのに。だから、遠藤を殺したのに。大きすぎる犠牲を払って、それでも迷って、だから、僕は、僕は……。

そしてこみ上げてくるのは、黒い感情。父さんを殺した変異種に対する、真っ黒な憎悪。僕の欠落した「何か」があった部分に、それが流れ込んでくる。

「……ろしてやる……」

こんな感情に流されちゃいけない。遠藤と父さんが僕を信じてくれたんだ。僕は正しく生きることができるって。

わかってるさ。知ってるさ。でもさ、許せないだろう？父さんを殺したんだ。あいつは。だったらどうする？答えは一つしかない。

ああ、そうだ――

この感情を止める事ができない。絶え間ない怒りと憎しみを、押

さえつける事ができない。
――あいつを、あいつを、あいつを、あいつを、あいつを！
「殺してやる！」
僕は叫ぶ。その手には『力』があった。僕が正しく生きれると信じてくれた、父さんから託された『力』が。それなのに僕は、間違おうとしている。そして僕は、それを望んでいる。
「殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる――！」
駄目だ。僕はこの衝動を抑えられない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1181v/

ヒーロー　BloodyJustice

2011年7月27日03時26分発行